指定研究

大谷文書中の漢語資料の研究

―『大谷文書集成』Ⅳにむけて―

代表　都築晶子

北村高　渡邊久　小田義久　市川良文　猪飼祥夫　李濟滄

一、はじめに
二、麴氏高昌国時代の写経行業について ―大谷文書を中心にして―
三、大谷文書の漢文医書類の概要と整理

一、はじめに

龍谷大学大宮図書館蔵大谷文書中の漢語資料約六〇〇〇点のうち五〇〇〇点については、小田義久氏によって整理が進められ、その成果は『大谷文書集成』Ⅰ～Ⅲ[1]として順次公刊されてきた。しかしながら、大谷文書の従来の分類名で言えば、「胡漢両語文献」（大谷文書七〇〇一

～七五五二号)、「流沙残闕」(大谷九〇〇一～九一六六号)、「橘資料」(大谷一一〇〇一～一一一六三号)及び別置「極小断片」(大谷一〇〇〇一～一〇六六八号)の中の漢語資料約一〇〇〇点については整理が終了しておらず、『大谷文書集成』Ⅰ～Ⅲには未収である。その後、小田氏を代表とする仏教文化研究所の共同研究によって「流沙残闕」の整理を終え、その成果の一部が論文として発表されたものの[2]、「胡漢両語文献」「橘資料」「極小断片」については依然として未公開のままである。

本指定研究は、この「胡漢両語文献」「橘資料」「極小断片」について移録・同定作業などの整理を進め、「流沙残闕」も含めて『大谷文書集成』Ⅳとして編纂し、公刊することを目的とする。この『大谷文書集成』Ⅳの公刊をもって、龍谷大学大宮図書館蔵大谷文書中の漢語資料はすべて整理を終えることになる。

ところで、周知のように大谷文書は大半が零細な断片であり、従ってそこに記されている文字数も少なく、仏典などの写本の同定は困難をきわめてきた。だが近年のコンピューター技術の飛躍的な展開によって、仏典・道経をはじめ、多くの中国古典籍の検索が可能となり、大谷文書の同定も急速に容易なものとなった。ただし、とくに一九八〇年代に刊行された『大谷文書集成』Ⅰ、Ⅱについてはパソコン検索が想像もできなかった時代の所産であり、写本については仏教、道教、文学、薬方、占書、性質不明などに大まかに分類されてはいるが、ほとんどが同定されていない。ここ数年の間に、『大谷文書集成』として公開された主に仏典・道経写本について、中国の研究者などによって同定作業が大幅に進められてきた[3]。しかし、やはり厳密な意味での録文作成・同定作業などは、原文書を所蔵している龍谷大学の責務である。本指定研究では、時代的な制約のために題目不詳のままになっていた写本の同定も併行して進めて『大谷文書集成』Ⅰ、Ⅱの不備を補いつつ、『大谷文書集成』Ⅰ～Ⅳの目録を作成する予定である。つまりは大谷文書中の漢語資料目録となるが、目録が完成すれば大谷文書・漢語資料の全体像を見通すことが可能となろう。

とはいえ、なお依然として多くの課題が残されている。これも周知のように、大谷探検隊将来のトルファン文書は戦中・戦後を通じてさまざまな事情から国内外に散逸した。たとえば、中国の旅順博物館には数万点に及ぶ大谷探検隊将来の敦煌・トルファン文書が所蔵されており、二〇〇六年には仏典・道経の約二六〇〇〇点のうちほぼ一四〇〇〇点について、移録と同定を行い、写真を付した旅順博物館・龍谷大学共編『トルファン出土漢文仏典断片選影』(法蔵館)が公刊された。それによって、龍谷大学大宮図書館蔵の大谷文書と綴合するものも明らかになり、

また大谷探検隊よる西域調査直後の一九一四年に刊行された『西域考古図譜』[4]に図版が掲載されていても、現在は所在不明とされてきた文書も含まれていることが判明した。従って『大谷文書集成』Ⅲに掲載されている八〇〇〇番台の『西域考古図譜』所収文書の一部は、旅順博物館に所蔵されていることになる。また、ベルリン国立図書館に所蔵されているドイツ探検隊将来のトルファン文書にも大谷文書と関わりのあるものが含まれている。[5]さらに、中国におけるトルファン地域の発掘調査が進められ、膨大な点数の文書が発見されただけでなく、大谷探検隊が発掘した墓域の再調査も行われて大谷文書の断片とみられる文書群も明らかにされた。龍谷大学大宮図書館蔵の大谷文書については、これらの国内外に散逸したもの、各国が収集したもの、新たに発掘されたものなどとの関わりの中で、総合的に整理・研究されなければならないだろう。

また、コンピューターによる検索が可能となった仏典・道経をはじめとする古典籍の写本は同定が比較的容易であるが、当時の人々の日常に密着していた医家類、天文算法類、術数類などの写本については、今なお電子化が実施されておらず、依然として同定が困難である。敦煌文書についてはこれらの写本の整理も進んでいるものの、大谷文書は零細な断片から構成されるため、手がかりはきわめて乏しい。

ここに掲載する二つの論考は、こうした課題に取り組んだものである。小田義久「麹氏高昌国時代の写経行業について」は、六～七世紀にトルファンを支配した麹氏高昌国の時代に行われた写経の「識語」について、大谷文書を中心に旅順博物館蔵の大谷探検隊将来トルファン文書の他、日本各地、中国、ドイツ、イギリスなどに分散しているトルファン文書中の写経の識語を抽出し、麹氏高昌国時代の写経のあり方を通観したものである。猪飼祥夫「大谷文書の漢文医書類の概要と整理」は、これまでほとんど研究されてこなかった大谷文書の薬方書や鍼灸書の写本断片について移録と同定を行い、トルファン地域における薬方・鍼灸の特徴を論じたものである。これによって大谷文書中の医家類写本の一部が解明されることになる。

現在、国際敦煌プロジェクト（IDP）によって、大谷文書のかなりの部分がパソコンの画面上で簡便に閲覧できるようになった（二〇〇七年十一月現在、五〇〇〇番台まで）。近い将来、大谷文書のすべてがインターネット上で閲覧可能となる。ただし、そのためにも大谷文書の番号からその内容が把握できるような目録が必要である。大谷文書中の漢語資料だけでなく、胡語資料も含めた総合目録の作成が次の課題となろう。

注

（1）龍谷大学善本叢書五、一〇、二三、法蔵館、一九八四、一九八九年、二〇〇三年。

（2）小田義久「『流沙残闕』について」（『仏教文化研究所紀要』四四、二〇〇五年）。

（3）劉安志・石墨林「大谷文書集成仏教資料考辨」（『魏晋南北朝隋唐史資料』二〇、二〇〇三年一二月）、陳国灿・劉安志主編『吐魯番文書総目』（武漢大学出版社、二〇〇五年）、張娜麗『西域出土文書の基礎的研究』（汲古書院、二〇〇六年）など。

（4）香川黙識編、国華社、一九一五年。

（5）西脇常記『ドイツ将来のトルファン漢語文書』（京都大学学術出版会、二〇〇二年）など参照。

（都築　晶子）

二、麹氏高昌国時代の写経行業について

—大谷文書を中心にして—

一

六世紀の初頭、金城楡中出身の麹嘉（在位五〇一～五二五）は、西域の吐魯番盆地に、漢人中心の麹氏高昌国を建国した。当時、吐魯番地域には、北方胡族の支配とその圧力が波及しつつあり、そのために漢人による麹氏高昌国成立までは、これら胡族の影響下で目まぐるしい権力の交代劇が、繰り返されていたのである。この経緯の詳細は、『魏書』巻一〇一・高昌伝に詳述されている。そして、この事を次のように記述している。※（　）は筆者加筆。即ち、『和平元年（四六〇）、（沮渠安周は）蠕蠕のために并せらる（沮渠氏高昌国滅亡）。蠕蠕（柔然）は闞伯周を以て高昌王となす（闞氏高昌国成立）。其の王と称するは、此より始まるなり。太和の初（四七七）（闞）伯周死し、子の（闞）義成が立つも、歳餘にして従兄首帰の殺す所となる。（首帰は）自ら立つて高昌王となる。（太和）五年（四八一）、高車王の可至羅（阿伏至羅）は首帰兄弟を殺し、敦煌人の張孟明を以て王となす（張氏高昌国成立）。（張孟明）は後に国人の殺す所となり、（国人は）馬儒を立てて王となす（四九六年・馬氏高昌国成立）。（馬儒は）鞏顧禮と麹嘉を以て左右長史に任命す。（太和）二十一年（四九七）（十二月、馬儒は）司馬の王體玄を派遣し、表を奉じて（北魏に）朝貢し、師（軍隊）による迎接を請い、国を挙げて内徙せんことを求めた。高祖（孝文帝）は之を納れ（四九八年）、明威将軍の韓安保を派遣し、騎千餘を率いてこれに赴かしめ、伊吾（の地）五百里を割き、（馬）儒を以て之に居らしめんとした。羊榛水に至る。（馬）儒は、（鞏顧）禮と（麹）嘉に歩騎一千五百を率いさせ、（韓）安保を迎えさせた。高昌を去る四百里、而るに（韓）安保は至らなかった。（鞏顧）禮等は高昌に還えり、（韓）安保も亦伊吾（ハミ）に還った。（韓）安保は使いの韓興安等十二人を遣わし、高昌に使いさせた。（馬）儒もまた鞏顧禮に世子の義舒を将いせしめ、（韓）安保を迎えるため白棘城（ピチャン）に至った。高昌を去る百六十里であった。而るに、高昌の舊人たちの情は、本土（高昌）を恋しく思い、東遷を願わなかった。（そこで）相與に（馬）儒を殺し、麹嘉を立てて王とした（五〇一年・

麹氏高昌国成立)。(麹)嘉は、字を靈鳳といった。金城榆中(甘粛省榆中縣西北)の人である。既に立つや、また蠕蠕の那蓋(四九二～五〇六)に臣たり。(反蠕蠕の挙)顧禮は、(馬)義舒と、(北魏の韓)安保に随って洛陽に至り(亡命した)。蠕蠕の主である(那蓋の子の)伏圖(五〇六～五〇八)が高車(族)のために殺されるに及び、(麹)嘉はまた高車の臣となった。初め、(車師)前部の胡人は悉く高車により徙される所となり、焉耆(カラシャール)に移された。焉耆はまた嚈噠(エフタル)のために破滅せられ、(焉耆の)国人は分散し、衆は自立することが出来ず、王を(麹)嘉に請うた。(そこで麹)嘉は(自分の)第二子を遣って焉耆王となし、以て之(焉耆)の主となした。(北魏宣武帝の)永平元年(五〇八)十月、(麹)嘉は兄の子の(私署)左衛将軍田地太守の(麹)孝亮を京師(洛陽)に(入)朝せしめ(北魏への)内徙を求め、軍の迎援を乞うた。(そこで世宗は)龍驤将軍の孟威を遣わし、涼州(武威)の兵三千人を発して、これ(高昌国人)を迎えることにした。(この軍は涼州を発し)伊吾に至ったが、時期を失して反ってきた(この作戦は失敗した)。これより後、(高昌は)十餘回遣使し、珠像、白黒貂裘、名馬、塩枕(鶏鳴枕)等を献上し、款誠備さに至るも、惟優旨を賜るのみで、卒いに重ねて(高昌国を北魏に)迎えることはなかった。(永平)三年(五一〇)二月四日、(麹)嘉は、使を遣わして朝貢した。世宗(宣武帝)はまた(龍驤将軍の)孟威を遣わし、詔してこれを労した。延昌中(五一三)、(北魏は麹)嘉を以て持節・平西将軍・瓜州刺史・泰臨縣開国伯と為した(三月十二日)[1]。私署の王は故の如くであった。(―中略―)(孝明帝の)神亀元年(五一八)冬、(麹)孝亮は復び求援内徙を表るも、朝廷はこれを許さず。正光元年(五二〇)粛宗は假員外将軍趙義等を遣わして(麹)嘉に使せしめた。(麹)嘉の朝貢は絶えず。また、(麹嘉は五二一年六月)使いを遣わして表を奉り、辺遐なるを以て典酷を習はざるにより、五經・諸史を借りることを求め、并せて国子助教の劉變を博士と為すことを請う。粛宗はこれを許した。(五二五年麹)嘉死す。(北魏孝明帝は)鎮西将軍涼州刺史を(嘉に)贈った。(以下省略)』とある。

以上、論述したことからも伺えるように、北涼滅亡時(四三九年)に河西の武威(姑藏)より西域の吐魯番盆地に難を避け、この地に建国した沮渠氏高昌国は、その滅後四十年の間に、闞氏・張氏・馬氏とめまぐるしく政権が交代、最後に麹氏高昌国の建国をみたわけであり、このことは先に論述した通りである。このように、めまぐるしく変化した政権の交代劇は、この地に進出してきた北方の高車族や蠕蠕(柔然)族の介入によって引き起こされたものであつた。この地域の人々はこのような北方胡族の支配と圧力から逃れるために、しばしば東方の中国王朝に朝貢すると共に、救援を請うたのである。しかし、五〇一年、麹嘉によって麹氏高昌国が建国されるや、この地域の政権はやや安定をみるに至つ

た。その後、麹氏高昌国は、六四〇年に唐の太宗が派遣した大将軍侯君集の遠征軍によって滅ぼされるまで、南北朝時代から隋朝を経て唐初に至るまで、東方の中国と北方の異民族の二大勢力の狭間にありながら、高昌城を中心に独自の国家体制を維持し、十代百四十年間存続し続けたのである。

二

高昌故城の北約四キロばかりの所に、阿斯塔那（三堡）・哈拉和卓（二堡）古墓群が分布している。これらは東西約五キロ、南北約二キロ、面積は約十万平方キロであるが、高昌国時代の有力漢人の墓域であった。ここには、三世紀から八世紀にかけての古墓群が散在する。この墓地から出土した墓表を調査すると、高昌国時代の豪族には、高昌出身の麹氏の他に、敦煌出身の張氏、索氏、陰氏、宋氏、王氏、李氏、氾氏など、あるいは張掖、武威、晋昌など河西回廊地域の出身者達もいたことが判明する。したがって吐魯番地域には、敦煌や河西回廊地域からの移住者も多く居たことをこれらの墓表は証明する。[2] 吐魯番地域には、この他にも交河古城（ヤールホト）、葡萄溝（ブルユク）、吐峪溝（トユク）、勝金口（センギン）、伯孜克里克（ベゼクリク）などの遺跡群が存在する。これら吐魯番の遺跡に関する学術調査は、二十世紀初頭になってドイツ、イギリス、日本、中国などの諸国によって実施された。ドイツでは、一九〇二年から一九〇七年にかけて、グリュンウェーデルやル・コックにより、三回にわたってこの地域の探検が行われている。イギリスでは、一九一四年から一五年にかけてスタイン探検隊、日本では一九一二年にこの地を訪れた大谷探検隊の吉川小一郎・橘瑞超両氏による発掘調査、中国では、一九三〇年に行われた西北科学考査団の一員であった黄文弼博士による学術調査、さらに戦後、一九五九年より十三回にわたって実施された新疆維吾尔自治区博物館によるアスターナ・カラホージャ古墓群の発掘調査、あるいは現在、吐魯番博物館が中心となって実施しているこの地区の研究調査などが著名な調査である。このような各国による発掘調査によって、吐魯番地区から将来された古文書群は、そのほとんどが地中より発掘されたものである。従って大多数の文書は小断片ばかりである。大谷探検隊の場合でも、この地区の遺跡や古墓群、寺院趾などを発掘し、二次利用廃紙や埋納文書あるいは写経断片などを多数将来した。文書の中には、現地の官人や一般人から直接購入したものや寄贈されたもの等も含まれている。これらのうち二次利用廃紙については、その殆どが西州時代の官庁文書群である。それらは一連の土地制度関係文書や北館文書、物価文書、天山縣到来文書、籍帳、兵役関係文書、

経済関係文書等々その内容は多岐にわたっている。[3] 古墓中から出土した埋納文書には、唐代の告身や高昌国時代の隨葬衣物疏、靈芝雲彩画断片や青龍彩画断片などが検出されている。[4] また、大谷文書中にみられる写経断片は、吐魯番地区の廃寺址や諸遺跡から発掘将来されたものであるので、敦煌千仏洞出土本に見られるような巻子本の体裁では残っていない。大谷探検隊が将来した大谷文書中の写経断片群を検するに、その多くは零細な断片群である。しかし、たとえ零細な断片であっても、それらの写経目的やその内容については、敦煌出土本とまったく同一であることを見逃すことは出来ない。敦煌出土本にみられる漢語文献の多くは、その殆どが書写仏典である。これらには、一切經や願經等の他に僧尼が学習のために書写した受持經類もかなり多く含まれているように思う。これら大量の敦煌文書については、すでに各国研究者等によって整理・研究がなされ、種々のすぐれた目録類が作成されている。[5] これら目録類に見られる約一万九千点以上の写経のうち、特に多量に書写された経典をその順に列挙すれば次の如くである（池田温『敦煌文書の世界』名著刊行会、三四〜三五頁）。①妙法連華經（姚秦・鳩摩羅什訳）三二四三点、②大般若波羅蜜多經（唐・玄奘訳）二五三二点、③金剛般若波羅蜜經（姚秦・鳩摩羅什訳）一六九七点、④金光明最勝王經（唐・義浄訳）九六三点、⑤維摩詰所説經（姚秦・鳩摩羅什訳）七六六点、⑥大涅槃經（北涼・曇無讖訳）五九三点となっている。これに因ると、敦煌出土本には玄奘訳や義浄訳などに因る、九世紀から十世紀にかけての写経の多いことが判明する。また、羅什訳の法華經が当時はよく流行し、その写経もよく行われていたことを物語っている。これに対して、大谷探検隊が吐魯番地区や西域各地より蒐集した写経断片のうち、旅順博物館が所蔵する断片（約二万三千点）の調査報告を見るに、写經断片の件数の多い順にこれを列挙すれば、次の如くになる。①妙法蓮華經（姚秦・羅什訳）三一五二片、②大涅槃經（北涼・曇無讖訳）二八二三片、③大般若波羅蜜多經（唐・玄奘訳）六五六片、④金剛般若波羅蜜經（姚秦・羅什訳）四七〇片。⑤大智度論（姚秦・羅什訳）四六四片。⑥金光明經（北涼・曇無讖訳）三七五片。⑦摩訶般若波羅蜜經（姚秦・羅什訳）四九片となっている。[6] 敦煌でも吐魯番でも、羅什訳の妙法蓮華經が最も多く書写されていることは同様であるが、特に吐魯番地区では、北涼の曇無讖や姚秦の羅什訳といった古い仏典、即ち、五世紀頃に翻訳された仏典の書写断片が多く残っている点が特徴的である。また、巻子本ではなく写経の断片が多く見られると云うことは、これらの写経断片が各地の寺院趾や古城跡から発掘将来されたものであることを物語っている。ただ大谷探検隊将来の出土品については、周知のごとくその出土地不明のものが多い点が指摘されている。しかし、近年は総合調査の結果、ドイツや中国の将来品と綴合するものも多く発見されるようになり、これらの来源が明になりつつある。次に、次章では、新たに発見された『識

語』をもつ高昌国時代の写経、あるいは既発表の高昌写経等について、これらを麴氏高昌国時代の各国王ごとに列挙し、若干の検討を加えてみたい。

三

初代（照武王）麴嘉（在位二四年間、五〇二～五二五）時代の写経

1. 『大品經巻第一』　左衛将軍田地太守麴孝亮題記（六世紀前期）（二三・六×二・五）　旅順博物館所蔵。罫あり。

（前　欠）

大品經 巻 第 一　　一 校 竟

清 信 士 左衛将軍 田 地 太守出提　麴孝亮

（後　欠）

※『トルファン選影』[7]二〇〇頁。字は残画にて判読（以下全て同じ）。

この識語は、二行しか残っていない。しかしこれを見て先ず目につくのは、先述した『魏書』巻一〇一高昌伝に見える麴孝亮の名である。彼は高昌国王麴嘉の兄の子で、左衛将軍田地太守を拝命していた人物である。この初代国王麴嘉と華北に君臨した北魏との交通は十四回行なわれているが、麴孝亮は第一回の永平元年（五〇八）十月と、第十二回の神亀元年（五一八）冬の二回、高昌国より北魏に派遣されている。これらの目的は、北魏への内徙であつた。しかしこれらは、何れも成功をみなかったのである。さらに、『周書』巻五十異域下高昌伝によれば、高昌国には「公二人有り。皆其の王子なり。一を交河公となし一を田地公となす。次に左右衛あり。云々」と記している。初代高昌国王麴嘉には、麴光と麴堅の二人の王子がおり、麴光が世子であった。このように見れば、麴光が交河公であり、麴堅が田地公でいずれも郡王であったことが考えられる。そしてこれらの下に従兄弟の左衛将軍田地太守の麴孝亮と右衛将軍交河太守の麴某（麴氏の血族）のいたことが考えられる。また、麴孝亮はここでは清信士と記しているので、彼は仏教を信じる優婆塞であったことが判明する。また、書写した『大品經』は、亀茲国出身の鳩摩羅什が弘始六年（四〇四）に長安で訳出した大品般若經二十七巻のことであろう。写経の目的は、願經なのか供養經かは明らかでないが、形式的にみると沮渠氏高昌国時代に大涼王沮渠安周が、承平十五年（四五七）に書吏に書写させたところの『仏説菩薩藏經』第一の書写形式によ

く似ており、北涼仏教のなごりが感じられる。そこで左にこの『仏説菩薩藏經』の識語を参考のために掲げておこう。

『仏説菩薩藏經巻一』　北涼承平一五年（四五七）涼王且渠安周題記

1　　廿六帋半
2　佛説菩薩藏經　第一　　一校竟
3　大涼王大且渠安周所供養經
4　　承平十五年歳在丁酉　（以下省略）

※書道博物館所蔵。池田『識語』[9]八七頁。王素『編年』[10]一三二～一三三頁。

これを見るに、書写仏典名を書き、その下に「一校竟」と記し、その次に写経供養者の姓名を記しているところがよく似ているわけである。また、田地太守の下に「出提」と記している。この出提については何を意味しているのか目下のところは不明である。あえて類推するならば、河西地方では正光五年（五二四）六月に秦州の莫折大提、莫折念生父子が反乱を起こしたために、河西回廊が不通となった事件があるので[11]、出提とはこの大提の乱を鎮めるために出陣したことを意味するものかとも思うが、確証はなく目下のところこれを明確にすることは出来ない。

2.　北魏・延昌四年（五一五）五月

勝鬘經疏高昌客道人得受題記　（スタインS・五二四、池田『識語』一〇六頁。）

北魏第六代孝文帝（四六七～四九九）は、四九四年に都を洛陽に遷し、漢化政策を実施した。その後を継いだ宣武帝（四九九～五一四）の時代、五〇六年冬には法雲が『勝鬘経』を講じて祈雨しているし、五〇九年には洛陽に永明寺を創建している。『洛陽伽藍記』巻第四によると、このころ洛陽では仏教が盛んで、仏像が多く造られ、仏典の翻訳も盛んに行われていた。それは多くの外国の沙門たちの来朝によるものであった。当時北魏には一万二千の寺院が有ったという。宣武帝は、外国僧を収容するために永明寺を創建した。この寺は僧房の棟々が一千余間も連なり、外国の沙門三千余人がここに居住していたという。この永明寺に止宿して勝鬘経の研究を行ない、この経の注釈書を書写した高昌国の客僧得受なる者の居たことが、スタイン本（S五二四）の識語によって知られる。そこには、「延昌四年（五一五）五月廿三日、於京承[12]（永）明

寺寫勝鬘疏一部。高昌客道人得受所供養許。」（池田『識語』一〇六頁）と記されている。得受というのは法名であろうか。国王麴嘉の命により洛陽に派遣された僧であったと思われる。そして、彼は恐らく延昌四年九月二十日に派遣された第八回の遣使が帰国時にこれと行を共にし、敦煌に立ち寄った際、いずれかの寺院にこの写経を奉納したのであろう。この識語からは、このような状況が伺われるのである。

五二五年に王の麴嘉が卒すると、世子の麴光が継位して第二代の国王になった。麴光は、甘露（五二六～五三〇）と云う年号を建て、五年間在位した。五三〇年麴光が卒すると弟（麴嘉の子）の麴堅が第三代の国王として継位した。彼の在位は十八年間で、章和（五三一～五四八）という年号を建てている。また麴堅は南朝の梁に遣使するとともに北朝の北魏にも朝貢した。五四八年、麴堅が卒するや子の玄喜が継位し第四代の王となった。彼の在位は二年で、永平（五四九～五五〇）という年号を建てている。五五〇年麴玄喜が卒すると、その子（姓名不明）が継位し、第五代の王として、和平（五五一～五五四）という年号を建てた。彼の在位は、四年間であった。この第二代から第五代の国王時代における高昌国の写経行業については、いずれも識語を有する写経断片が出土していないので、いまの時点ではこの時代における写経行業を明確にすることは出来ない。ただし、建国初期においては、例えば初代の麴嘉は、北魏仏教の導入に努めたばかりでなく、中国伝統の儒学の導入にも力をいれていた。そして、五二一年六月の北魏遣使の際には、五経・諸史を北魏より借り受けることを求めると共に、国子助教の劉燮を博士にすることをも請い、北魏の孝明帝はこれを許可している。このようなことからもわかるように、麴氏高昌国では東方の大国である中国の文化（仏教を含む）を導入することに力を注いでいたのである。そしてこのような努力の成果は、第六代の国王麴寶茂の頃から、顕著に現れ始めるのである。

第六代の高昌王麴寶茂（麴玄喜の子）は、五五五年から五六〇年までの六年間国王の地位にあり、建昌（五五五～五六〇）という年号を建てた。この高昌王麴寶茂時代の写経としては、次の三点を挙げることができる。

一　高昌・建昌二年（五五六）『維摩義記巻第四』（吐峪溝出土）

※『西域考古図譜』下、仏典付録三―一。池田『識語』一二九頁。王素『編年』一六〇頁。大正八五、三五四、C。

二　北周・武成元年（五五九）『妙法蓮華経巻第三』　※書道博物館藏

※高昌丁谷窟（トユク）比丘の道全が書写。池田『識語』一二九頁。

※比丘道全の名は、アスターナ一七〇号墓出土文書（『文書』二、七四頁）[13]にも見ゆ。

三　高昌・建昌五年（五五九）『妙法蓮華経普門品』

※比丘義導書写。ベゼクリク千佛洞出土。存経文四十一行、識語五行。

※柳洪亮『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社、一九九七年。一二八頁。王素『編年』一六三頁。

第七代高昌国王麹乾固（麹寶茂の子）は、五六一年に嗣位し、在位四十一年の長期にわたり、延昌（五六一～六〇一）という年号を建てて君臨していた。しかし、この頃になると西突厥の支配を受け、先代の麹寶茂の場合は「希利発」、麹乾固の場合は「鉢屯発」という西突厥の官号を授けられ、その支配下に組み込まれていたようである。[14]従って、麹乾固はこのような実情を憂い、仏教に帰依し、佛典書写の功徳によって西突厥の支配を弱め、国家の安泰を少しでも計ろうしたのではないか。このことは、この時代の写経の願文によって知ることができる。このような麹乾固による写経については、次の七点を挙げることができる。

一　高昌・延昌三十一年（五九一）『佛説仁王般若波羅蜜経巻上』（吐峪溝出土）

※白衣弟子高昌王麹乾固の願経。「敬写仁王經百五十部」とある。

※ドイツ探検隊将来。池田『識語』一四三頁。王素『編年』二〇九頁。

二　高昌・延昌三十三年（五九三）八月十五日　『仁王経巻上』（吐峪溝出土）。（大正八、八二九、c）。

※白衣弟子高昌王麹乾固の願経。『西域考古図譜』下、仏典付録一ノ二。池田『識語』一四六頁。王素『編年』二一一頁。

三　高昌・延昌三十七年（五九七）十月十六日　『金光明経巻第三』（吐魯番出土）（大正一六、三四九、a）

※使持節大将軍大都督麹乾固供養経。ドイツ探検隊将来。池田『識語』一五一頁。王素『編年』二一七頁。

四　高昌・延昌三十七年（五九七）十月十六日　『合部金光明経巻第七』

※旅順博物館藏　『経帖』十八（20・1467・32）。『トルファン選影』二〇一頁。

※ドイツ隊の将来品と官名及び姓名が同一。

五　高昌・延昌三十七年（五九七）『陀羅尼經』（吐峪溝出土）（6・6×6・5）

※使持節大将軍大都督瓜州刺使西平郡開国公高昌王麴乾固の願経

※大谷四九二三号。『大谷文書集成』参　釈文六六頁。図版一。『西域考古図譜』下、仏典付録一―三。池田『識語』一五一頁。王素『編年』二一七頁。王素『高昌史稿・統治編』四五〇頁。

六　高昌・延昌三十九年（五九九）五月？二十三日　『大品經巻第十八』（摩訶般若波羅蜜經）（吐峪溝出土）

※高昌王麴乾固の願經。

※麴乾固の署官⇩使持節大将軍都督瓜州諸軍事瓜州刺使西平軍開国公

※麴乾固の突厥の署官⇩希近、時多浮、跋弥磴、伊離地、都盧悌、陀豆、阿跋、摩亥、希利發。（王素『高昌史稿・統治編』四五〇頁）

※願文⇩敬写八時般若波羅蜜經八部。以此功徳、願、①佛法興隆、②魔事壊滅、③兵革消除、④疫癘奄息。⑤雲雷愼時、風雨應節。⑥七祖先霊、内外眷属、恆蒙休慶、面会聖容、⑦又願現身康彊。

※池田『識語』一五二頁。王素『編年』二二一頁。陳国燦『斯坦因所獲吐魯番文書研究』武漢大学出版社、一九九四年。四四〇～四四一頁。マスペロ・四〇五号文書。

七　高昌・延昌四十年（六〇〇）六月九日　『大品般若』（摩訶般若波羅蜜經）（吐峪溝出土）

※弥磴、伊離地、都盧悌、陀豆、希利發高昌王麴乾固の願經。

※願文⇩敬写八時般若波羅蜜經八部。…　願国祚永隆、蕃俶惟茂。

※『西域考古図譜』下、仏典付録一―四。池田『識語』一五三頁。王素『編年』二二三頁。

このように、第七代の高昌国王麴乾固は、自らを「白衣弟子」と称し、『大品般若』八部を敬写するなど、仏教に帰依し、熱心に写經行業に励んでいたことを伺うことができる。このことは、彼が突厥より官号を与えられ、これを写經の識語に明記していることからも知られるように、

彼は突厥の支配を受けながら、それからの重圧を逃れるために、仏教に帰依していたということが考えられるのである。

これらの他に、麴乾固時代に書写された写経には、次の六件が認められる。

一　高昌・延昌二年（五六二）『華厳經巻第四十六』

※「延昌二年、經生和常太寫。用帋十九」。※三井家蔵。池田『識語』一三二頁。王素『編年』一六七頁。

二　高昌・延昌六年（五六六）八月　『法華經疏一巻』（疑）　京博蔵。　池田『識語』一三五頁。

王素『編年』一七一頁。※「延昌六年八月傳寫教讀」。

三　高昌・延昌十七年（五七七）二月八日。比丘尼僧願写『大般涅槃經』

(A)黄文弼著『吐魯番考古記』（録）二八～二九頁。（写）図版一〇。（一九・七×一二・九）。存七行。哈拉和卓旧城中出土。池田『識語』一三八頁。王素『編年』一八二頁。

〔識語〕

比丘尼僧願普為一切敬造供養

延昌十七年丁酉歳二月八日、比丘尼僧願稽首歸命常住三寶。僧願先因不幸、生稟女穢、父母受怜令使入道。雖參法侶、三業面墻、夙宵驚懼、恐命空過、寤寐思省、冰炭交懷、遂割減衣鉢之分、用寫涅槃一部、冀讀誦者獲涅槃之樂、礼覲者済三塗之苦。復以斯福、願現身康彊、遠離苦縛。七祖之魂、考妣往識、超昇慈宮、挺生養界。

(B)龍谷大学・大谷三六一六号文書。（五・五×一二・三）『大谷文書集成・貳』（録）一三三頁、（写）図版二。王素『編年』一八二頁。旅順LM20・1503・203と同文。『トルファン選影』200頁参照。

〔識語〕

延昌十七年丁□
不幸生稟女□
驚懼恐命空過□
分用。寫涅槃□
之苦。復以斯福。願現□

(C)旅順博物館所蔵断片　『トルファン選影』二〇〇頁参照。

(1)　LM20・1504・346（六行）

〔識語〕

□七年丁酉歲二月八日□
□先因不幸、生稟女穢□
□面墻、夙宵驚懼、恐命空過、寤寐□
□分、用寫涅槃經一部、冀讀□
□之苦、復以斯福、願現身康□
□彊、速離苦縛、七□

(2)　LM20・1503・203（六行）

〔識語〕

□大般涅槃經□

延昌十七年丁酉歳、二月八日、比丘尼僧願稽首歸命□
□因不幸、稟生女穢、父母受怜令使入道、雖參法□
□比丘尼僧願□□
□懼、恐命空過□□思省、冰炭交懷。遂割□
□涅槃經一部、千返□□願流通□
□之楽、復以斯福□□七祖之魂齊會道場、同昇彼岸

(3) LM20・1504・347 (五行)

〔識語〕

□稟女穢、父□
驚懼、恐命空過、寤寐思省、冰炭□
寫涅槃經一部。冀讀誦者獲涅槃之□
□福、願現身康彊、速離苦縛、□
□養界　比丘尼僧□

(4) LM20・1504・375 (五行)

〔識語〕

□稽道歸命□
□使道、雖參法侶、三業面墻、夙□
□炭交懷、遂割減衣　鉢　之餘

□讀誦之者、獲涅槃之楽、濟□三
□願同勝彼岸

(5)LM20・1504・374（六行）
〔識語〕
□稽首歸命常住三寶。僧願
□入道、雖参法侶、三業面墻、夙宵
□遂割滅衣鉢之分、用
□□三塗之苦
□往識、超昇慈宮
□普為一切敬造供養

四　高昌延昌二十七年（五八七）『勝鬘經義記巻中』（吐峪溝出土）
『西域考古図譜』下、仏典付録一―(5)　池田『識語』一四一頁。王素『編年』一九六頁。
本文十行。巻末部分。巻軸が残っている。

五　高昌延昌二十七年（五八七）『仏名經』題記（吐峪溝出土）
『西域考古図譜』下、仏典付録一―(1)　池田『識語』一四一頁。王素『編年』一九七頁。

六　高昌延昌三十七年（五九七）『結界陀羅尼』
『トルファン選影』二〇〇頁。LM20・1506・八七二、LM20・1507・〇九八五。

※(二片綴合)。

これらの内、当時この地区で活躍していた比丘尼僧願によって書写された『大般涅槃經』の書写断片は、中国の黄文弼氏がカラホージャ旧城中より一件、大谷探検隊は六點の同種の断片を発見将来していることは先述した通りである。この比丘尼僧願についてみるに、これは実名ではなく、衣物疏によくみられる「大徳比丘果願」と同様に、当時の比丘尼を象徴した表現ではないかとも考える。何れにしても、ここに記されている識語によれば、比丘尼僧願は不幸にして女性に生まれたが、両親の恩愛によって出家することが出来た。そこで僧願は衣鉢の分用を割減して費用を捻出し、人を雇って『涅槃経』一部を抄写することができた。従ってこの功徳により、現世の人々の健康や亡き父母の魂が、弥勒の天宮や弥陀の安養界に往生することを願っていることを知ることができる。また、これらは第七代高昌国王麹乾固時代における比丘尼僧の仏典書写行業の様子や、弥陀信仰や弥勒信仰など浄土信仰流行の一端をよく物語っている。これより先、中国西端の敦煌にあっては、仏弟子比丘尼道容なるものがおり、西魏の大統十六年(五五〇)ごろ、『大般涅槃経』(巻十二)を敬写したことが、スタイン本のS・四三六六(池田『識語』一二五頁)によって知られる。これらのことより、当時の『大般涅槃経』の写経行業が、敦煌地域からさらに西方の吐魯番地域へと流伝した状況を、ある程度伺うことが出来るように思う。

高昌の延昌四十一年(六〇一)高昌国王麹乾固は卒し、子の麹伯雅が第八代の国王として嗣立した。麹伯雅は、翌六〇二年、延和(六〇二～六一三)と改元、十二年間在位した。この麹伯雅の時代は、高昌国内における突厥の圧力や干渉が激しくなり、突厥族は麹伯雅に迫って突厥式の風俗に従うよう強制したため、国内にトルコ風の弁髪や胡服が流行した。中国では、六〇四年隋の文帝が没し、煬帝が即位した。煬帝は西域経営にも努力し、それにこたえるように麹伯雅は何回も入朝した。さらに、麹伯雅は六一二年、煬帝の第一次高麗遠征に同行し、その後、宇文氏の娘の華容公主をめとりこの歳(六一二)の末に高昌国へ帰国した。その後、新令を出して弁髪や胡服をやめるよう漢化政策を推進した。[15]しかし、国内には、突厥派と親隋派の二派がみられ、突厥派の勢力が強くなると、一時国政を奪取して、国王の麹伯雅を国外に追放するという政変が勃発した。この政変を義和の政変と言うが、六年間継続した。しかし、麹伯雅は自分の家臣団に助けられ、六二〇年には政権を取り戻し、重光という年号を立て、復位することができた。[16]このように、麹伯雅の時代は、突厥族の強力な干渉により、国内は不安定で、義和の政変も勃

発したため、写経行業に専念するような余裕のある時代ではなかったようである。この時代の写経としては、義和五年（六一八）清信女夫人和氏伯姫の次のような願経の識語を知るのみである。

妙法蓮華経巻六　　陰抄

義和五年戊寅歳十月十一日、清信女夫人和氏伯姫、稽首歸命
常住三寶。聞一諦幽昧、顯自九經之文、三空淵旨、彰於十二之説。
弟子仰維斯趣、敬寫法華經一部。冀金教永傳於千載、玉
甕不朽於万祀。謹以斯福、仰願國祚永隆、本枝万葉。願
過去先霊、面聖飡音。現在親因縁眷属、恒履休
和、未来見佛。普共有識、同霑斯潤。

※上海圖〇五一。池田『識語』一七八頁。

第九代麴文泰の時代（在位六二四～六四〇）になると、文泰の妹は西突厥第二代の王統葉護可汗（在位六一九～六二八）の子咀度設（タルドウシャド）に嫁し、このような突厥との婚姻関係などにより、国内政治も比較的安定していたようである。彼は延壽（六二四～六四〇）と改元し、一七年間在位した。彼の時代における識語のある写経としては次の七点を挙げることができる。

一、高昌・延壽二年（六二五）八月、陵江将軍写経（吐峪溝出土）

延壽二年乙酉歳八月八□
□賣身於大市、剝皮為帋。由敬□
□弟子命過、陵江将軍中坊□
□恒識功徳。善因一積、常在□
□重勝大善根。資益遇法□
□忍。復願現在平莫将軍□

□□度苦衆生。復願□
□一切衆生、莫不□

※『西域考古図譜』下、仏典付録3―2・（八行）。池田『識語』一八〇頁。王素『編年』二七六頁。

この写経主の陵江将軍や書写仏典名については不明であるが、『識語』の二行目に「賣身於大市、剝皮為帋。」とある。このうち、「剝皮為帋」という言葉は、北涼・曇無讖訳の『大涅槃經巻第十四』（大正一二、四四九、a）に見える言葉であり、この時代より写経の功徳を高めるために用いられていたことが分かる。

二、高昌・延壽四年（六二七）九月、經生令孤善歡抄寫『仁王般若經巻上』（吐魯番出土）

延壽四年丁亥歲九月
經生令孤善歡抄。用
紙十九張、崇福寺
法師「玄覺」覆校。

※四天王寺蔵。『高昌残影』図版二五―一三三。池田『識語』一八一頁。王素『編年』二八〇頁。

三、高昌・延壽十四年（六三七）五月三日。清信某敬寫『維摩詰經』

維摩詰經巻□
延壽十四年歲次丁酉五月三日、清信□

※『西域考古図譜』下、仏典附録三―三。池田『識語』一八三頁。王素『編年』三〇六頁。

四、高昌・延壽十四年（六三七）清信女某敬寫『維摩詰經巻下』

經生令狐善歡寫

曹法師法慧校
法華齋主大僧平事沙門法煥定

延壽十四年歲次丁酉五月三日、清信女　稽首歸命常住三寶。蓋聞剝皮折骨、記大士之半言、喪體捐軀、求般若之妙旨。是知金文玉牒、聖教眞風。難見難聞、既尊且貴。弟子託生宗胤、長自深宮、賴王父之仁慈、蒙妃母之訓誨、重霑法潤。為寫斯經。冀以日近歸依、朝夕誦念。以斯微福、持奉父王、願聖體休和所求如意。先亡久遠同氣連枝、見佛聞法往生淨土。增太妃之餘竿、益王妃之光華。世子諸公、惟延惟壽。寇賊退散、疫癘消亡。百姓被煦育之慈、蒼生蒙榮潤之樂。合靈抱識有氣之倫、等出苦源、同昇妙果。

※スタイン本S・二八三八。一般的には、遠征した唐の兵士が高昌国で入手し、帰国時に敦煌の某寺院に立ち寄った際、施入したものではないかということが、考えられる。

池田『識語』一八三頁。図76。王素『編年』三〇六頁。

五、高昌・延壽十四年清信女某敬寫『維摩詰經巻下』

※天理図書館蔵。スタイン本S・二八三八と内容は同じであるが、池田氏は〈疑〉を付して、原本の真実性に疑問があるとされている。今はこれに従う。池田『識語』一八三～一八四頁。王素『編年』三〇六頁。

六、高昌・延壽十六年（六三九）七月十日、經生鞏達子寫『大方等如来藏經』

大方等如来藏經

延壽十六年七月十日

經生鞏達子
用紙十二張
法師曇顯校

※スタイン本S・三八八八。池田『識語』一八四頁。王素『編年』三一四～三一五頁。

七、高昌・末期。經生輔文開寫『金光明經巻第一』（年次未詳）

金光明經巻第一　經生輔文開抄用絡廿二張
法師智序三校
法華齊主大僧平事沙門法煥定

※スタイン本S・四〇九。池田『識語』一八四頁。

唐の第二代皇帝太宗は、当時反唐的な態度をとった高昌国の征討を決意し、貞観十三年（六三九）十二月四日に侯君集を交河道行軍大総管に任命し、高昌を攻撃させた。侯君集は、六四〇年五月十日に伊吾（ハミ）に達し、さらに西進して磧口に進んだ時、高昌王の麹文泰は急死したので、子の麹智生が嗣立した。しかし、八月八日に高昌王の麹智盛は唐に降伏し、麹氏高昌国はここに滅亡した。そしてこの地域は、唐の直轄地西州となり、唐の律令支配体制下に組み込まれたのである。この西州時代における写経行業については、別に稿を改めたいと考えている。

注

（1）王素『高昌史稿―統治編』文物出版社。一九九八年。四四八頁参照。
（2）侯燦・呉美林『吐魯番出土磚誌集注　上・下』巴蜀書社、二〇〇三年。
（3）小田『大谷文書の研究』法藏館。一九九六年。
（4）小田『仏の来た道』龍谷大学大谷探検隊一〇〇周年記念事業委員会、東方出版、二〇〇四年。所収論文。
（5）王重民『敦煌遺書總目索引』商務印書館、北京、一九六二年。
沙知『敦煌契約文書輯校』江蘇古籍出版社。一九九八年。
黄永武『敦煌遺書最新目録』新文豊出版公司、台北、一九八六年。

栄新江『海外敦煌吐魯番文献知見録』江西人民出版社、一九九六年。

(6) 旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』二〇〇六年。一七～一八頁。

(7) 旅順博物館・龍谷大学共編『トルファン出土漢文仏典断片選影』法蔵館、二〇〇六年。以下全て『トルファン選影』と略称。

(8) 王素『高昌史稿—交通編』文物出版社、二〇〇〇年。三九〇頁参照。

(9) 池田温『中国古代寫本識語集録』東大東洋文化研究所刊、一九九〇年。以下、全て池田『識語』と略称。

(10) 王素『吐魯番出土高昌文献編年』新文豊、一九九七年。以下全て王素『編年』と略称。

(11) 『魏書』巻三九、列傳第二七。

(12) 朱雷「敦煌藏經洞所出両種麴氏高昌人写経題記跋」『敦煌吐魯番文書論叢』一九九九年。八三頁参照。

(13) 『吐魯番出土文書』第二冊。文物出版社、一九八一年。『文書』と略称。

(14) 王素、注(1)四五〇頁参照。

(15) 『隋書』巻八三、西域傳高昌の条。

(16) 王素、注(1)三五九～三九四頁参照。

(小田義久)

三、大谷文書の漢文医書類の概要と整理

はじめに

このたび大谷文書中の医学関係資料を整理することになった。まずこれまでの初歩的な整理によって判明した概要を報告し、個別資料の録文と案文を目録化した。対象となる医学関係文書は、必ずしも薬方書や本草書、鍼灸文献などの医学専門資料だけでなく、これまで物価文書と呼ばれてきた経済文書も医学史研究に関係するので取り上げた。この物価文書は、天宝年間の薬価を表示している非常に貴重な資料を含んでいる。

大谷文書の漢文医書類は二つの傾向を持つ。一つは中国本土由来の医書類である。もう一方は印度医学由来の文献類である。大谷文書に二つの医学系統の文献が混在する理由は、これらの資料がトルファンを中心として敦煌、亀滋などの中央アジアから収集された地理的条件によると考えられる。(1)

また胡語の医学文献も大谷文書には含まれるが、それらの整理は後日にしたい。(2) 大谷文書は現在8種に番号分類されている。この番号分類は歴史的な整理経過と資料の性格によるものである。小田・百済・都築らによる文書の分類からみた大谷文書中の医書類は以下のようになる。(3)

５００番台の巻子本資料に『本草集注』が含まれる。『大谷文書集成』１・２・３に収められる１０００番台から５８００番台には断片的な医学資料が含まれる。６０００番台のチベット・ウイグル語などの胡語資料にも医学資料は含まれると考えられるが、後日の研究にまかせたい。７０００番台の胡漢両語文献（胡語はウイグル・ブラフミー・カロシティー・古代トルコ語・ソグド語など）中には、漢文医学資料は見つけられない。８０００番台の資料は『西域考古図譜』所収のものである。その中には「本草関係文書断片」と名付けられた本草書の目録、「唐抄『鍼経』関係文書断片」と名付けられた鍼灸の文献が含まれる。

９０００番台は『流沙残闕』と名付けられた資料である。これには漢文医学資料は含まれていなかった。１００００番台は別置「極小資料」と名付けられ長い間未整理であった文書類である。資料が極小のために整理がされていなかったが、最近番号が附与された。これらのなかから

医学資料を何点か発見することができた。詳しくは以下の目録で整理する。１１０００番台は「橘資料」と呼び慣わされてきた資料群であるが、これには漢文医学資料は含まれていない。

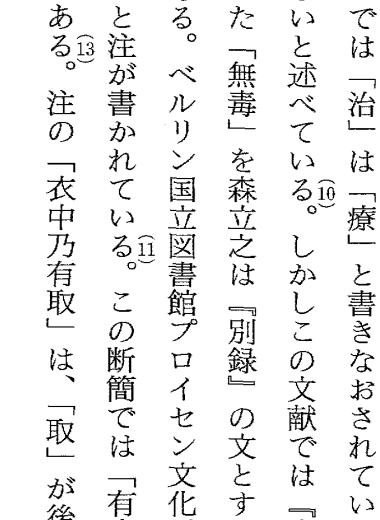
本草・鍼灸医書類の概要

世界に散在する敦煌文書の中で、本草関係の残巻は６４種であるということである。その中で特に重要な文献は三種であり、梁の陶弘景の『本草集注』、唐の李勣・蘇敬の『新修本草』、唐の毛詵『食療本草』である。(4)

大谷文書には本草関係の資料が三点ある。５３０号文書、５４６７号文書、８０９７号文書である。この中で５３０号の『本草集注』の「序録」は世界中から注目される最も重要な文献である。しかし『本草集注』の「序録」は、本来『比丘含注戒本』を写すための用紙として使われた反故の紙である。あくまでも『比丘含注戒本』を筆写するために裏面利用されたものであるので、『本草集注』に『大智度論』をついで書かれている。この文献は、吉川小一郎が１９１１年9月頃から１２年2月6日までに敦煌で購入した経巻の一本であると考えられる。この『本草集注』についてはこれまで多くの研究成果が発表されている。また写真版と録文資料も完成して研究報告もされているのでここでは贅言しない。(5)(6)ただこの文献の重要性からみて、研究がこれで終わるのでなくさらに深く掘りさげられるべき時期に来ていることを指摘しておきたい。

５４６７号文書は、このたび発見した『本草集注』の断片である。『本草集注』は陶弘景（452―536）によって５００年ごろに編纂された本草書である。この『本草集注』は、陶弘景が『神農本草』と『名医別録』を併せて完成した『神農本草経集注』のことである。この書の原則は、『神農本草』の本経を朱字で書写し、『別録』の文と注を墨字で書き分けたことである。その書きわけは顯慶四年（659）に完成した『新修本草』にも継続され、編纂者の蘇敬は『本草集注』の原文は変更せず新しい薬物と注を追加した。そのために『新修本草』が通用すると『本草集注』は顧みられなくなって、だんだん失われていった。宋代になって本草書が印刷されると本経は黒地に白字であらわされ、その他の注記や増補の文は墨字で印刷することとなった。(7)

５４６７号文書は、『大谷文書集成』参に「医薬関係文書断片」と命名されているものである。この文書には『大谷文書集成』参 録文ｐ183-184（図版４１）では５４６７―１と５４６７―２の二点があり、『本草集注』の断片は５４６７―１のＡ面の資料である。



この文章は、『本草集注』の衣魚と白頸蚯蚓の項目に対応するところである。文献は朱字と墨字と混合して書かれている。本文の「無毒主」は朱字である。「摩之」も朱字である。「又治淋」は墨字である。「澤」は墨字である。細字は注の文である。注の「衣中乃有取」、「小兒淋閉取」は細字二行であり、前後に文が続く。本文の「寒」は朱字である。注の「大」「寒」も細字二行に書かれている。

「衣魚、味鹹温無毒、主婦人疝瘕、小便不利、小兒中風、項強、背起、摩之。又療淋、墮胎、塗瘡滅瘢、一名白魚、一名蠹。生咸陽平澤、（衣中乃有、而不可常得、多在書中、亦可用。小兒淋閉、以摩臍及小腹、即溺通也。）。

白頸蚯蚓、味鹹寒、大寒、無毒、主蛇痕、去三蟲、伏尸、鬼疰、蠱毒、殺長蟲、仍自化作水、療傷寒伏熱、狂謬、大腹、黄疸。一名土龍、生平土。三月取陰乾。（白頸是其老者爾。取破去土、塩之、日暴、須臾成水、道術多用之。温病大熱、狂言、飲其汁、皆差。與黄龍湯療、同也。其屎呼為蚯蠐、食細土、無沙石、入合丹泥釜用。若服此、乾蚓、應熬作屑、去蚘蟲甚有驗也。）」森立之らの重輯『本草経集注』[8]（）は注の文。

この文献は『新修本草』とほとんど同文である。[9]後世伝来の『重修政和経史証類備用本草』（以下略称『証類本草』）などと比べてみると、これは『本草集注』であると考えられる。その理由は、唐の高宗李治の避諱である「治」が避けられていないことである。後世の唐の『新修本草』では「治」は「療」と書きなおされている。真柳は、先の『本草集注』の「序録」では「治」の避諱が必ずしも文献書写の年代決定に影響しないと述べている。[10]しかしこの文献では『本草集注』の原書の「治」が使われていることから、『本草集注』の断片であると確定できる。

また「無毒」を森立之は『別録』の文とするが、『証類本草』などは白字で本経とする。この資料に寄れば、「無毒」は朱字であるので、本経である。ベルリン国立図書館プロイセン文化財東方学部門の所蔵される吐魯番出土の『本草集注』断簡（Ch1036r）は朱字で本経、墨字で『別録』と注が書かれている。[11]この断簡では「有毒」が墨字で書かれている。[12]この文献を研究した渡邊に「有毒」「無毒」が本文か否かについて論説がある。[13]注の「衣中乃有取」は、「取」が後世では「而」とあるが、文章的には「取」のほうが良いように思う。「寒」は朱字で書かれている

ので白頸蚯蚓の本文である。しかし墨字の「大」「寒」は朱字より小さく二行に並ぶので、注と考えられる。ならばこれに続くはずである白頸蚯蚓の「無毒」も本経の可能性があるとおもわれる。

８０９７号文書は『西域考古図譜』で公開された本草文献である。しかしこの文献は長く注目されることなく研究が進んでいなかった。三木栄は「西域出土医薬関係文献総合解説目録」のなかで日用本草書であると解説するに留まった。[14] 不思議なことに『本草集注』「序録」の研究でも、赤堀・櫻井らはこの文献に言及していない。

□部□
□□　黄丹　黄礬□
石榴黄　雄黄　密□　笠子　錫鑞　滑石□
皂莢　朱砂　肉沙　青緑　黄連　木通□□
皮屨　銅鉢　紫礦　衡錘　針沙　筆硯　麵糊
五穀部　　糜粟　粳糯　稲穅
糠粃　蕎麦　油麻　江豆　邊豆　菉豆
□□□□　□□□

この目録は、五穀部が後半に記載されている。「五穀部」という分類項目は、古典の医学文献や類書の中に見出せない。糜粟（穀粟）・粳糯・稲穅・糠粃・蕎麦・油麻・江豆・邊豆・菉豆などの内容から五穀を分類したものと思われる。前半部は玉石部に当たるが「部」の字しか識別できない。しかしこれを玉石部とするには、また混乱する。なぜなら黄連・木通・皮屨や筆硯・麵糊は玉石に分類できるものではない。この分類順序は、５３０号文書の『本草集注』の「序録」にも合わないし、後世の本草書の分類にも合致しない。吐魯番で出土した同様の薬方書にやや似たものがある。出口常順コレクションのトルファン文献の本草書（３３０甲乙）は、実用的な医療のための書物とされている。[15] この文献の前半は治療法の目録、後半は「金石草木蟲獣第」とある。しかし金石の並び方は、８０９７号文書と同じでない。

鍼灸関係文献は、大谷８０９６号文書一点である。『西域考古図譜』に「唐抄『鍼経』関係文書断片」と名づけられて収録されているもので

ある。

大□
□風脾風占其侯□□
□乳頭次灸脾兪次灸兩手□
□日？以縄従耳上量中屈
□頭即是其穴處
此名風府

この文献も三木以外には論究されていないと思われる。断片には朱線が引かれている。『大谷文書集成』Ⅲの図版はモノクロ写真であるのでこの朱線が明白でない。「此名風府」から左の図形に朱線が伸びているので、風府の経穴を表す左の図形は人体図である。右の「大」字の上からも朱線が伸びているので、その先にも人体図が示されていたと考えられる。この経穴は大椎か大杼であろう。スタインの「灸法図」(S6168・S6262)とよく似た断簡であると考えられる。(16)「侯」は「候」の錯字であろう。8096号文書の「日？以縄従耳上量中屈」は百会穴の取穴を表している。スタインのS6262の「灸法図」には「百會、以縄兩耳、斷中屈縄點屈還度點」とあり、耳から縄で量って中点で百会を採る方法が説明されている。ただスタイン文書は図と経穴名を結ぶ線は墨線である。(17)この文献は灸法の文献であるので、「唐抄『鍼経』関係文書断片」と鍼法の文献とするのは間違いであろう。

経済文書中の薬物

大谷文書には物価文書と呼ばれる一群がある。これば当時の物価を知ることができる文書類である。これらの文書に対してこれまで経済学的側面や社会学的側面から研究が進められてきた。それは唐の天宝年間の文書であり、物品の価格を上・次・下三等に分けて提出された官庁文書である。(18)官署が物品を購入するときの価格標準表というべきものである。この文献には、薬物の価格が含まれている。薬物の当時の物価が表示されているのであるが、医学史的に研究されたものはすくない。(19)

これらの文書の重要な研究課題は薬物の単位の兩についてである。『神農本草経』などの本草書や『傷寒論』『金匱要略』には、薬物が銭や兩で量られている。その単位については古くから多くの研究がある。[20] 大谷文書には、兩の外に小兩という単位がある。３０５６文書には「偏桃人壹兩」「没老子壹兩」「石密壹兩」とあり、兩の単位がもちいられている。３０７１文書にも「胡臻子壹兩」「一日子壹兩」など兩がもちいられている。

３０８８文書には「免絲子壹小（兩？）」「亭歷子壹小兩」「蛇？床子壹小兩」「薏苡仁壹小兩」「萎蕤壹小兩」「□山壹小兩」「獨活壹小兩」など小兩の単位が用いられている。３０８９文書にも「天門冬　壹小兩」「酸棗　壹小兩」などの記載がある。３０９２文書には、「蜀柒壹小兩」「猪苓壹小兩」「貫衆壹小兩」「大戟壹小兩」「茵芋壹小兩」とある。小兩という単位が薬物の取引単位としてもちいられていたことがわかる。

狩谷棭斎は『大唐六典』を引いて「凡そ秬黍を積み度量権衡と為す者〔小度・小量・小秤〕、鍾律を調し、晷景を測り、湯薬を合はす、及び冠冕の制は則ちこれを用ふ。内外官司悉く大なるものを用ふ」という。すなわち天文観測と薬物と冠の制度は小の尺度を用いるのである。林億らの『備急千金要方』「凡例」には、「今の此の書、當に三兩を一兩と為す、三升を一升となすの制を用ふべし、世の妄者、乃ち古今之人、大小異あり、古人薬劑服すること多きの所以なり謂えり、無稽の言、此より甚しとなすはなし、今の用薬、定むるに三兩をもって今の一兩となし。三升を今の一升となす。」という。[21]

最近、薛宗正は小兩を銭の単位であるとしているが間違いであろう。[22] 物価文書の中で小兩の単位をもちいるのは、薬物もしくは香料など薬物に準じるものにかぎられている。

『新修本草』に「古秤惟有銖兩、而無分名。今則以十黍為一銖、六銖為一分、四分成一兩、十六兩為一斤。雖有子穀秬黍之制、從來均之已久、正爾依此用之。（臣禹錫等、謹按唐本、又云、但古秤皆複、今南秤是也。晉秤始後漢末已來分一斤為二斤、一兩為二兩耳。金銀絲綿並與藥同、無輕重矣。古方唯有仲景而已、涉今秤若用古秤、作湯則水為殊少、故知非複秤、悉用今者耳。）」とある。[23] これは古代の張仲景の分量に唐代の単位を用いるという間違いをおこしている。物価文書は唐代に文献記載のように薬物などには小兩を用いたことを証明するものである。

大谷文書に含まれる薬物の分類

大谷文書中に現れる薬物を本草に関係する文献から列挙すると以下のようなものとなる。先に述べたように、『本草集注』序録にあげられた薬物名は取り上げない。その他の処方などの医薬関係文書から蒐集した項目と、物価文書から薬物に関係のありそうなすべての項目を分類した。分類の間違いもあると思われるが、一応、中国の唐の蘇敬等によって、顯慶四年（659）に勅命によって編纂された薬物書『新修本草』をもとに、それまで知られていた薬物を分類した。[24] これらは西域の一地方で出土した断片に書かれていたものであるので、長安で成立した書物に載せるような正しい名前が記されているとはかぎらない。また明らかに誤記と思われるものもあったが直さなかった。推定される正しい名称、漢字の訂正は［］で示した。なお薬物の後につく番号は、大谷文書の文献番号である。

玉石上品

白石脂（3089）、空青（3036・3081）、朱砂（［丹砂］8097・朱沙3036）、滑石（8097）、黄礬（8097）、

玉石中品

輕粉（［水銀粉］3050）、雄黄（8097・1074）、針沙（［鐵精］1078・8097）、石榴黄（［石硫黄］8097）

玉石下品

代赭（3095）、黄丹（［鉛丹］3076・8097・朱粉3050）、硇沙（［硇沙］3099・肉沙8097）、錫鑞（8097）

草部上品

人參（1385・5467）、甘草（1074・1074・1390・3551）、細辛（3093）、兎絲子（3088）、蛇?床子（3088）、薏苡仁（3088）、萎蕤（3088）、獨活（3088）、羌活（3088）、天門冬（3089）、青木香（3099）[25]、決明子（3452）、菴閭子（［菴蔺子］3452）、黄連（3094・8097）

草部中品

欝金香（1074・欝金花3096・欝?金3537・欝□1074・金香3977）[26]、蓽解（萆薢4933）[27]、呉茱萸（3098）、前?胡（3093）、昆布（3095）、

白芷（3095）、知母（3095）、通草（3042）、
鬼煎（衛矛 4933）、薑黄（1074・3977）、極酢漿（[醋漿] 1077）、蓮子草（[鱧腸] 1078・青連花 3617）
黄芩（3539）、生薑（5405）、阿魏藥（1389・淺根（[截根] 1074））[28]
草部下品
貫衆（3092）、大戟（3092）、茵芋（1074・3092）、亭歷子（[葶藶] 3088）、香附子（1074）、鬼臼（4933）
木部上品
茯苓（3098）、酸棗（仁）（3089・大棗 3054）、桂心（3099・桂?心 3033）、蜀柒（漆）（3092）、沈香（3096）、松子（松実 4933）、槐子（3820）
木部中品
猪苓（3092）、木通（[通草] 8097）
木部下品
皂莢（8097）、訶梨勒（3076・3526・3537・訶梨（勒）1052・訶麗□ 1392）
果部上品
豆蔻?（[肉豆蔻] 1074）、橘皮（3091・3094）
獸禽上品
麝香（3096）、牛乳（1383・3551）、酪漿（[酪] 3820）、牛黄（3977）、
蟲魚部上品
石密（3056・3532・石?密 1392）、密□（8097）
獸禽部中品
犀角（3089・犀 4338）、牛膽（1387）

菜部上品

芥子（1387）

米上品

大麻人（仁）（4022）、烏麻油（1076・1077・1078・烏麻?·1383）

米中品

酒（3976）

有名無用

赤涅（3617）

印度・ペルシャ・南方などの薬物

婆訶□（1074）、肥多羅（1074）[29]、至多勒（1076・1384・1385）[30]、縛塞伽（1077）[31]、波羅娑你（1077）[32]、勃盆地叨（勿藥）（1078・勃分地叨（勿藥　是）1383・勃分?·3539））、你利（1078）、唵羅（1383）[33]、鄔伽布史波（1387）[34]、蘇?·摩鄔花（1390）[35]、樹伐帝（1390）[36]、畢鉢（1074・1390・3191・畢鉢根1392・畢撥3099）[37]、肥野竭匿（1390）、須盧□（1392）、殺羊乳（3526・殺羊?·1393）、訶勃多密逮?·連（3533）、烏盧多他（3979）、旃陀羅（4049）、沙摩路多（4363）、蘇伏靈善（4363）[38]、辛頭塩（4363・10277）、訶煞（10277・1385）、楼灰（4933）[39]、丁香（3096）、白檀香（3096）、□檀香（1077）、砂糖（3091・3094）、偏桃人（仁）（3056）[40]、沒老子（3056）、胡臻子（3071）、一日子（3071）、花煙支（燕支3033）[41]、□磨勒（[菴摩勒?·]3061）[42]、石碌（3036）、銅碌（3036）、烏塩（1052）[43]、胡乾薑（1052・胡?·乾薑3532・□薑3706）[44]、密（1052）、縮所密（縮沙密1074）[45]、牛尿（1074）、胡桃（3050）、乾葡萄（乾蒲萄3054）、青黛（3076）[46]、牛蘇（[牛酥]3551・蘇3617）、石榴子（3866）

分類不明（後の時代には分類されているものも含む）、伝来不明の薬物（調べきれなかったものを含む）

羊聲香（1074）[47]、散米（3042）、流密（3062）、紫雪（3099・紫?雪3089）、菊酢（3099）、紫粉（3414）、崔子（3445）、酸（3866）、陪酢（3866）、蘭香子（[羅勒]3445）、蘇（10222・10407）、笠子（8097）、青緑（8097）、皮履（8097）、銅鉢（8097）、紫礦（8097）、衡錘（秤錘?・8097）、筆硯（8097）、麵糊（8097）、糜粟（8097）、粳糯（8097）、稲穢（8097）、糠粃（8097）、蕎麦（8097）、油麻（8097）、江豆（8097）、邊豆（8097）、蓽豆（8097）、尿（10212・10407）、麴（10251）、青蓮萼（10407）、蘿蔔（10548）、膏油（10580）、欖（橄?欖5458）、烏陀（[烏蛇?]10277）

薬物の総数は百五十三種である。『新修本草』によって分類できた者が七十四種、印度もしくはペルシャ・南方などから由来したと思われる薬物が四十四種、分類不明が三十五種であった。

大谷文書の薬方書

薬方書は、概略六十一方をかぞえる。明らかな薬方書であると思われるものがあると同時に判断を迷う文書も多かった。疑わしきものは残すという原則によって、処方をかぞえた。

薬方には、いくつかのものは同じ書き手と思われるものがある。その分類で特徴的な書写体が認められる。「薬」「搗」「等」「若」「右」などの字体に特徴がでている。さらに文書には罫線のあるもの、朱点があるものによって分類が可能である。紙質も重要であるが、短い時間での現物調査では不明の点も多かった。別置「極小断片」では、いくつかの文書に共通の特徴がみとめられた。

罫線や朱点があるものや無いもので字体の特徴が似たものをグループとして考えると、ある種の分類ができそうなのでこれを纏めてみた。

A）1052、1074、1078、1383、1385、1389、1390、3533、3551、10212、10407、10460、10513、10548、10580

B）1056、1076、1387、1391

C）1384、1388、1392、3191、

D）3526、3651、3820、3866、3976、3979、4012、10241

E）3532、3617、4363

これは一つの試作であるのでより厳密な検討が必要である。このような作業がどのような目的を持つことができるかを仮説として述べておきたい。これらの薬方は、中国の歴代の医学書の中に見出すことができない。その薬方に含まれる薬物に西域や南海の産物が含まれていることから、これらの処方がインドもしくは西域の薬方に由来すると考えられる。たとえば、1074号文書には「阿波羅至多」という処方名がある。それらは仏典の『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』「第九得勝印法（梵名阿波羅至多母達羅）」『牟梨曼陀羅咒經』「名為阿波羅至多母達羅」の中にあるものと同じと思われる。(48)

また陳明はこれらの薬方のなかに『医理精華』や『外台秘要』、『不空羂索神變眞言經』などの処方に関係するのではないかと指摘している。(49)たとえば1078号文書にはその傾向が窺える。

油一升共煎取油濾
蓮子草汁四升針沙二
・烏麻油一升　勃盆地叨（勺藥）
鹿搗和煎ゝ取油濾之盛一瓶中密塞口
齋前時鼻一ゝ孔中着卅涕又淨澆□
食如此頻經六？箇月依法着藥令白
令黒色何況於人乎但須已上所有頭
□末？　□方　・你利　□□草
髮爲黒？

蓮子草は、『証類本草』で鱧腸とよばれ、汁を塗ると髪や眉を黒く繁らす効果がのべられ、『外台秘要』には、蓮子草の膏薬は髪を生やせ白髪を変化させて黒くすることを述べている。この効用は『医心方』にまで伝来して記述がある。同様の記載は『医理精華』にもある。(50)

いまその薬方書を同定することができないが、文書にある種の共通性があるとなれば、由来書物の同定に近づくことができると思われるから

である。

まとめ

大谷文書の医学資料は多彩な側面をもっている。中国医学の薬物書『本草集注』や、鍼灸の文献など中国本土由来の文献が認められた。さらに記載される多くの薬物に西方由来のものが多いことなども明らかとなった。その原因は、大谷文書の持つ資料の地理的性格に求められるであろう。さらに物価文書の薬物の売買単位が小両であることも、文献を裏付けるものである。薬物学的には薬方量を間違わないため旧来の単位を用いることが一つの手段であったことを示している。この報告は目録制作の概況報告である。

補記

出校後、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部小曽戸洋部長から５４６７号文書は、ドイツの吐魯番出土『本草集注』残片（ＣＨ１０３６Ｖ）の僚本ではないかとの指摘をうけた。この５４６７文書を再検討すると、「取」「有」「兒」「寒」などに共通性が認められ、同一人の筆になるものと考えられる。また両文書の残存部分も『本草集注』の中では同じ虫獣部に属している。このことから、大谷５４６７文書とドイツのＣＨ１０３６Ｖ文書は同一文献に由来するものとすることができる。出土地について大谷文書は明らかでないが、同じ墓、もしくは同時代に埋葬された墳墓からの出土品と考えられる。そのことは裏面文書の性格を考える上でも重要である。

注

（1）小田義久『大谷文書の研究』（法藏館、一九九六）九―三六頁

（2）百済康義ら『イラン語断片集成：大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵 中央アジア出土イラン語資料』（龍谷大学善本叢書17、法藏館、一九九七）四頁、大谷文書一一五九号文書。
眞田有美「大谷探険隊将来梵文仏典資料」『中央アジア古代語文献』西域文化研究會編（西域文化研究）第四、京都 西域文化研究會 一九六一

六一八号文書 Aṣṭāṅgahṛidaya saṃhitā『八支心髄集』、八世紀頃の Vāgbhaṭa の著作

六一九号文書 Rogaviniçcaya『病決定』、Mādhavakara の著作 Mādhavanidāna 或は nidāna という名で知られている。インドにおける病理学についての重要な作品。以後の医書はすべてこの書を標準としている。

六二〇号文書 Siddhiyoga『成就瑜伽』Vṛinda の著作、一名 Vṛindamādhava

（3）小田義久『大谷文書の研究』六頁
百済康義「大谷探険隊収集西域文化資料とその関連資料」『仏教文化研究所紀要』第35集（龍谷大学仏教文化研究所、一九九六）四一―五七頁
都築晶子「共同研究大谷文書の整理と研究」『仏教文化研究所紀要』第四四集（龍谷大学仏教文化研究所、二〇〇五）八一―一一〇頁

（4）周丕顯「敦煌科技書巻叢談」、『敦煌学輯刊』第二輯、一九八一

（5）上山大峻編『本草集注序録・比丘含注戒本』（龍谷大学善本叢書16、法藏館、一九九七）解説編には以下の論文と釋文が含まれる。
藤枝晃「写本解説」二〇七―二一九頁、赤堀昭「敦煌本『本草集注』解

説」二二〇―二三一頁、櫻井謙介・小林清市「『本草集注』関連資料考異」二三二―二三九頁、「『本草集注』序録釋文」二四〇―二八九頁、上山大峻・龍口明生「龍谷大学所蔵敦煌本『比丘含注戒本』解説」二九〇―三〇一頁

(6) 渡邊幸三「燉煌出土本草集注序録の文献学的研究」(『日本東洋医学会誌』四巻三号、一九五三)(『本草書の研究』一七八―一九五頁(財)武田科学振興財団、一九八七に所収)一三九―一六四頁

三木栄「西域出土医薬関係文献総合解説目録」(『東洋学報』四七巻、一九九四)

岡西為人『本草概説』(創元社、一九七七)

宮下三郎「敦煌本の本草医書」(『講座敦煌5・敦煌漢文文献』大東出版社、一九九二)四八九―五〇五頁

真柳誠「3巻本『本草集注』と出土史料」(『薬史学雑誌』三五巻二号一三五―一四三頁、二〇〇〇年一二月)

(7) 前掲『本草集注序録・比丘含注戒本』の赤堀昭論文。

真柳の前掲論文によると『別録』の作者は陶弘景とは別の陶という人物ではないかという説がある。

(8) 『本草経集注』小嶋尚真・森立之ら一八五二年(嘉永五)に重輯、岡西為人訂補ならびに解題(南大阪印刷センター、一九七二)

(9) 岡西為人『重輯新修本草』(学術図書刊行会、一九七八)一〇一頁

(10) 真柳誠、前掲「3巻本『本草集注』と出土史料」。

(11) 真柳誠、前掲「3巻本『本草集注』と出土史料」。

(12) 真柳誠「目で見る漢方史料館(64)現存最古の中国本草―トルファン出土の『本草集注』」(『漢方の臨床』四〇巻八号一〇八二―八四頁、一九九三年八月)

(13) 渡邊幸三「中央亜細亜出土本草集注に対する文献学的研究」(『本草書の研究』、(財)武田科学振興財団、一九八七)二四八―二六五頁

(14) 三木栄、前掲「西域出土医薬関係文献総合解説目録」一二頁

(15) 藤枝晃編『トルファン出土仏典の研究　高昌残影釈録』(法藏館、二〇〇五)二一九―二二〇頁

(16) 馬継興ら『敦煌医薬文献輯校』(江蘇古籍出版社、一九九八)四八六頁

(17) 現在敦煌などの中央アジア出土文物についてインターネットで公開されつつある。写真資料はこのプロジェクトを利用した。

The International Dunhuang Project
http://idp.bl.uk/idp.a4d

(18) 経済学的・法制学的に研究したものには以下の論文がある。

小田義久『大谷文書の研究』四三―四七頁

仁井田陞「市の取引制度と物品價格表―唐關市令との關係―」『補訂中國法制史研究　土地法　取引法』、東京大学出版会、一九八〇)七九五―八二六頁(原載『西域文化研究』Ⅲ「敦煌吐魯社會經濟資料」下)

池田温「中国古代物価の一考察」(『史学雑誌』第七十七編1・2、一九六八)

池田温「盛唐物価資料をめぐって―天宝2年交河郡估案の断簡追加を中心にして」(『シルクロード研究』創刊号、創価大学シルクロード研究センター、一九九八)六九―九〇頁

(19) 三木栄、前掲「西域出土医薬関係文献総合解説目録」(『東洋学報』四七巻、一九九四)

真柳誠「目で見る漢方史料館(85)唐代の薬価文書」(『漢方の臨床』四二巻六号六五八―六六〇頁、一九九五年六月)

(20) 冨谷至校注狩谷棭斎『本朝度量衡権衡攷』1・2、『東洋文庫』537・546平凡社、一九九二)

真柳誠「日中薬用量相違の背景」(『漢方の臨床』三六巻二号六一二―六一九頁、一九八九)

藤平健「分量について」(『漢方の臨床』第二七巻一〇九号、一九八〇)一九頁

(21) 前掲、狩谷棭斎『本朝度量衡権衡攷』四四頁、一〇八頁、一六二頁

(22) 薛宗正「從出土文書看唐代磧西的漢文教育、儒学和漢方医学」(『吐魯番學

研究専輯』一八一―一九〇頁、敦煌吐魯番學新疆研究資料中心編、一九九〇）

（23）岡西為人、前掲『重輯新修本草』

（24）岡西為人、前掲『重輯新修本草』を用いた。

『新修本草』を選んだ理由は、同時代の薬物の標準がこの書物に記載されていると考えるからである。

（25）青木香は木香である。本草集注にも記載されるが外国から来たものとする。大秦では毒腫を治療し悪気を消すのに効果がある。

「木香、味辛温、無毒。〈略〉一名蜜香。生永昌山谷。陶隱居云、此即青木香也。永昌不復貢、今皆從外國舶音白上來。乃云大秦國、以療毒腫、消惡氣、有驗。今皆用合香、不入藥用。惟制蛇蟲、凡用之、常能煮以沐浴大佳爾。唐本注云、此有一種當以崑崙來者、為佳。出西胡來者、不善。」

『證類本草』、巻六

（26）鬱金（ウコン）は、薬物であると同時に香料でもある。馬にも使っていた。

「鬱金、味辛苦寒、無毒、主血積、下氣、生肌、止血、破惡血、血淋尿血、金瘡。唐本注〈略〉生蜀地及西戎、馬藥用之、破血而補、胡人謂之馬述。」

『證類本草』巻九

（27）華解（4933）は草薢である。また華薢と書かれている。『神農本草経』にある。

（28）阿魏藥、「阿魏、味辛平、無毒。主殺諸小蟲、去臭氣、破癥積、下惡氣、除邪鬼蠱毒。生西蕃及崑崙。」『證類本草』巻九。『一切經音義』巻一〇〇：「薺苨（上齊祭反、下泥底反、藥名也。言阿魏根。似此藥而臭如大蒜。煎成阿魏藥）。」（CBETA, T54, no. 2128, p. 927, c19）惠超『往五天竺國傳』上巻

淺根（截根）は、阿魏の截根である。それは西域の古くからある薬物で、西チベットや崑侖（天山の南部）から出産される。『新修本草』では草部中品に分類される。しかし『酉陽雜俎』では樹という。フェルラ・アサフェティダ（和名）である。大茴香属の植物で、二メートル近くなる。王珍仁、孫慧珍「吐魯番出土文書中所見祖国医薬方研究」『北京図書館館刊』一九九七―一。

（29）肥多羅は、陳明によれば印度續草という。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九二頁

（30）至多勒は、陳明によれば梵語からの翻訳でなく吐火羅語 citarāk からの翻訳かという。梵語の推定音は citraka、ラテン語学名 Plumbago Zeylanica、白雪花、白花丹とする。『証類本草』の池徳勒であるという。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九三頁

（31）縛塞伽は、陳明によれば香薬とする。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九五頁

（32）波羅娑你は、『佛本行集經』に「波羅婆尼書（[*]隋言樹葉）。」（CBETA, T03, no. 190, p. 703, c15）とあり、婆尼は樹の葉を表す。娑你は婆尼の誤写か。不明。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九五頁参照。

（33）唵羅は、庵羅である。現在のマンゴーである。

「菴羅果。味甘溫、食之止渴、動風氣天行。病後及飽食後、俱不可食之。又不可同大蒜辛物食、令人患黃病、樹生、狀若林檎而極大。」『證類本草』巻二十三

（34）鄔伽布史波は、陳明によれば nāga-puṣpa の音訳であり、Nāga は龍、puṣpa は花で、龍花すなわち『証類本草』の那耆悉であるという。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九八頁

（35）蘇？摩鄔花は、仏典にみる須摩那である。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇〇頁

（36）樹伐帝は、陳明によれば śatāvarī の略した訳語で、天門冬であるという。陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇〇頁

（37）畢鉢は、蓽撥である。長胡椒である。「蓽撥、味辛、大温、無毒。主温中、下氣、補腰脚、殺腥氣、消食、除胃冷、陰疝、痃癖、其根名蓽撥沒。主五勞七傷、陰汗核腫。生波斯國。」『證類本草』巻九

（38）蘇伏靈善は注の文に釗銀とあり、銀の削ったものである。

「銀屑、味辛平、有毒。主安五藏、定心神、止驚悸、除邪氣、久服輕身長年。生永昌、採無時。」

生銀の項に「『海藥』云、謹按、南越志云、出波斯國。有天生藥銀波斯國、用為試藥指鐶、大寒無毒。主堅筋骨、鎮心、明目、風熱癲疾等。」『證類本草』巻四

(39) 楼灰は不明、石灰か。石灰は壁に使う。

(40) 偏桃人（仁）、はペルシャから伝来したもの。巴旦杏仁である。普通のアーモンドである。

「偏桃出波斯國、波斯國呼為婆淡樹、長五六丈圍四五尺、葉似桃而濶大。三月開花白色、花落結實、狀如桃子、而形偏、故謂之偏桃。其肉苦澁、不可噉。核中仁、甘甜。西域諸國、並珍之。」『酉陽雜俎』巻十八。

「安西大都護府、〈略〉至徳元載、更名鎮西後、復為安西。土貢礪砂緋氈偏桃人。」『新唐書』巻四十。

(41) 「燕支、焉支、燕脂、胭脂也。古今注、燕支葉、似薊花、似蒲公。出西方。土人、以染名為燕支。中國人謂之紅藍。」『別雅』巻一

(42) □磨勒（菴摩勒？）

『海藥』生西國、大小如枳橘子狀。梵云、菴摩勒果、是也。」『證類本草』巻十三。

熱帯アジア原産の落葉低木である。果実は食用又は薬用となる。庵摩勒とも書かれる。

(43) 烏塩「烏鹽、西域骨咄有四大塩山、山出烏塩」『白孔六帖』巻十六。

『往五天竺國傳』新羅慧超記に『又跋賀那國（Ferghana）東有一國。名骨咄國。』（T2089.51.978c09）とある。突厥系の國である。

(44) 胡乾薑

「天竺乾薑、味辛温、無毒。主冷氣、寒中、宿食、不消、腹脹、下痢、腰背疼、痃癖、氣塊、悪血積聚、生婆羅門國、似薑、小黄。一名胡乾薑。」『證類本草』、巻六

(45) 「縮沙蜜、味辛温、無毒。主虚勞、冷瀉、宿食不消、赤白洩痢、腹中虚痛、下氣。生南地、苗似廉薑、形如白豆蔻、其皮緊厚而皺黄赤色、八月採。今附、臣禹錫等謹按、藥性論云、縮沙蜜君、出波斯國。」『證類本草』巻九

『梵語雑名』巻一：「縮砂蜜、素乞史（二合）謎囉 su kṣi me ra」(CBETA, T54, no. 2135, p. 1238, a24)

(46) 青黛は『釋名』の靛花である。李時珍は、黛とは眉の色であるという。劉熙の『釋名』には眉毛を取りさってこれに代えるから、これを黛というとある。青黛は植物であり、ペルシャから伝来したものが良品だったが、後には藍の上澄みで青黛の代用とされた。

「青黛、味鹹寒、無毒。主解諸藥毒、小兒諸熱、驚癇發熱人〈略〉從波斯國來、及太原。幷廬陵南康等」『證類本草』巻九

(47) 羊聲香は、一〇七四号文書に「一本に云う、畢鉢を用う」とあり、同様のものと思われる。不明。

(48) 『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』「第九得勝印法（梵名阿波羅至多母達羅）」(CBETA, T19, no. 1006, p. 656, a26-27)。『牟梨曼陀羅咒經』「名為阿波羅至多母達羅」(CBETA, T19, no. 1007, p. 662, b23-24)。

(49) 陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』一八五—二〇八頁

(50) 陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』一九六頁

大谷文書の医学資料

凡例

〇〇〇〇〇　〇〇書断片　〉文書番号、書名もしくは文献名、原則として小田義久の『大谷文書集成』の命名に随う。極小断片の文書名はなるべく小田の方式に従う。

①漢語　〉文書の言語を示す

②〇行　〉行数を示す

③〇×〇　〉文書の大きさをしめす。『大谷文書集成』に随う。

④文書の罫線、朱点などを注記する。引用文献を示す。録文〔録〕のあるものである。

仁井田陞『西域文化研究』第三、「敦煌吐魯番社會經濟資料」（下）一九六〇　〉仁井田『西域』Ⅲと略称。

池田温『中国古代藉帳研究―概観・録文』一九七九　〉池田『藉帳』と略称。

東洋文庫『吐魯番・敦煌出土文書漢文文書研究文献目録』（一九九〇）に分類された研究文献は番号のみを示す。〉『東洋文庫』（一九九〇）と略称

⑤『大谷文書集成』のページ　図版番号を示す。

⑥録文を示す。小田の見解と異なるときはなるべく注記する。

「猪飼按」は猪飼の案文を示す。

530

『本草集注』第一・序録、

①漢語

②七二二行

③27.9×2022.2

④小川琢治「支那に於ける本草学の起原と神農本草経」『史林』四巻四号、一九一九

羅振玉『吉石盦叢書』（一九一六）に写真版

尚林方廣錩榮新江『中國所藏「大谷収集品」概況—特別以敦煌寫經爲中心—』四四頁　龍谷大学佛教文化研究所西域研究會（一九九一）

⑤『集成』Ⅰ　図版一〇七、叢春雨『敦煌中医薬全書』（一九九四）三八〇頁

⑥現在、正式な報告書である以下の文献があるので贅言をしない。

上山大峻責任編集『敦煌写本　本草集注序録・比丘含注戒本』、（龍谷大学善本叢書16　龍谷大学佛教文化研究所編）法藏館、一九九七

1052

薬方書断片

①漢語

②六行

③7×8

④罫線あり。朱の鉤、朱点あり。

陳明『印度梵文醫典『醫理精華』研究』八六頁

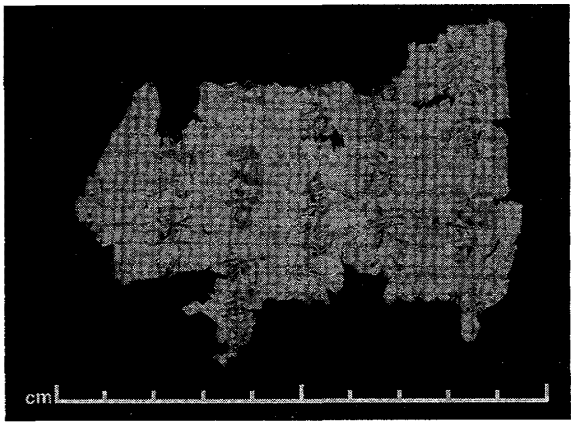
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』一八九頁

⑤『集成』Ⅰ一一頁　図版一〇七

⑥

□（痰）發心痛　・又方　□┌
□右？緣痰發心痛┌
□痛方　烏塩　□┌
□□「又方　訶梨勒？┌
□□胡乾薑□┌
□須？□┌」

「猪飼按」（痰）は陳明による。「・」は朱点、「「」は朱の鉤である。

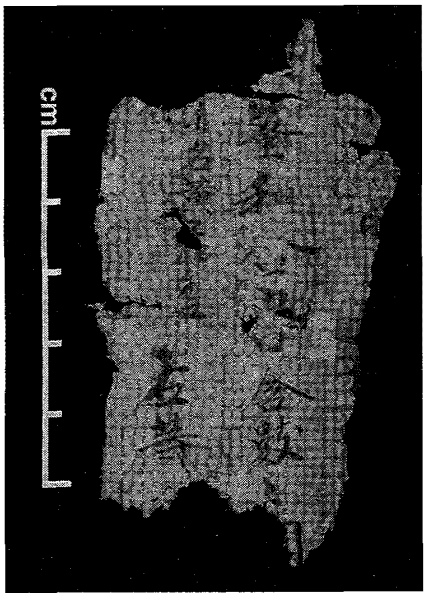


1056　薬方書断片

①漢語
②三行
③7×4
④朱点あり。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九〇頁
⑤『集成』Ⅰ一二頁 図版一〇七
⑥

□□散？　□┌
□□　密和合丸口含數ゝ回？┌
□亦名黄子□木也　・右等□┌

「猪飼按」「亦名黄子□木也」は注の文、細字行。「子□」の部分の□、一字か二



字か不明。「・」は朱点である。「右等□」の□を陳明は「右等分」とするも、不明。

1074

薬方書断片

①漢語

②一四行

③11.5×20.2

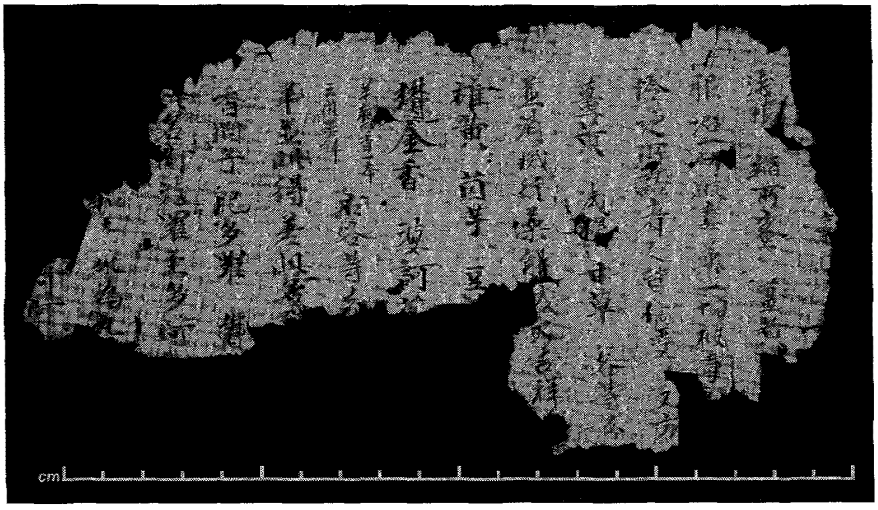
④各行罫線あり。朱點あり。

陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』一九〇頁

⑤『集成』Ⅰ一六頁 図版一〇七

⑥

□□□氣已入？言？□
浅根　縮所密　薑黄　紫□
服治一切被毒薬一切被毒悪□
怜愛所語者人皆信受　・又方□
薑黄　浅根　甘草　・各等分□
並消滅行薬能成大吉祥□□
雄黄　茵芋　豆蔻？□□
欝金香　婆訶□□
羊聲香一本　云用畢鉢　・右等分□
羊並此得差此名單？□



香附子　肥多羅　欝□┌
此名阿波羅至多阿□┌
└和牛尿為丸□┌
└可阿□┌

「猪飼按」一一行目「羊並此」に「羊」と「此」に朱点を重ねる。「・」は朱点である。二行目「服」、小田は「眼」とするが「服」である。書写者は「服」「眼」を非常に似た書体で書く、但「眼」には「艮」の中に必ず横画がある。一三八三号、一三八九号文書参照。

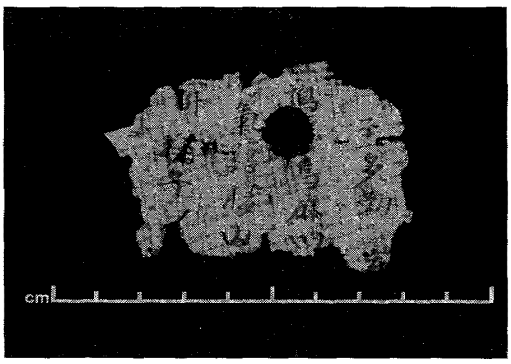
この処方は仏典に関係するか。阿波羅至多は処方の名前である。『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』に「第九得勝印法（梵名阿波羅至多母達羅）」という。（CBETA, T19, no. 1006, p. 656, a26-27）。『牟梨曼陀羅咒經』「名為阿波羅至多母達羅」（CBETA, T19, no. 1007, p. 662, b23-24）とある。

1076

薬方書断片

①漢語
②四行
③5×6
④罫線有り。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九三頁
⑤『集成』Ⅰ一六頁　図版一〇七、
⑥

└至多勒　麻？┌



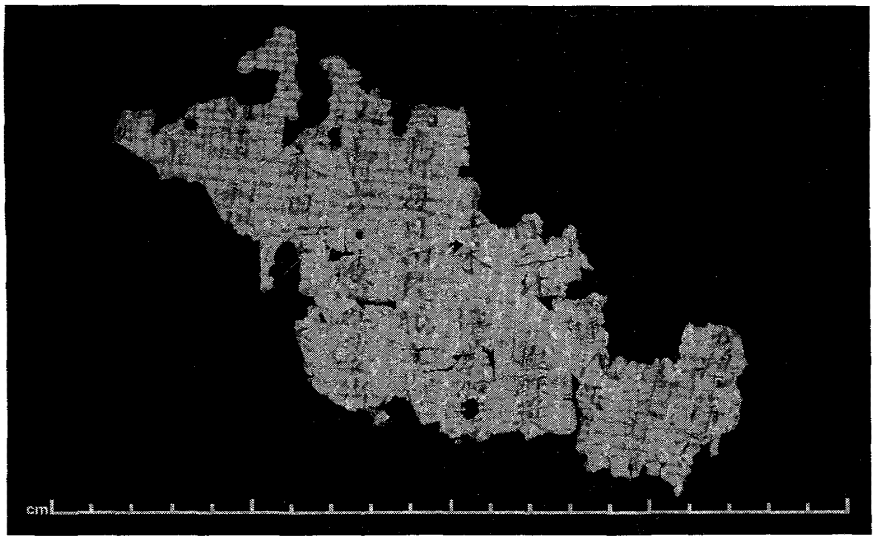
└□搗□烏麻油┌
└□気弱腹内┌
└一升　柏子　□┌

「猪飼按」「一升」は注の文、細字行。

1077　薬方書断片

①漢語
②一一行
③9×16
④朱点あり。陳明『殊方異薬―出土文書與西域醫學―』一九五頁
⑤『集成』I一六頁　図版一〇八
⑥

└分搗篩依？法？┌
└婦人断緒┌
└十種兆亜□┌
└油三升　極酢漿┌
└□青木　縛塞伽二？支┌
└為膏毎日和乳服支脚不┌
└・又膏方　波羅娑你┌
└烏麻油一升　□□┌



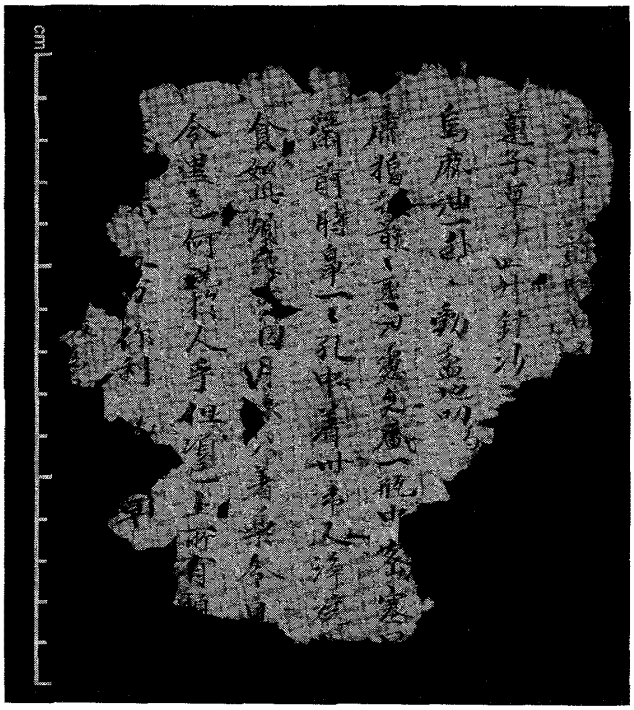
□□檀香　和但□
□灌□
□□□

「猪飼按」「・」は朱点である。

1078　薬方書断片

①漢語
②九行
③13.5×11.5
④毎行罫線あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九六頁
⑤『集成』1一七頁　図版一〇八
⑥

油一升共煎取油濾□
蓮子草汁四升針沙二□
・烏麻油一升　勃盆地叨勺藥□
鹿搗和煎ゝ取油濾之盛一瓶中密塞口□
齋前時鼻一ゝ孔中着卅涕又淨澆□□
食如此頻經六？箇月依法着藥令白□
令黒色何況於人乎但須已上所有頭□



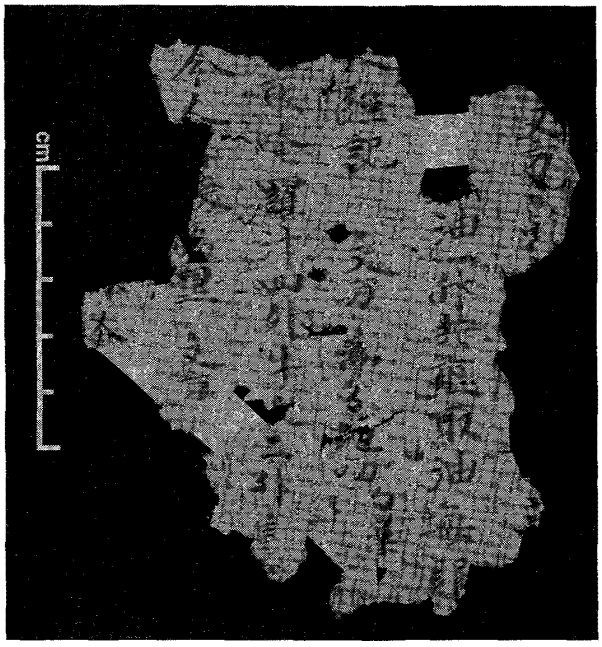
□末？　□方　・你利　□□草□
　□髪爲黒？□

「猪飼按」「・」は朱点である。「勺薬」は芍薬である。注の文で細字行である。

1383　薬方書断片

①漢語
②六行
③9.7×8.5
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異薬―出土文書與西域醫學―』一九七頁
⑤『集成』Ⅰ四九頁　図版一〇八
⑥

□又方・乾□　□□□
　□油一升共煎取油毎服□
□人強記・又方・勃分地叨勺薬是□
　□取唵羅汁四升牛乳二升烏麻？□
□令人白髪爲黒・又方□
　□□唵？□



「猪飼按」「・」は朱点である。「勺薬　是」は注の文であり、細字行である。芍薬である。一〇七八号文書の「勃盆地叨」は「勃分地叨」と同じである。「毎服」を小田は「毎眼」とする。「令人白髪爲黒」を小田は「令人□幾？爲黒」とする。

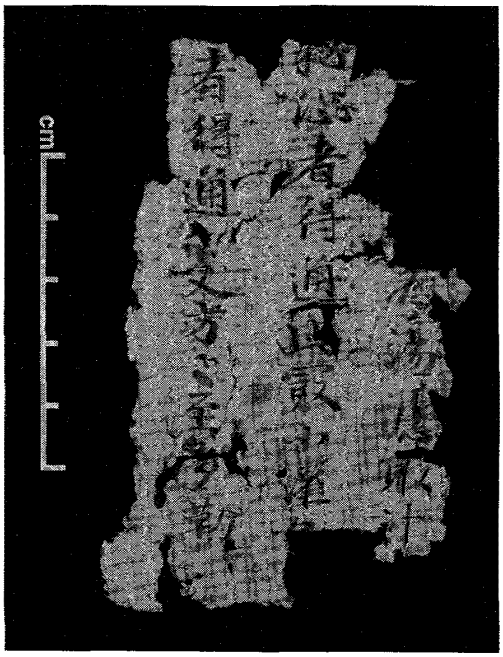
1384　薬方書断片

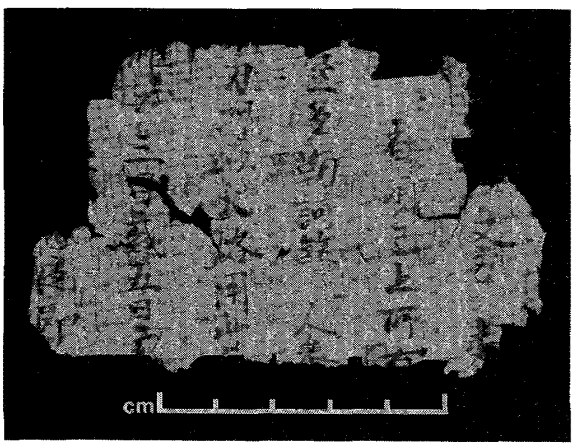
①漢語
②三行
③8.9×4.9
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九八頁
⑤『集成』Ⅰ五〇頁　図版一〇八
⑥

□爲湯濾取汁□
□秘淞者得通此最小灌□□
□者得通・又方・至多勒□
「猪飼按」「・」は朱点である。朱点といってもやや暗い。

1385　薬方書断片

①漢語
②六行
③6×8.9
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九八頁
⑤『集成』Ⅰ五〇頁　図版一〇八





⑥

□・又方・若□
□□者須已上所有□
□至多勒訶熬　人參□
□□刀□以火烙用此法？□
□唯・或三日・或五日・或□
□□夜即□

「猪飼按」「・」は朱点である。

1386

薬方関係文書？

①漢語

②A面四行、B面二行

③6.6×5.5

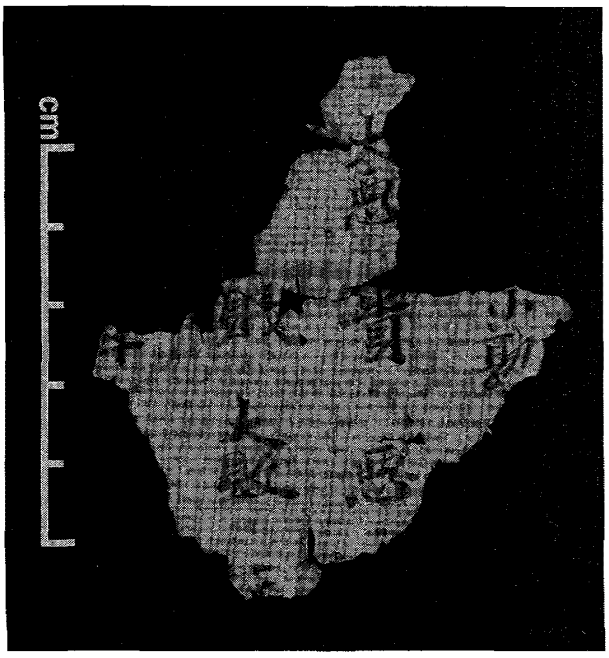
④A面各字に朱点を附す。紙背（B面）は仏教関係。

⑤『集成』I五〇頁　図版一〇八

⑥

A面

□小熟□
□・大惡・貴・惡□
□・賤・大敗・□□



□干？・□

B面（写真略）

□□成佛之根源□□

□天所□

「猪飼按」薬方書ではないか。不明。「・」は朱点である。

1387

薬方書片

①漢語

②六行

③6.1×8.7

④朱点あり。罫あり。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九八頁

⑤『集成』Ⅰ五〇頁 図版一〇九

⑥

□□　　郁伽布史波□

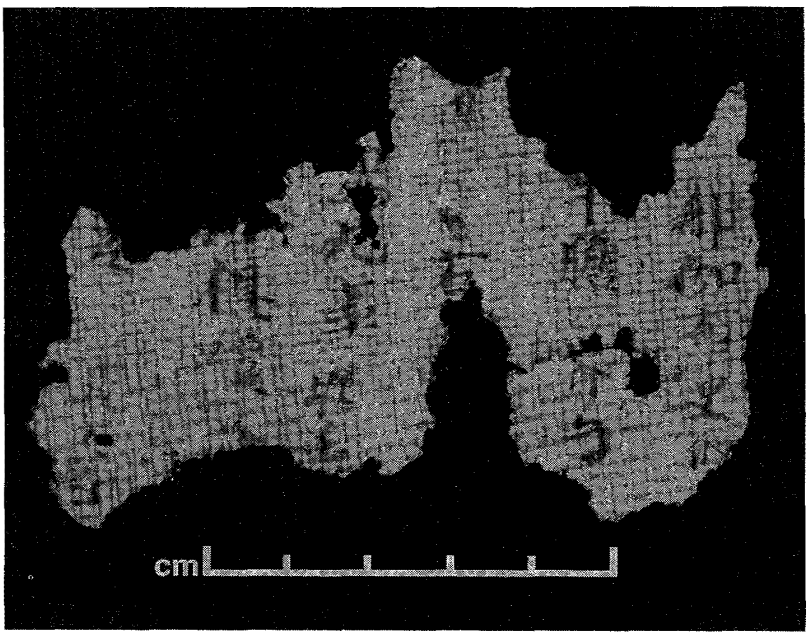
□牛膽　芥子□

□□　・右

□□丸藥服□□

□□俱嚧□□

□差　・若？惡？□



「猪飼按」「・」は朱点である。

1388　薬方書片

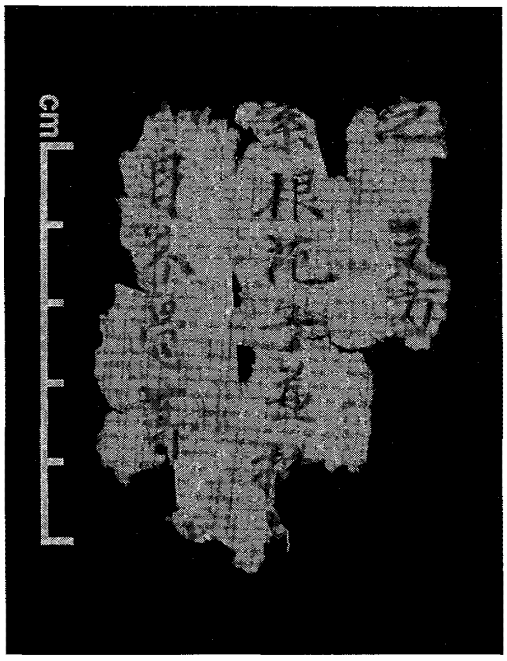
①漢語
②三行
③5.7×4.1
④罫有り。朱点あり。
⑤『集成』I五一頁　図版一〇九
⑥
□之　・又方□
□系根花子並搗篩？□□
□身分骨節　□□

「猪飼按」「・」は朱点である。やや墨色が強い。

1389　薬方書片

①漢語
②三行
③6.1×5.3
④朱点あり。数紙貼合。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九九頁



⑤『集成』Ⅰ五一頁 図版一〇九

⑥

└□中即差　・又方┌

└□和暖水服痢出□┌

└但　・阿魏藥　・□┌

「猪飼按」「・」は朱点である。「服」、小田は「眼」とする。大谷文書では「服」「眼」は非常に似た書体で書かれている。一〇七四号文書按文参照

1390

薬方書断片

①漢語

②七行

③11×9.3

④朱点あり。罫あり。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一九九頁

⑤『集成』Ⅰ五一頁 図版一〇九

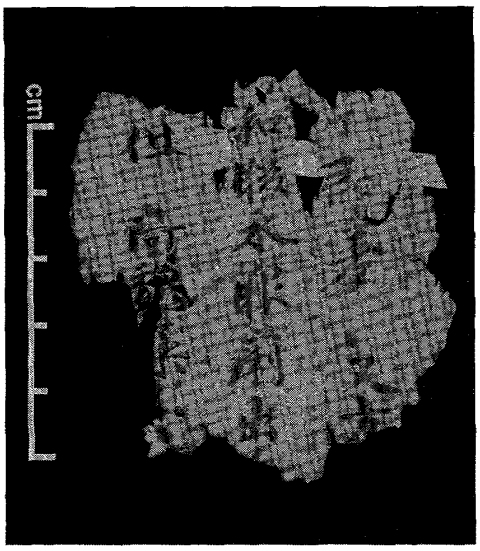
⑥

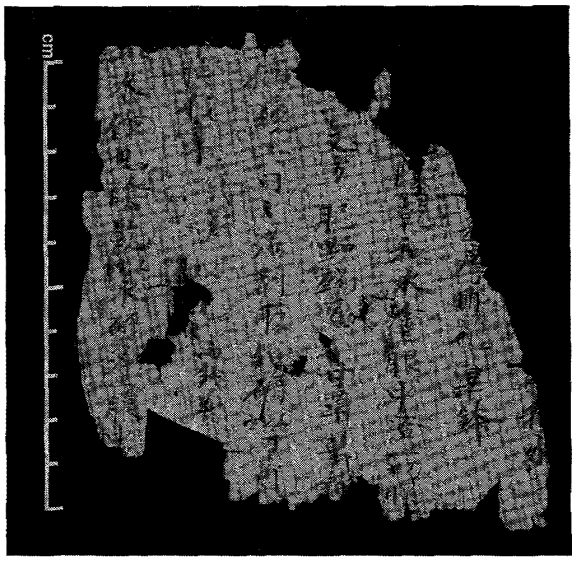
└服？和？水┌

└蘇？摩郁花　畢鉢┌

└□陰乾和水塗眼中治一切眼┌

└・又方　肥野竭匿？・甘草畢鉢┌





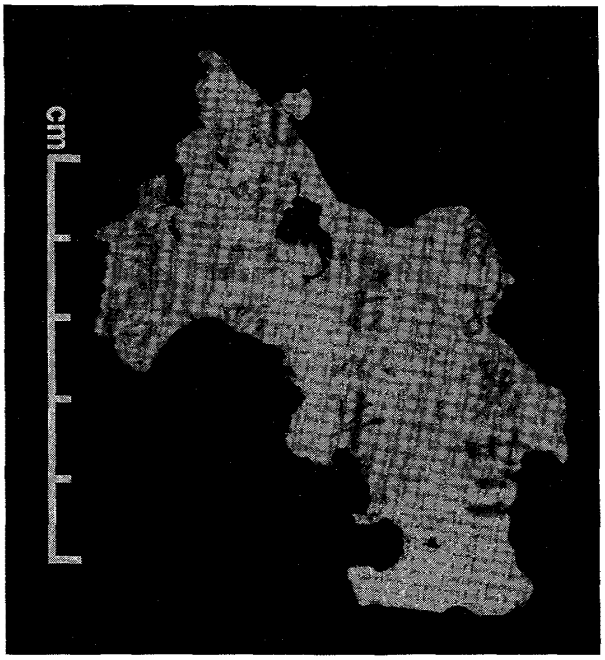
□停經六日ゝ滿刮取細研以刀角□
□□樹伐帝兩錢對伽□ゝ兩錢對□
□和水作丸陰乾以水研塗眼中□

「猪飼按」「・」は朱点である。「兩錢對」は注の文、細行である。

1391　薬方書片

①漢語
②四行
③6.7×5.9
④朱点有り。
⑤『集成』I五一頁　図版一〇九
⑥

□能品第卅二□
□・若以牛□□
□氣嗽肛脱□
□□曰？爲□□



「猪飼按」「・」は朱点である。「能品第卅二」は、仏典のように見えるが翻訳された医学書の一節であろう。

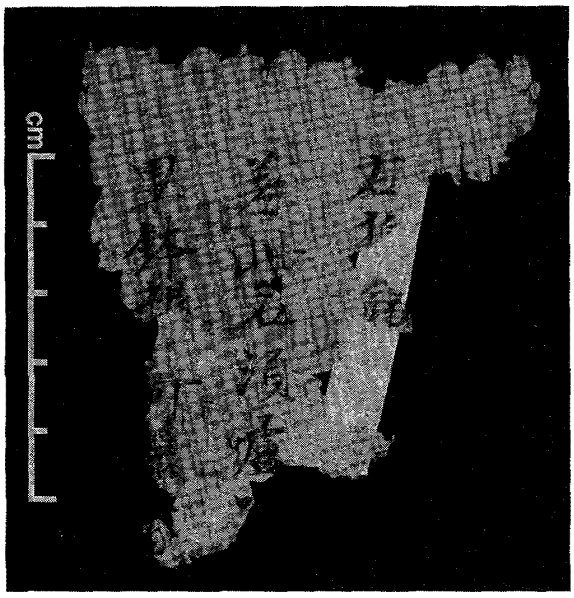
1392　薬方断片

①漢語

②四行
③7.1×6.3
④罫あり。
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇一頁
⑤『集成』Ⅰ五一頁 図版一〇九
⑥

□┌
・右揭篩┌
差此名須盧□┌
畢鉢根 訶麗□┌

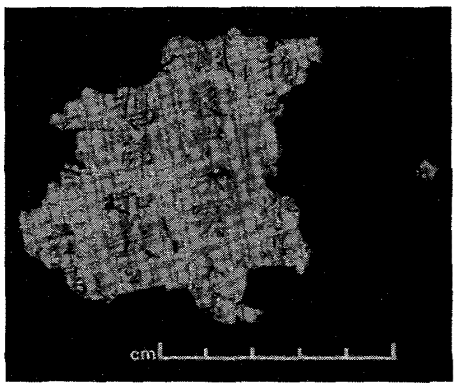
「猪飼按」「訶麗□」は訶梨勒であろう。「・」は朱点である。



1393

薬方断片

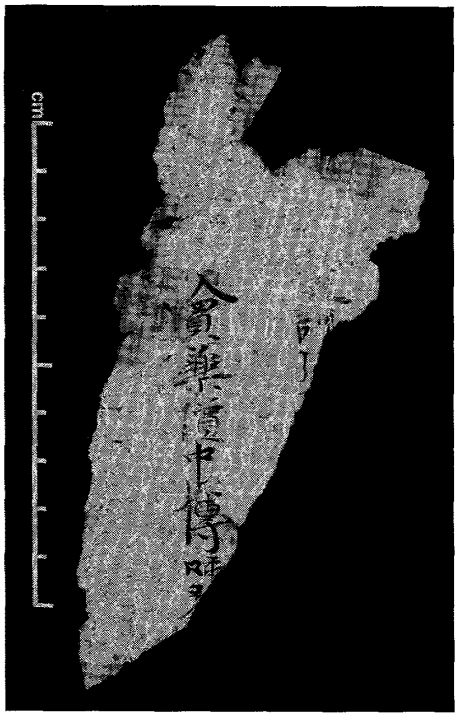
①漢語
②四行
③6.6×6.8
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇一頁
⑤『集成』Ⅰ五二頁 図版一〇九
⑥



└揚？頭？□灌膏┐
└風夜中不喫及餘┐
└搗篩和殺羊？┐
└石？密　・右搗┐
「猪飼按」「・」は朱点である。

1502　高昌国時代古墓出土文書

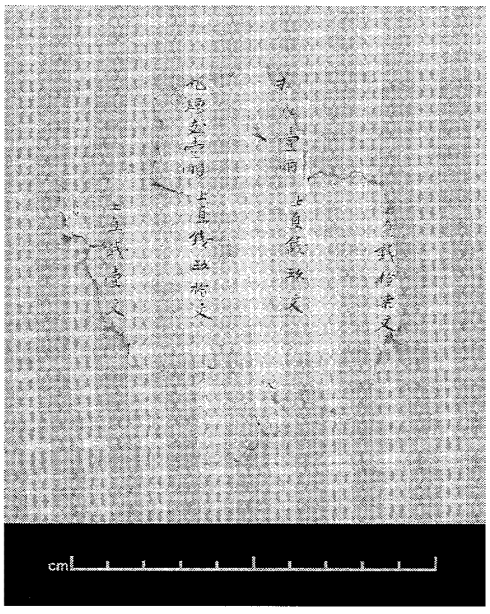
①漢語
②二行
③13.5×5.5
④二紙貼合。紙背黒地に黄色の模様附着
⑤『集成』Ⅰ七一頁　図版九
⑥
└之訓□┐
└入買藥價中止？傳呼？□┐
「猪飼按」薬を買い價をどうするのであろうか。上部に人物の顔図か。
10668と同文か。



3033　物價文書

①漢語

②四行
③11.5×9
④書体（B）。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二〇九頁。池田『籍帳』四五七～四五八頁
東洋文庫（一九九〇）No.2045
⑤『集成』Ⅱ八頁 図版一七
⑥



└上直錢拾柒文┐
桂？心壹兩　上直錢玖┐
花煙支壹兩　上直錢玖拾文┐
└上直錢壹文┐

「猪飼按」桂心の価格が記載されている。薬物と考えられるが、単位は小兩ではない。

3036

物價文書
①漢語
②七行
③15.5×12
④書体（B）。三四五〇号文書と綴合。四行目「空青」三〇八一号に見える。〔録〕
仁井田『西域』Ⅲ二〇九頁。池田『籍帳』四五八頁、東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2888,2889
⑤『集成』Ⅱ九頁 図版一七
⑥

朱沙壹兩　上直錢壹佰拾文
石硃壹兩　上直錢拾文
空青壹兩　上直錢捌拾文
銅硃壹兩　上直□　□
銅□

「猪飼按」石藥の部類。小兩ではない。

3041

物價文書

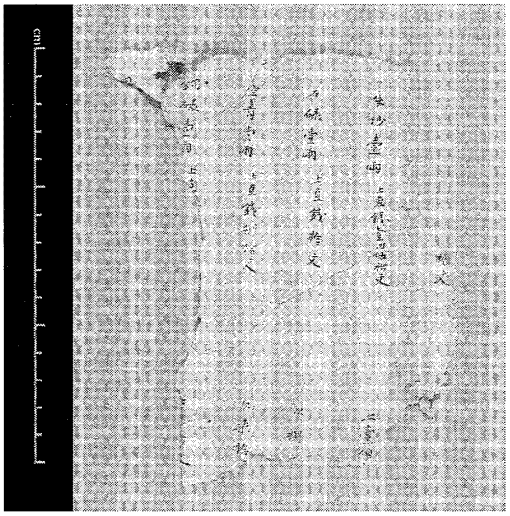
①漢語
②七行
③11.7×20.4
④東洋文庫（一九九〇）No.2041
⑤『集成』II一〇頁 図版一八
⑥

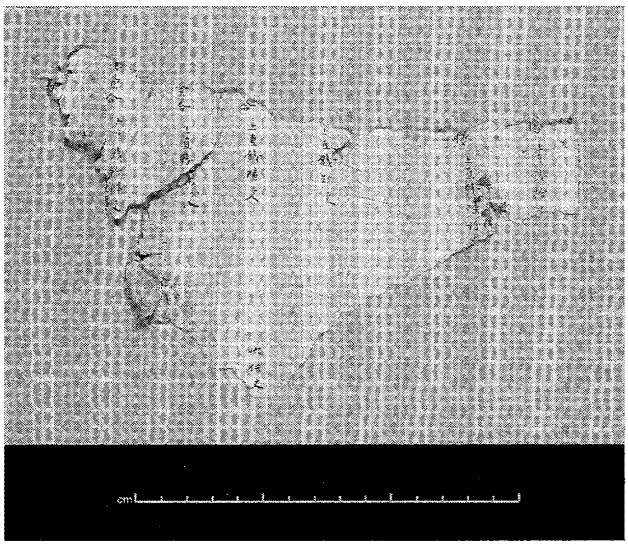
□勝　上直錢拾柒□
□勝　上直錢陸拾文□
□　上直錢玖文□
□合　上直錢陸文
□壹合　上直錢捌文□

次壹佰□□
次捌文？□
次柒拾文？□
次□拾文？□

次伍文□

□拾文□





密壹合　　上直錢拾肆文□
□

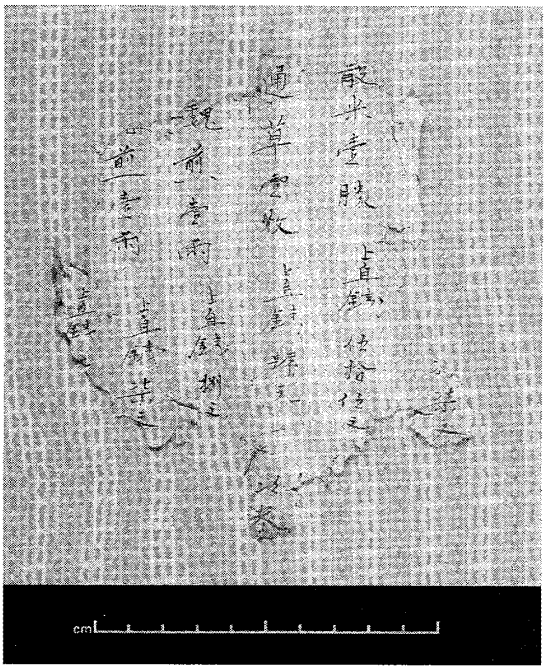
「猪飼按」「密」は、小田は「流密」かという。三〇六二号文書で「流密」は合で量っている。

3042　物價文書

①漢語
②六行
③14×12.5
④東洋文庫（一九九〇）No.1101,2888,2889
⑤『集成』II一〇頁 図版一〇
⑥

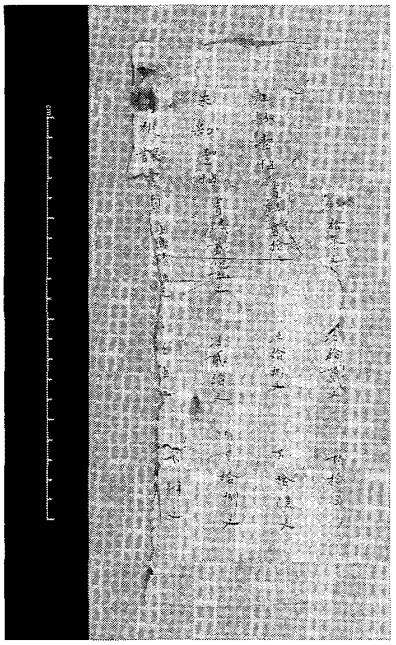
□拾？柒文□
散米壹勝　上直錢伍拾伍文□
通草壹枚　上直錢肆文　次参□
□魏煎壹兩　上直錢捌文□
□□煎壹兩　上直錢柒文□
□上直錢柒？□

「猪飼按」「魏煎」は阿魏藥か。



3050　物價文書

①漢語
②四行
③27×9
④書体（A）。紙背「官印」あり。ねずみ色の塗料及び絵画片附着。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二〇九頁。池田『籍帳』四五八頁、東洋文庫（一九九〇）No.2888,2889
⑤『集成』Ⅱ一二頁 図版一一
⑥



□錢拾參文　次拾貳文　下拾文
輕粉壹帖　上直錢貳拾文　次拾捌文　下拾陸文
朱粉壹帖　上直錢貳拾貳文　次貳拾文　下拾捌文
胡桃讓？壹□　上直錢陸？文　次伍文　下肆文

「猪飼按」「輕粉壹帖」「朱粉壹帖」の帖は、薬量の一帖（ひとはり）、すなわち一剤をいうのであろうか。その量は不明である。

3054　物價文書

①漢語
②三行
③27.5×8
④書体（A）。紙背ねずみ色の塗料および絵画片附着。「交河郡都督府之印」あり。〔録〕〔写〕仁井田『西域』Ⅲ二一〇頁 図版二一。〔録〕池田『籍帳』四四八頁。東洋文庫（一九九〇）No.1198,2045,2386,2888,2889

⑤『集成』II一三頁 図版一一

⑥

菓子行

乾蒲萄壹勝上直錢拾柒文次拾陸文下拾伍文

大棗壹勝　上直錢陸文　次伍文　下肆文

「猪飼按」乾葡萄と大棗は菓子行からの報告である。

3056

物價文書

①漢語

②四行

③28.5×7.5

④書体（B）。「官印」あり。三〇七一号文書と綴合。紙背ねずみ色の塗料附着。

〔録〕仁井田『西域』III二一〇頁。池田『籍帳』四五七頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2888,2889

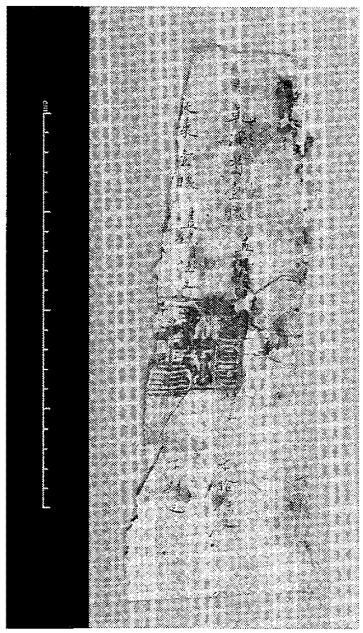
⑤『集成』II一三頁 図版一一

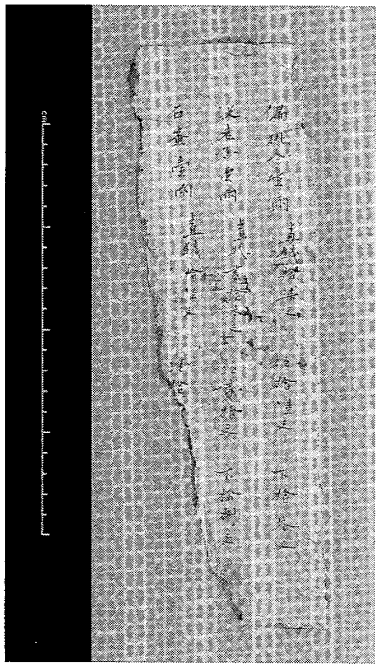
⑥

偏桃人壹兩　上直錢拾柒文　次拾陸文　下拾參文

没老子壹兩　上直錢貳拾參文次貳拾參文下拾捌文

石密壹兩　上直錢拾陸文　次拾□





□兩　上直錢□

「猪飼按」人は仁である。偏桃人は偏桃仁である。ペルシャ由来の薬物である。没老子は不明。三〇七一号文書に続く。

3061

物價文書

①漢語

②二行

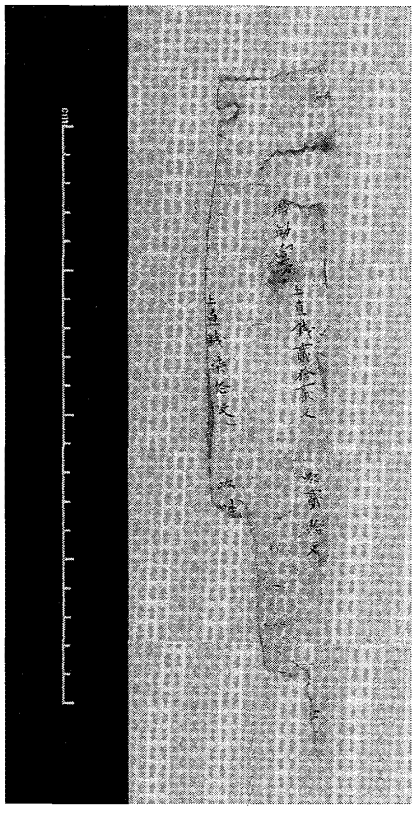
③23.4×3.7

④書体（B）

〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一〇頁。池田『籍帳』四五七頁。東洋文庫（一九九〇）No.1171,2045,2888,2889

⑤『集成』Ⅱ一四頁　図版一八

⑥



□磨勒壹兩　上直錢貳拾貳文　次貳拾文　□

□壹兩　上直錢柒拾文　次陸□

「猪飼按」「□磨勒」は、「菴摩勒」か。『證類本草』巻十三

3062

物價文書

①漢語

②三行

③24×5.8

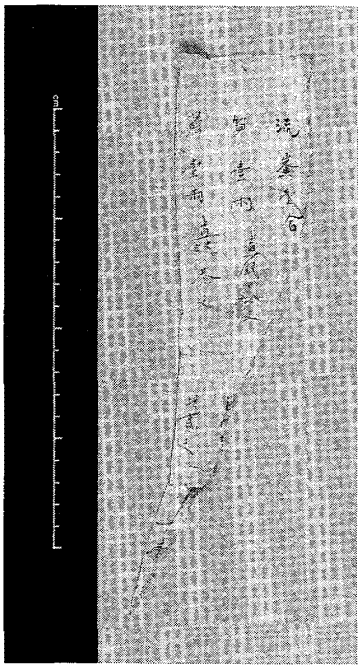
④書体（A）。紙背「官印」あり。ねずみ色の塗料および絵画片附着。

〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一〇頁。池田『籍帳』四四八頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2888,2889

⑤『集成』Ⅱ一四頁 図版一二

⑥

流密壹合┌
笋　壹兩　上直錢柒文┐
薺　壹兩　上直錢參文　次貳文　下壹文



3071

物價文書

①漢語

②三行

③28.5×6.5

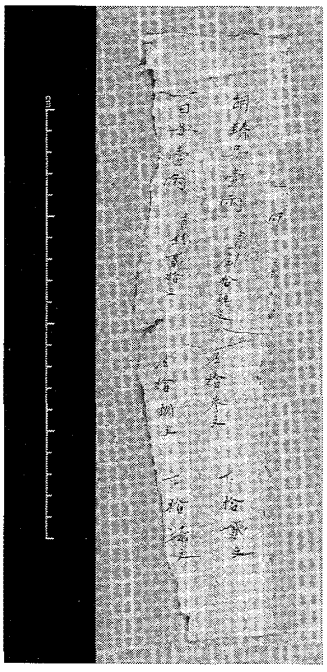
④書体（A）。

〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一一頁。池田『籍帳』四五七頁。東洋文庫（一九九〇）No.1308,2045,2888,2889

⑤『集成』Ⅱ一六頁 図版一一

⑥

┌壹兩　□□錢拾陸文　次伍文┐
胡臻子壹兩　上直錢拾肆文　次拾參文　下拾貳文
一日子壹兩　上直錢貳拾文　次拾捌文　下拾柒文



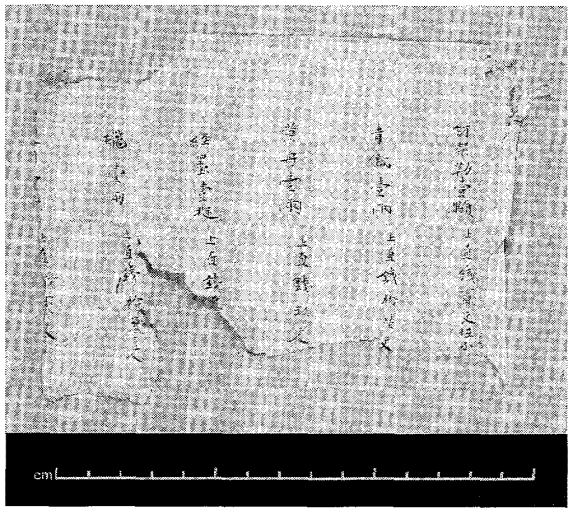
「猪飼按」前に三〇五六号文書と綴合する。

3076　物價文書

①漢語
②六行
③12×14.5
④書体（B）。紙背朱およびねずみ色の塗料附着。東洋文庫（一九九〇）No.2888,2889
陳明『印度梵文醫典『醫理精華』研究』八六頁。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一一頁　池田『籍帳』四五八頁。
⑤『集成』Ⅱ一七頁　図版一七・一八
⑥

訶梨勒壹顆　上直錢貳文伍分┌
青黛壹兩　上直錢拾陸文　┐
黄丹壹兩　上直錢玖文　┐
経墨壹挺　上直錢參　┐
蠟　壹兩　上直錢拾參文　┐
□□□　上直錢貳文　┐

「猪飼按」訶梨勒は顆の状態だった。計量単位である。



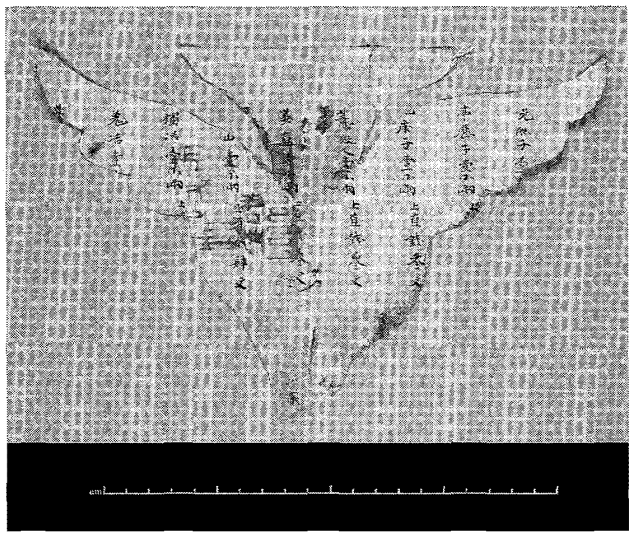
3088　物價文書

①漢語
②九行
③17×24.5

④書体（C）。朱印あり。〔録〕小笠原『西域』II四〇九頁。仁井田『西域』III二一二頁。池田『籍帳』四五五―六頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2239,2888,2889

⑤『集成』II二〇頁 図版二二

⑥



兎絲子壹小□
亭歷子壹小兩　上□
蛇？床子壹小兩　上直錢參文□
薏苡仁壹小兩　上直錢參文□
萎蕤壹小兩　上直錢參文　次貳
□山壹小兩　上直錢肆文□
獨活壹小兩　上直□
羌活壹□
嵩□

「猪飼按」薬物の計量単位が小兩である。小田は「薏苡仁」「萎蕤」を誤認している。これらの薬物は『新修本草』に認められる薬物である。小兩を用いるのは、中国由来の薬物だけかも知れない。

3089

物價文書

①漢語

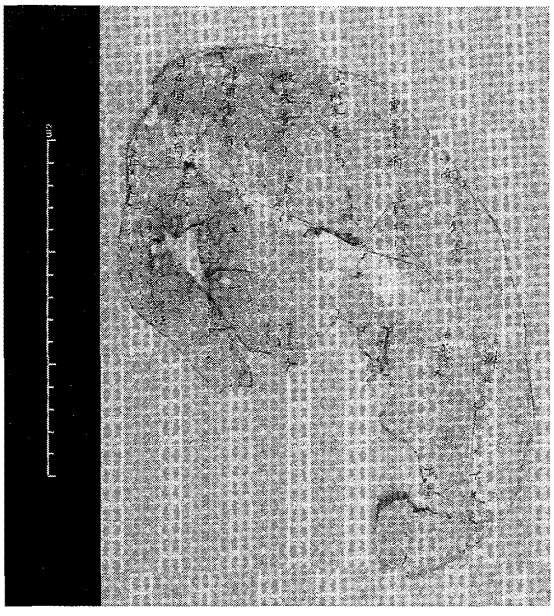
②八行

③23.7×17.3

④書体（A）。〔録〕小笠原『西域』II四〇九頁。仁井田『西域』III二一二頁。池田『籍帳』四五五頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2239,2888,2889。馬継興『敦煌古醫籍考釋』（1988）五〇五頁。

⑤『集成』II二一頁 図版一五

⑥



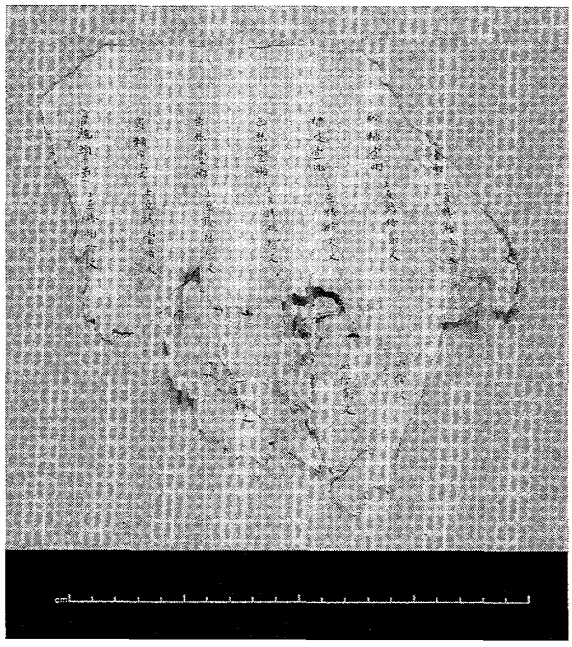
□次肆文　下参文
□小兩　上直錢参文　次貳文　下壹文
紫？雪　壹小兩　上直錢拾陸文　次拾伍文□
天門冬　壹小兩　上直錢□□　次□
酸棗　壹小兩　上直錢陸文　次伍文□
犀角　壹小兩　上直錢玖文　次捌文□
白石脂　壹小兩　上直錢陸文　次伍文□
上直錢参文

「猪飼按」薬物の計量単位が小兩である。三〇五四号文書の「大棗」は計量単位が「壹勝」であり、ここの酸棗は小兩単位で量られている。同様ものであっても、目的よって計量単位が異なっていた。三〇八八号文書按文参照。

3091　物價文書

①漢語
②八行
③21×19

④書体（A）。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一二―一三頁。池田『籍帳』四五九頁。
東洋文庫（一九九〇）No.1061,2888,2889
⑤『集成』Ⅱ二一頁 図版一八
⑥



□陸？文□
黄？連？壹兩　上直錢拾伍文□
砂糖壹兩　上直錢拾貳文　次拾文□
橘皮壹兩　上直錢拾參文　次拾貳文□
色絲壹兩　上直錢玖拾文　□□□
生絲壹兩　上直錢陸拾文　次伍拾文□
羅頭巾壹　上直錢壹佰文□
官絁頭巾壹　上直錢捌拾文□
「猪飼按」三〇九四号文書と対応する。二行目黄連か。

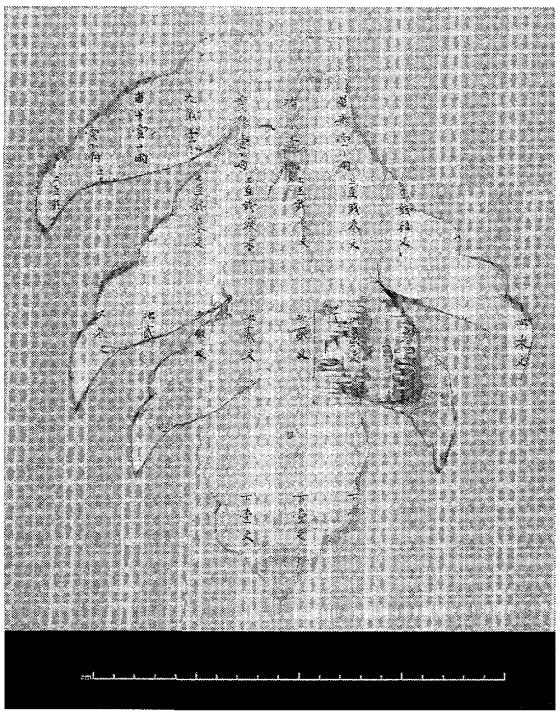
3092　物價文書

①漢語
②一〇行
③28.5×24
④書体（C）。朱印あり。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一二頁。池田『籍帳』四五四―五頁。
小笠原『西域』Ⅱ図版五〇。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2888,2889

⑤『集成』II二二頁　図版二三

⑥

□次参文□
□文　次□
□直錢肆文　次参文□
蜀柒壹小兩　上直錢參文　次貳文　下壹□
猪苓壹小兩　上直錢參文　次貳文　下壹文
貫衆壹小兩　上直錢參文　次貳文　下壹文
大戟壹小兩　上直錢參文　次貳文□
茵芋壹小兩　上□　□次貳□
□壹小兩　上直□　□次參文□
□兩　上直錢□□



「猪飼按」薬物の計量は小兩単位である。三四五二号文書と綴合する。三〇八八号文書の按文参照。

3093　物價文書

①漢語

②八行

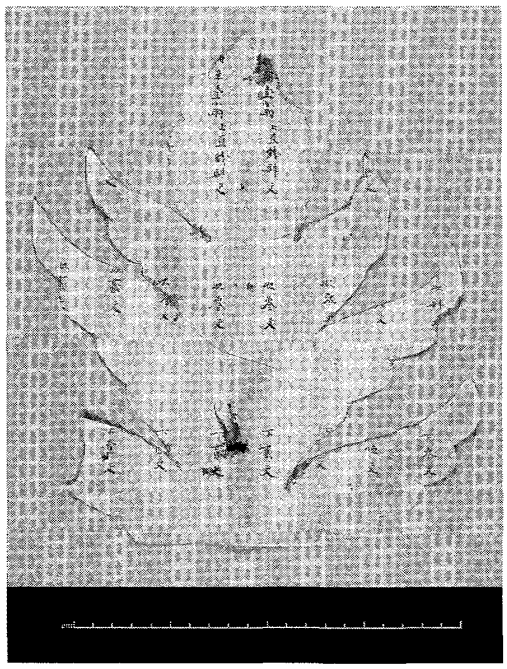
③27×23.5

④書体（C）。〔録〕池田『籍帳』四五五頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176

⑤『集成』II二二頁 図版二三

⑥

□次肆文　下參文
□錢柒文□□陸文　伍文
□次參文　下　文
前？胡壹小兩　上直錢肆文　次參文　下貳文
細辛壹小兩　上直錢肆文　次參文　下貳文
□直錢肆□次參文　下貳文
□文　次貳文　下壹文
□次貳文□



「猪飼按」薬物の計量単位が小兩である。

3094　物價文書

①漢語

②九行

③28×16.5

④書体（A）。〔録〕仁井田『西域』III二一三頁。池田『籍帳』四五九頁。東洋文庫（一九九〇）No.1101,1171,2888,2889

⑤『集成』II二三頁 図版一五

⑥

□拾伍文　下拾肆文

黄連壹兩　上直錢玖文　次捌文　下柒文

橘皮壹兩　上直錢拾貳文　次拾文　下玖文

砂糖壹兩　上直錢拾參文　次拾貳文　下拾文

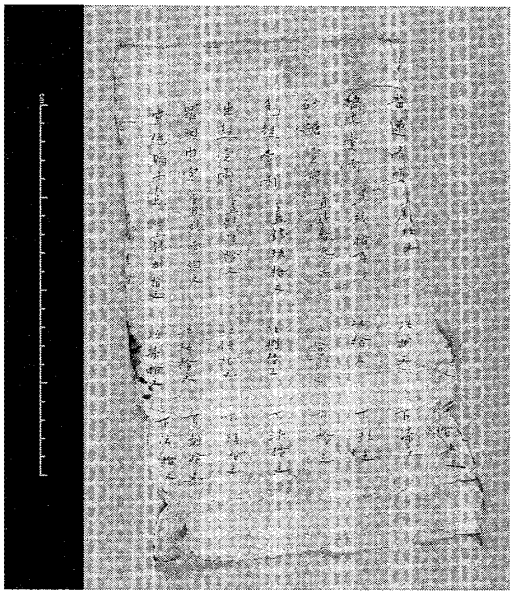
色絲壹兩　上直錢玖拾文　次捌拾文　下柒拾文

生絲壹兩　上直錢陸拾文　次伍拾文　下肆拾文

羅頭巾壹　上直錢壹佰文　次玖拾文　下捌拾文

官絁頭巾壹　上直錢捌拾文　次柒拾文　下陸拾文

□□　□　上直錢陸拾　□



「猪飼按」三〇九一号文書と対応する。「黄連」「橘皮」は通常薬物であるのに、小兩単位を使っていない。

3095

物價文書

①漢語

②七行

③24×18.5

④書体（C）。朱印あり。

〔録〕小笠原『西域』II四一〇頁、図版五〇。仁井田『西域』III二一三頁。

池田『籍帳』四五五頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2239,2888,2889

⑤『集成』II二三頁 図版二四

⑥

□次肆文□

□直錢貳文　次壹文　下柒分？

代？赭壹小兩　上直錢肆文　次參文□

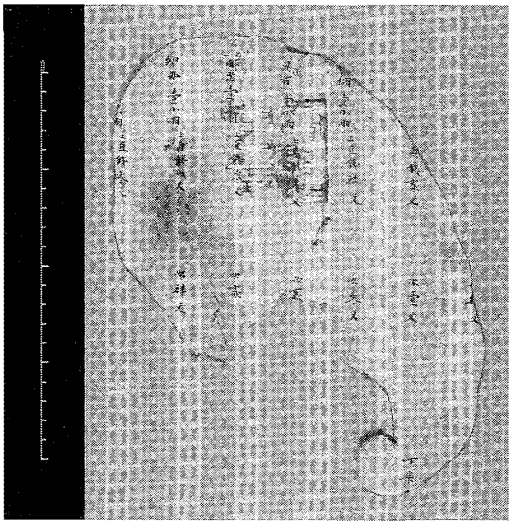
昆布壹小兩　上直錢參文　次貳□

白芷壹小兩　上直錢參文　次貳□

知母壹小兩　上直錢伍文　次肆文□

□小兩　上直錢參文□

「猪飼按」」薬物の計量は小兩単位である。三〇七八号文書と合同する。



3096　物價文書

①漢語

②八行

③28×17.5

④書体（B）。朱印あり。〔録〕小笠原『西域』II四一〇頁、図版五〇。仁井田『西域』III二一三頁。池田『籍帳』四五八—九頁。東洋文庫（一九九〇）No.1171,2239,2268,2288,2888,2889,2905。馬継興『敦煌古醫籍考釋』（一九八八）五〇五頁

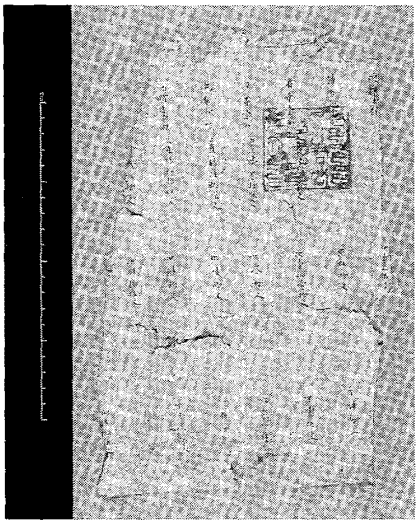
⑤『集成』II二三頁　図版一九

⑥

鞭鞘壹條　上直錢貳文　次壹文伍分□

麝金花壹分　上直錢陸拾文　次伍拾文　下肆拾文
麝香壹分　上直錢壹佰貳拾文　次壹佰壹拾文　下壹佰文
丁香壹分　上直錢參拾伍文　次參拾文　下貳拾伍文
沈香壹分　上直錢陸拾伍文　次陸拾文　下伍拾文
白檀香壹兩　上直錢肆拾伍文　次肆拾文　下參拾伍文
└　直錢伍拾文　次肆拾伍文　下肆拾文
└下肆拾伍文

「猪飼按」香料は分の単位で量られている。麝香の価格が際立っている。



3098　物價文書

①漢語
②七行
③28×24
④書体（C）。七行目に朱印一部あり。
〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一三頁。池田『籍帳』四五四頁。
小笠原『西域』II、図版五〇。
東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2239,2888,2889
⑤『集成』II二四頁 図版二四
⑥

└次捌文　下柒文

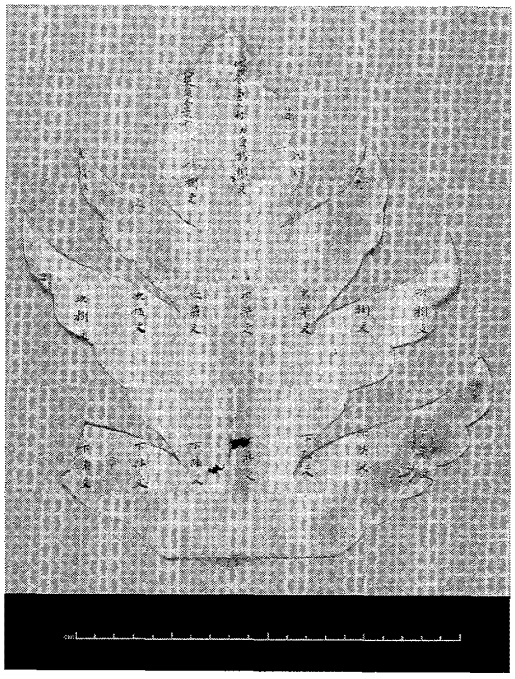
□玖文　□捌文　下柒文
□小兩　□錢捌文　次柒文　下陸文
茯苓壹小兩　上直錢捌文　次柒文　下陸文
呉茱萸壹小兩　上直錢捌文　次柒文　下陸文
□文　次伍文　下肆文
□直錢玖文　次捌文　下柒文

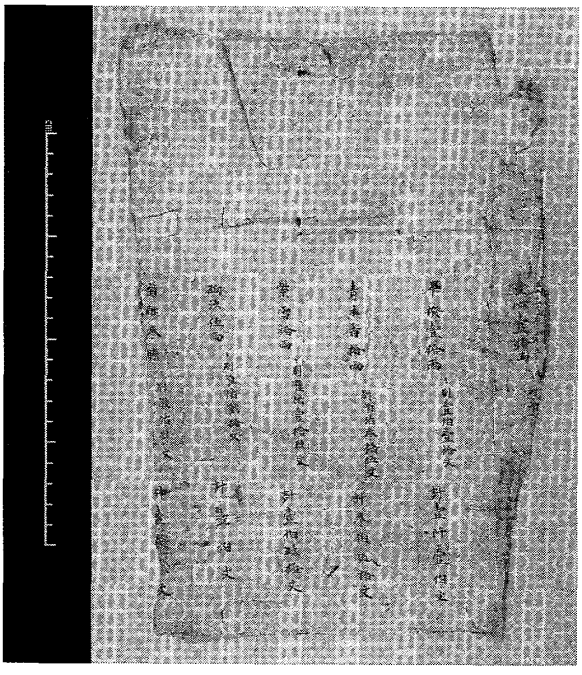
「猪飼按」薬物の計量単位が小兩である。

3099　薬香等購入價格文書

①漢語
②六行
③28.7×19.3
④書体（C）。紙背に朱印あり。東洋文庫（1990）No.2268
⑤『集成』II二四頁　図版六六
⑥

桂心壹拾兩　ゝ別准估□
畢撥壹拾兩　ゝ別壹佰壹拾文　計壹阡壹佰文
青木香拾兩　ゝ別准估參拾伍文　計參佰伍拾文
紫雪拾兩　ゝ別准估壹拾玖文　計壹佰玖拾文
硇沙伍兩　ゝ別准估貳拾文　計壹佰文





菊酢参勝　丶別准估肆文　計壹拾貳文

「猪飼按」薬物購入の総量がわかる。紫雪が三〇八九号文書で上が十六文とあるので、十九文はすこし高い。

3191　薬方書断片

①漢語

②七行

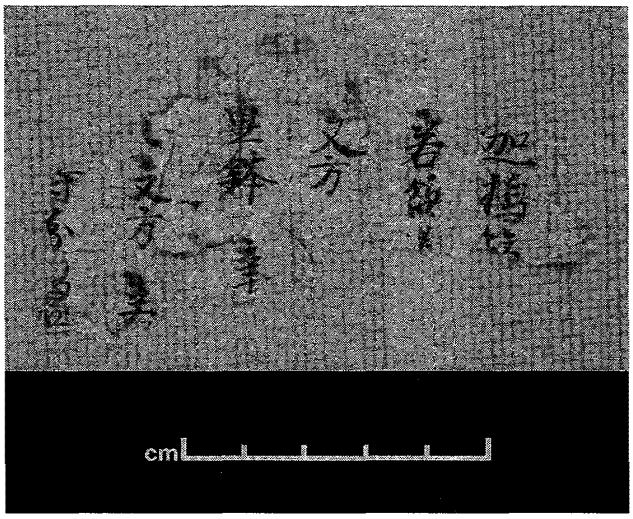
③4.5×9

④罫あり、朱点あり。

陳明『殊方異薬―出土文書與西域醫學―』二〇二頁

⑤『集成』II四一頁 図版六七

⑥



□□┐
└迦揭篩┐
└・若欲□┐
└・又方┐
└・畢鉢　辛？┐
└□・又方・若┐
└等？分爲？□┐

「猪飼按」「・」は朱点である。墨色に近い。

3220　紙表　陰陽要訣　紙裏　医学法書断片

紙表　陰陽要訣

①漢語

②一二行

③11×17.5

④

⑤『集成』II四八頁　図版七七

⑥録文略、写真略

紙裏　医学法書断片

①漢語

②一二行

③11×17.5

④罫線あり。朱点あり。〔録〕小笠原『西域』III二六一、二六二頁　図版三四。三木「西域出土医薬関係」『東洋学報』四七の一、一五八頁　馬継興『敦煌古醫籍考釋』（一九八八）四九〇頁

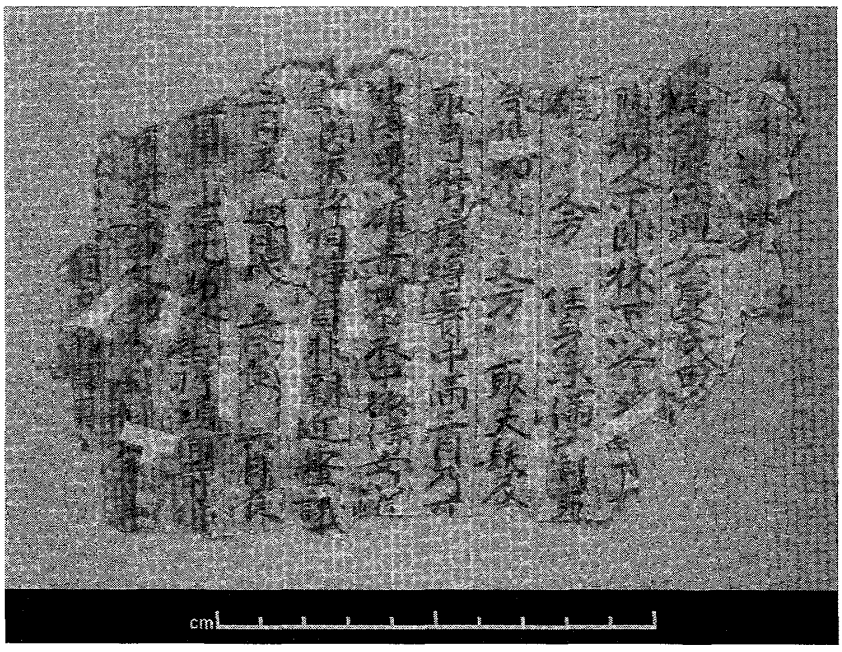
⑤『集成』II四八頁　図版七七

⑥

廿五　卅七　卌九　□┌

婦人懐妊廻女變成男┌

戀婦人取臥牀下以斧□□下□┌



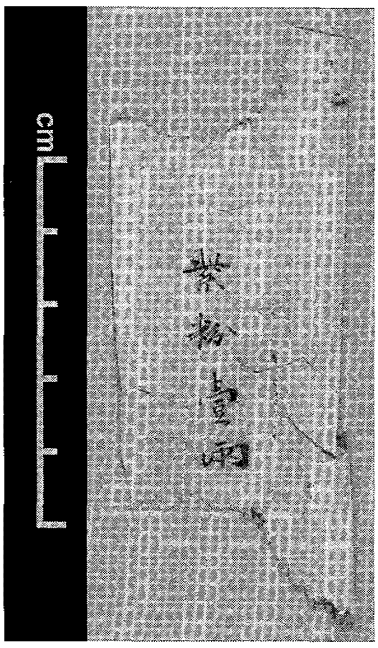
雄　・又方　任身未滿三月取┌
令使知之　・又方　取夫髮及┌
取弓弩弦縛胷中滿三月乃可┌
欲得男以雄黃帶衣中欲得女以雌┌
藥忌不許相傳自非親近密識□┌
三月亥　四月戌　五月辰　六月辰┌
□月　右凡婦人産將頭向前件┌
└有此文及田文男爲国相女爲王┌
└□□□相大天雨若漢□┌

「猪飼按」第十一行目、「此文」と「田文」は一字か。「・」は朱点である。この文も医学文書より占い文書である。

3414

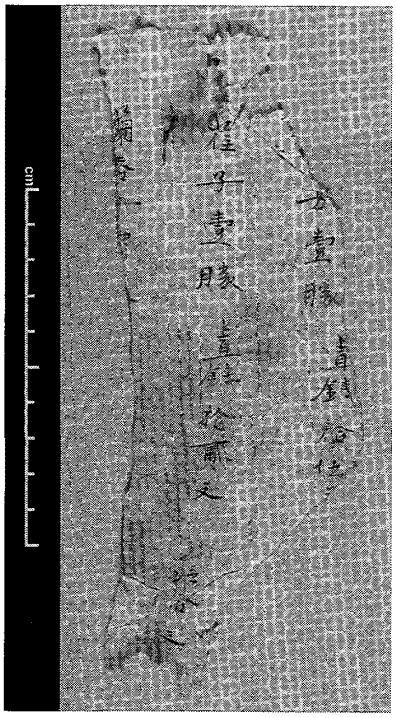
物價文書

①漢語
②一行
③8×3
④書体（B）。〔録〕仁井田『西域』Ⅲ二一四頁〔録〕池田『籍帳』四五八頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045,2176,2888,2889
⑤『集成』II九四頁 図版一九
⑥
紫粉　壹兩　上┌



3445　物價文書

①漢語
②三行
③16.5×5
④書体（A）。〔録〕池田『籍帳』四五〇頁。
東洋文庫（一九九〇）No.2045,2888,2889
⑤『集成』II九八頁　図版一六
⑥



└子壹勝　上直錢拾伍文┐
崔子壹勝　上直錢拾貳文　次拾文
蘭香子壹勝？┘

「猪飼按」「崔子」を小田は「荏子」とする。三四四一号文書と綴合する。

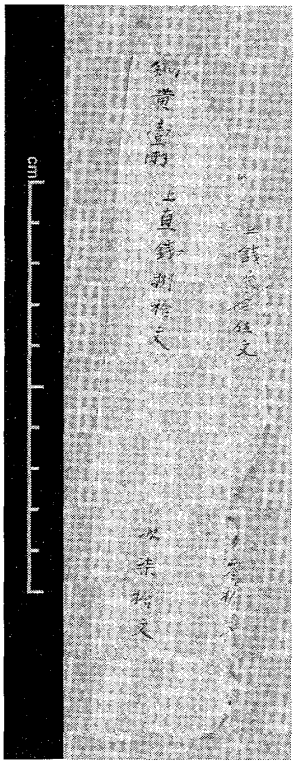
3450　物價文書

①漢語
②二行
③16.5×4
④書体（B）。〔録〕池田『籍帳』四五八頁。
東洋文庫（一九九〇）
⑤『集成』II九九頁　図版一七。

⑥

└上直錢參拾伍文　次參拾文┐
銅黃壹兩　上直錢捌拾文　次柒拾文┘

「猪飼按」三〇三六号文書と綴合する。

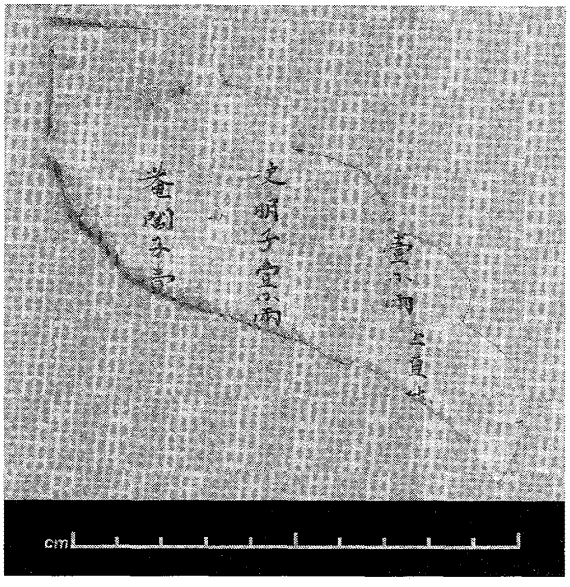


3452　物價文書

①漢語
②三行
③9.5×11
④書体（C）。〔録〕池田『籍帳』四五四頁。東洋文庫（一九九〇）No.2045
⑤『集成』II九九頁 図版二三
⑥

└壹小兩　上直錢┐
決明子壹小兩┌
菴閭子壹┘

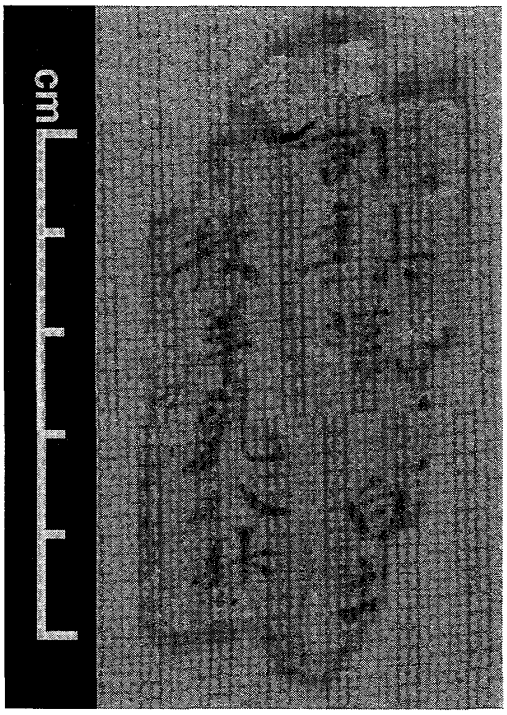
「猪飼按」三〇九二号文書と綴合する。薬物の計量単位が小兩である。



3526　薬方書小片

①漢語

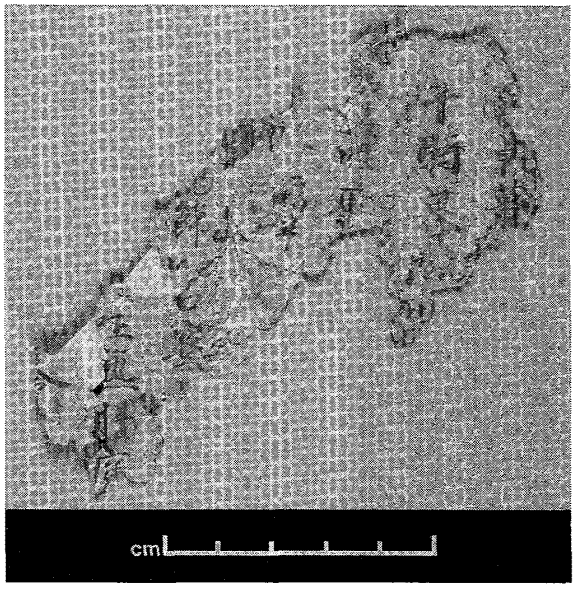
②二行
③6.5×3
④罫あり。
陳明『印度梵文醫典『醫理精華』研究』八三頁
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇三頁
⑤『集成』II 一一八頁 図版六七
⑥
└訶梨勒　白地？┐
└殺羊乳八升┐



3532

薬方書断片

①漢語
②八行
③9×10
④二紙貼合。罫あり。
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇三頁
⑤『集成』II 一一九頁 図版六七
⑥
└胡？乾薑┐
└午時暮間□┐



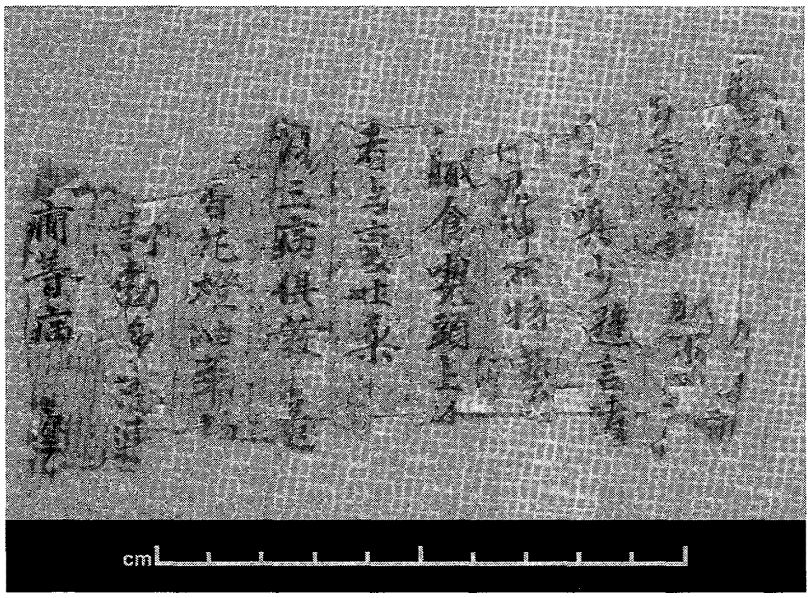
□□反吐痢□
□二兩半□
□鉢
揭篩以石密□□
□吐熱肝痛□
□令□

「猪飼按」「二兩半」は注の文、細字行である。

3533

薬方書断片

①漢語
②一〇行
③6.5×14.5
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇四頁
⑤『集成』II一一九頁 図版六七
⑥
□驚恐及□　□□□
□多言餘？説？　麼不□□
□者少嗔少遜言□
□月？鬼神所特（持？）藝□□

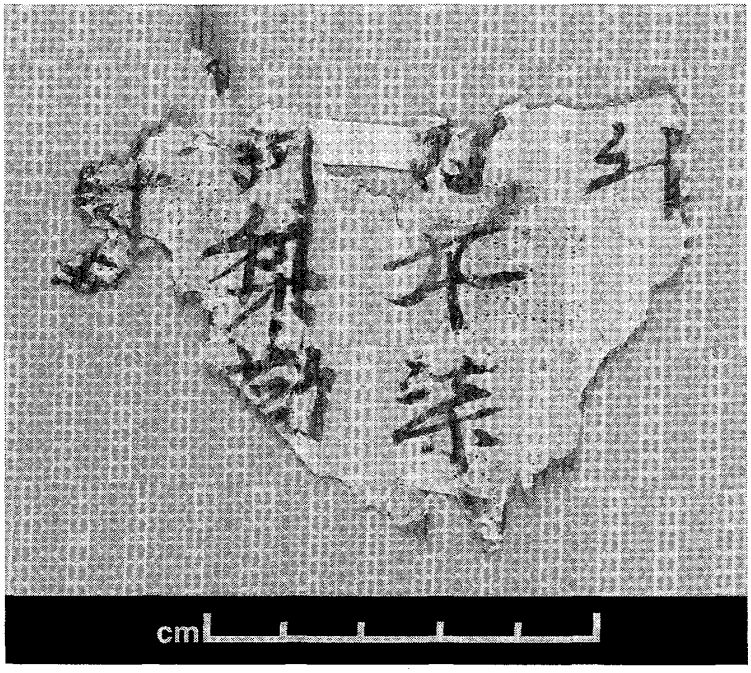


□膩食喫頭上塗？□
□者与變吐藥□
□湯三病俱發・若□
□香花燈油華物□
□訶勃多密逮？連□
□癇等病・摩□
「猪飼按」「・」は朱点である。墨色に近い。

3537

性質不明文書（A面薬方書）

A面
①漢語
②四行
③6×8.2
④陳明『印度梵文醫典『醫理精華』研究』八五頁
⑤『集成』II一二〇頁 図版八八
⑥
□升□
□内？本柒□
□□訶梨勒□
□薟？金？□



B面

①漢語

②二行

③6×8.2

④

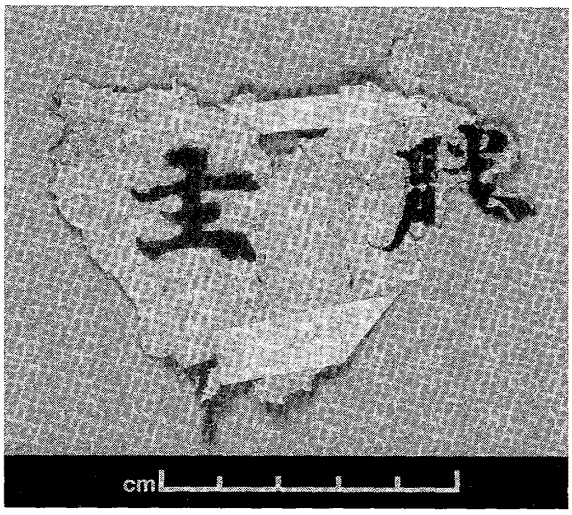
⑤『集成』II一二〇頁 図版八八

⑥

└勝┌

└主 □┌

「猪飼按」縁取りした文字がある。A面は薬方書と思われる。



3539

薬方書断片

①漢語

②一一行

③8×20

④数紙貼合

陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇四頁

⑤『集成』II一二〇頁 図版六七。

⑥

└揭？如乾木贏□┌

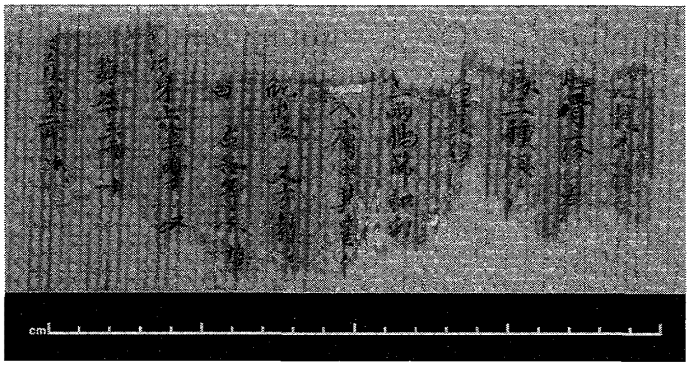
□骨疼　若□
□緣三種俱□□
□爲盧俱□□
□一兩揭篩和乳□
□入膚中其患□□
□瓶出血　又方勃分？□
□□　右各等分揭□
□□法身上塗摩　又□
□　黄芩三兩　□□
□□煎取二升患□

「猪飼按」裏面貼り合わせ紙片に耆婆の文字あり。

3551

薬方書断片

①漢語
②一五行
③6.7×21.5
④罫あり。朱点あり。数紙貼合
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇五頁
⑤『集成』II 一二二頁 図版六七
⑥

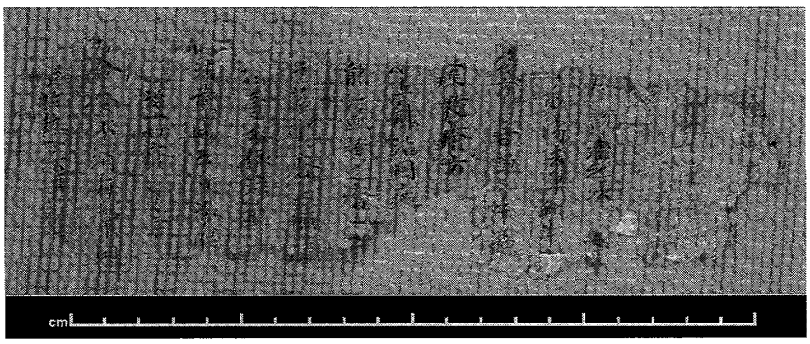


□□黄色┐
□□發若並赤┐
□處熱此緣痰黃┐
□今説治之法・□┐
□□煎湯去滓和牛乳？┐
□處方　甘草　牛蘇┐
□痰發瘡方┐
□□上能治因痰┐
□能治血黃之瘡・┐
□牛蘇裹瘡上能治┐
□右等分依法煎湯┐
□依法煎湯平旦冷服┐
□治一切瘡・又方┐
□□令食不消每常因┐
□體？往熱其種赤□┐

「猪飼按」牛蘇は牛酥である。牛酥はチーズのようなものか。「・」は朱点である。墨色に近い。

3617　仏教関係文書断片（薬方書）

①漢語
②三行

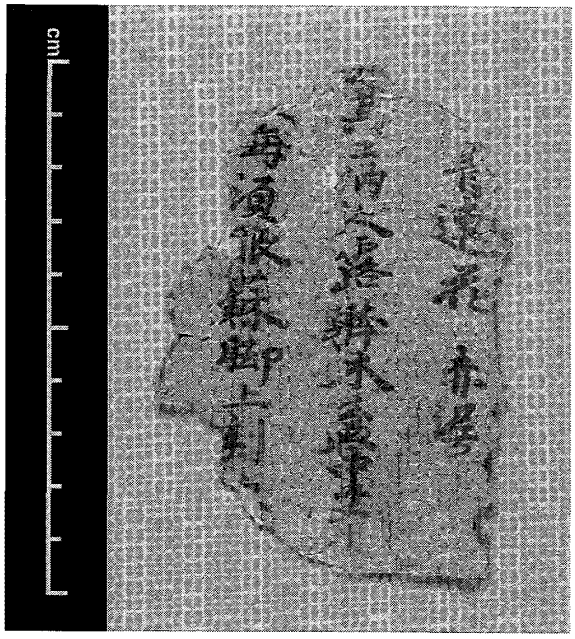


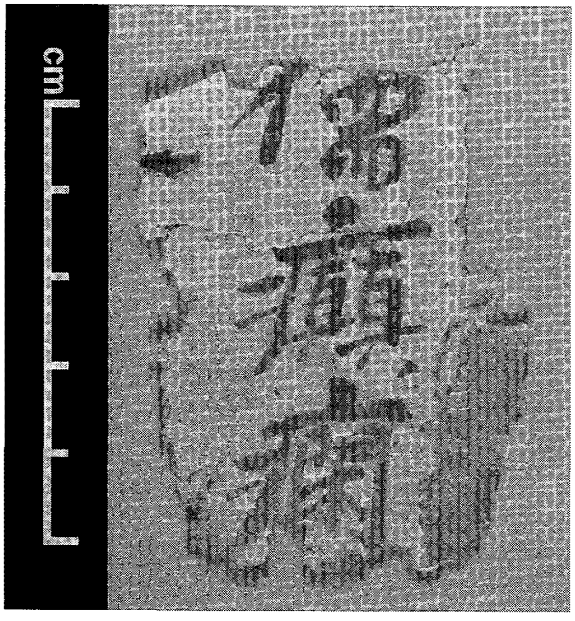
③10.7×6.3
④仏教医学か？
⑤『集成』II 一三四頁 図版なし
⑥
┐青連花　赤泥┌
┐□其病人露躰？木盆中坐┌
┐人？毎須服蘇脚上刺血？┌
「猪飼按」蘇は牛酥か。「脚上刺血」は、刺絡である。一〇四〇七号文書に青蓮蕚、蘇あり、似る。

3622

性質不明文書小片

①漢語
②一行
③6.2×4
④
⑤『集成』II 一三四頁 図版なし
⑥
┐儒癲癇┌
「猪飼按」「癲癇」の語彙。





3650

性質不明文書

①漢語
②三行
③5.2×8
④
⑤『集成』II一三八頁 図版なし
⑥

└□┌
└□二年病爲┌
└即？敏美？是人┌

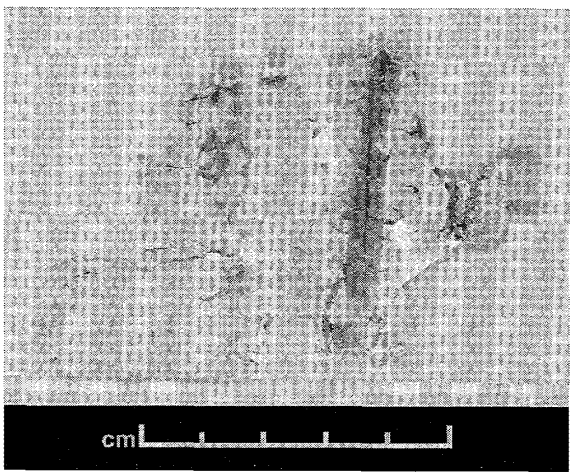
「猪飼按」二年病の語彙。行書。不明白

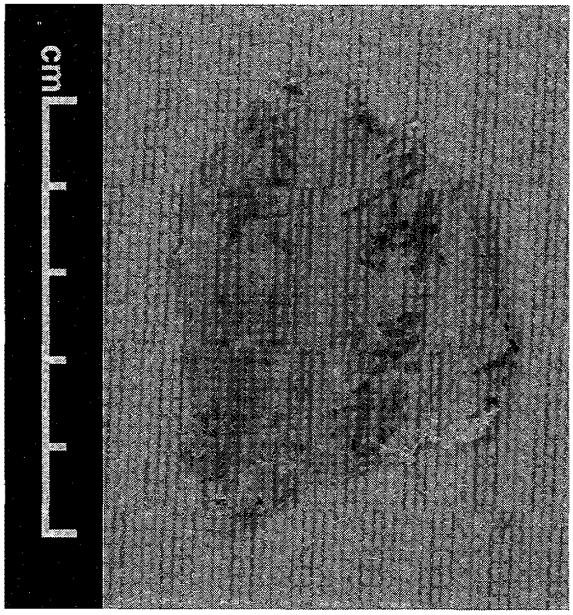
3651

性質不明文書小片

①漢語
②三行
③5.5×3.5
④
⑤『集成』II一三八頁 図版なし
⑥

└□□┌





└□多棘　温移□┌
└□失發　羅佛┌
「猪飼按」温移の語彙。仏書か。不明。

3706

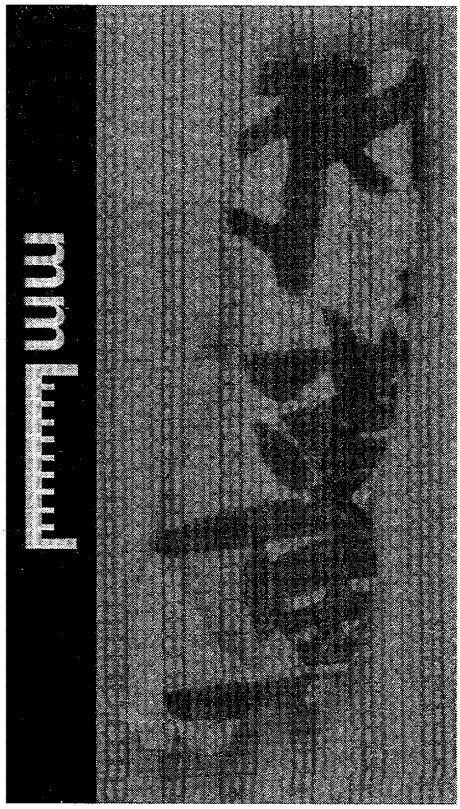
性質不明文書小片

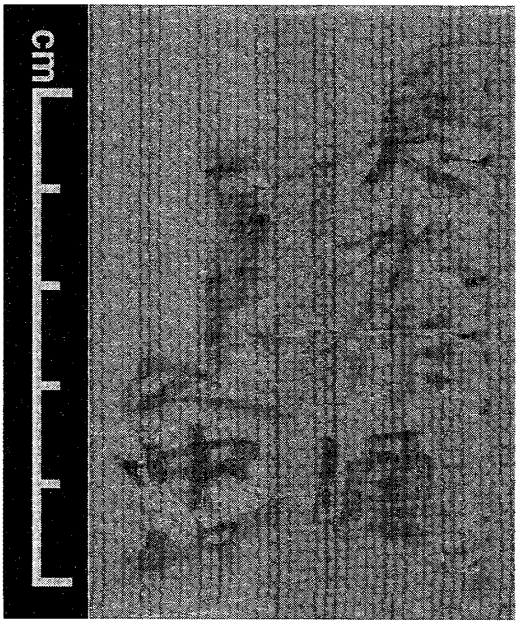
①漢語
②一行
③4×1.5
④
⑤『集成』II一四一頁 図版なし
⑥
└□薑┌
「猪飼按」小田は「木?薑」と読むが不明。

3726

性質不明文書小片

①漢語
②二行
③5.4×3.5
④
⑤『集成』II一四四頁 図版なし





⑥

□換水作酒□

□□□之中□□

「猪飼按」「之中」を小田は「人中」と読む。「人中」とも読めるか。

3730　性質不明文書小片

①漢語

②三行

③5.5×5

④

⑤『集成』II一四四頁　図版なし

⑥

□□□

□□苫菴□

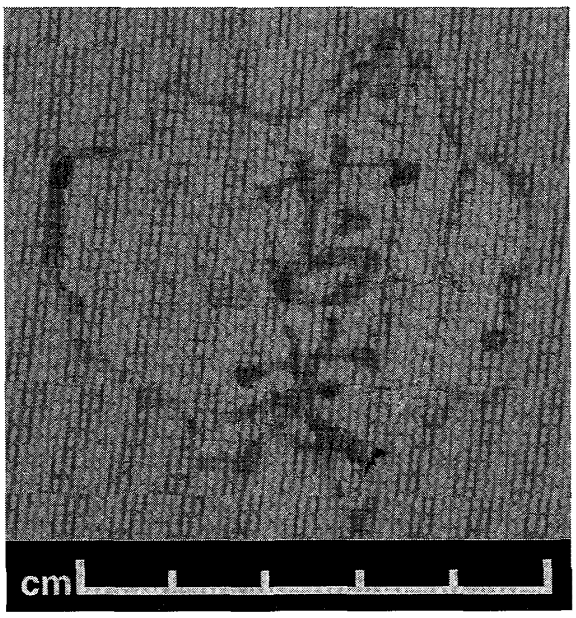
□□□

「猪飼按」「苫菴」を小田は「苫？茶？」と読む。

3786（一）　紙表　西州用練買牛簿　紙背西州典馬思忠儚

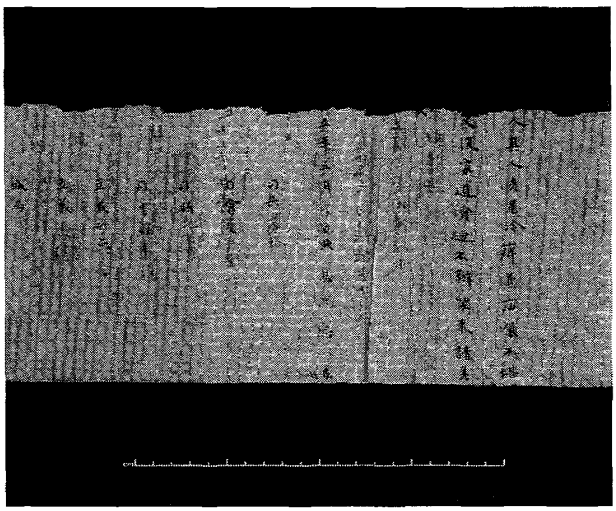
紙表（略）

紙背



①漢語
②三行（部分のみ）
③
④東洋文庫（一九九〇）No.1294,1296,1530,2268,2288,2510,2512,2888,2889,3090
⑤『集成』II一五四頁 図版三七・三八〔録〕池田『籍帳』三五二頁
⑥
人其人先患冷痺兼疝氣不堪
又復家道貧迫不辦装束請差
□

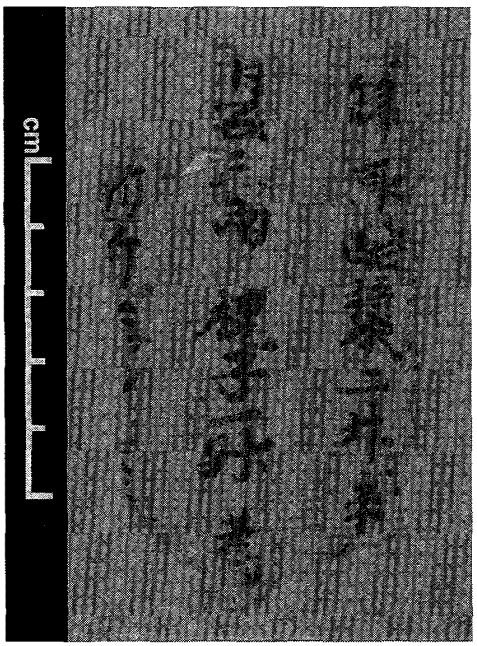
「猪飼按」図版三八にある。文書の一部分である。免役文書という。免役文書であるが、役をのがれる理由の疾病診断が示されている。この免役理由の診断は誰がしたのであろうか。



3820

計量文書断片（薬方書）

①漢語
②三行
③8.2×4.5
④
⑤『集成』II一五八頁 図版六四
⑥



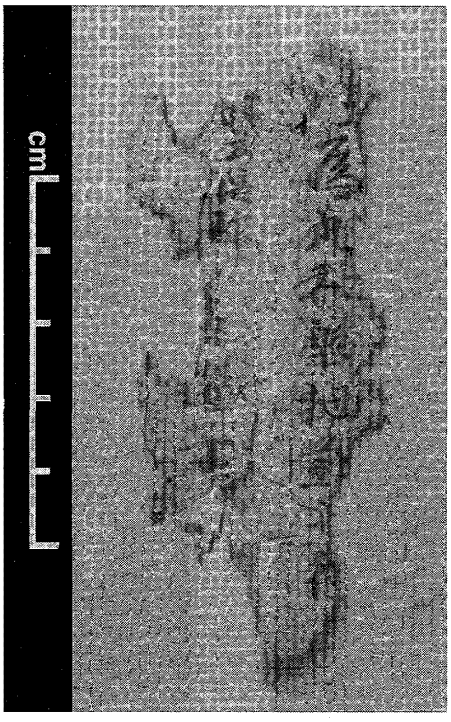
□篩取酪漿二升半□
□□石三兩　槐子一升　□
□□三兩？□

「猪飼按」薬方書である。裏面文書は透かして読む。

裏面文書「□取□□者僧中」

3866　薬方書断片

①漢語
②二行
③8.2×2.6
④陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇六頁
⑤『集成』II一六五頁　図版六七
⑥



□沙爲丸和酸捂煎亦□
□此云陪酢　石榴子　□

「猪飼按」「此云陪酢」は注の文。細字行である。石榴子は石榴であると思われる。

3880　性質不明文書小片

①漢語
②五行

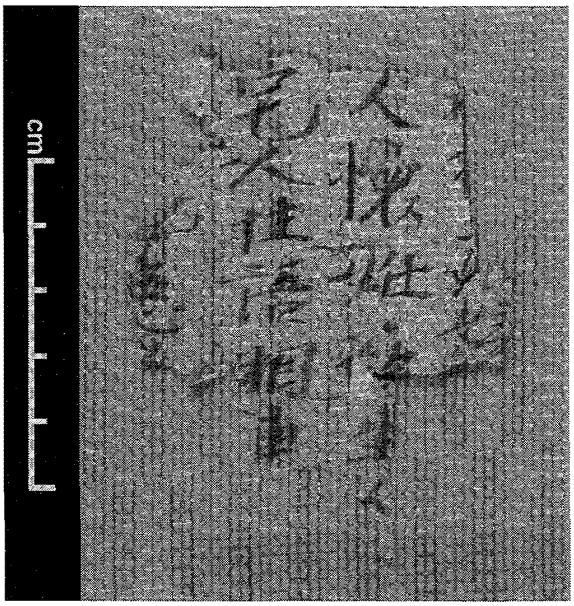
③2×6
④
⑤『集成』II一六七頁 図版九一
⑥
┐酥？合二素┌
┐□薩□┌
┐薬┌
┐□喝賀┌
┐□理┌

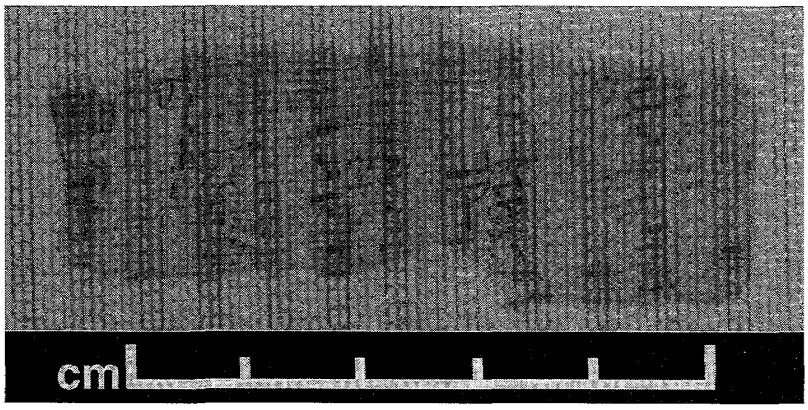
「猪飼按」「二合」は注の文、細双行である。内容不明。薬方か。

3943

性質不明文書小片

①漢語
②四行
③7.5×5.7
④
⑤『集成』II一七六頁 図版なし
⑥
┐人？欲？□婦┌
┐人懐妊欲生兒？┌





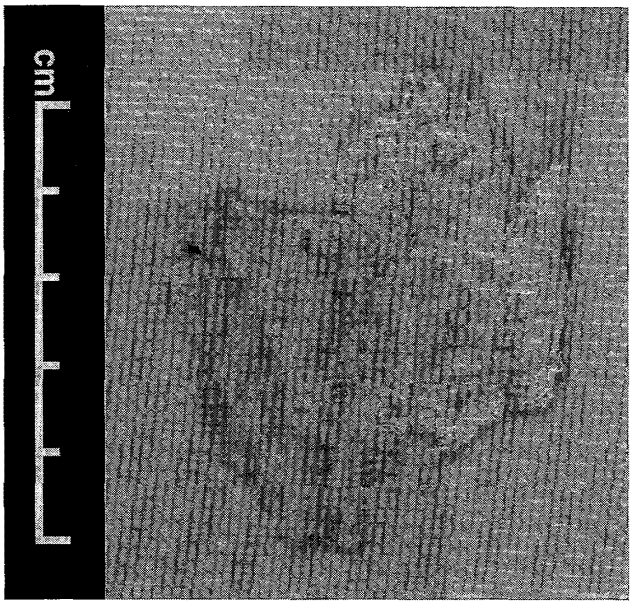
└宅人性語相連？┐
　└□患□┐

「猪飼按」三二二〇号文書に内容は似る。薬方書より占い文書か。

3976　薬方書小片

①漢語
②三行
③5.5×4.5
④罫あり。朱点あり。
陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇六頁
⑤『集成』II一八一頁　図版八三
⑥

└・縮所□┐
└搗篩訖准□┐
└酒服┐



3977　薬方書断片

①漢語
②六行

「猪飼按」「縮所」は縮所密と続くか。「服」は、小田は眼と読むが誤りと思われる。「・」は朱点である。やや墨色に近い。

③4.5×6

④罫あり。朱点あり。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』二〇六頁

⑤『集成』II一八一頁 図版六七

⑥

□□□

□□牛黄□

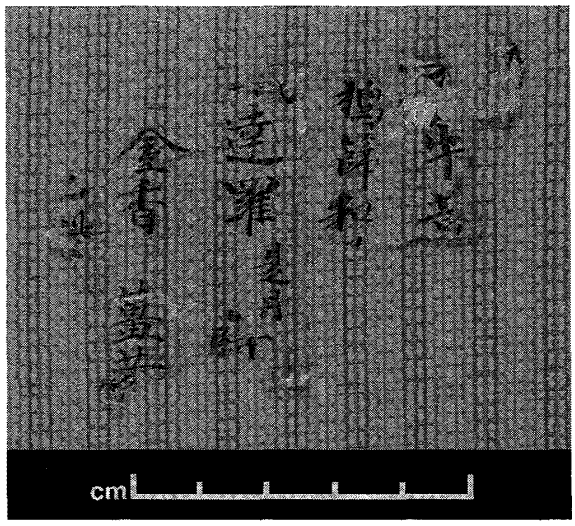
□搗篩和□□

□□達羅是月・阿□

□金香　薑黄□

□□紫？□

「猪飼按」「是月」は注の文。細行である。「和□」は和羊か。和羊乳となるか。「金香」は、欝金香であると思われる。「・」は朱点である。墨色に近い。



3979

薬方書小片？

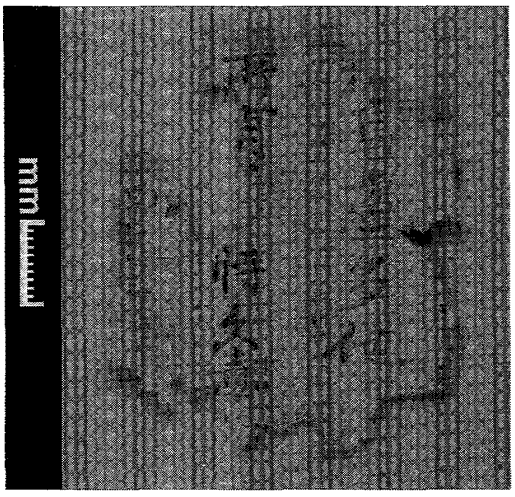
①漢語

②三行

③5×4

④

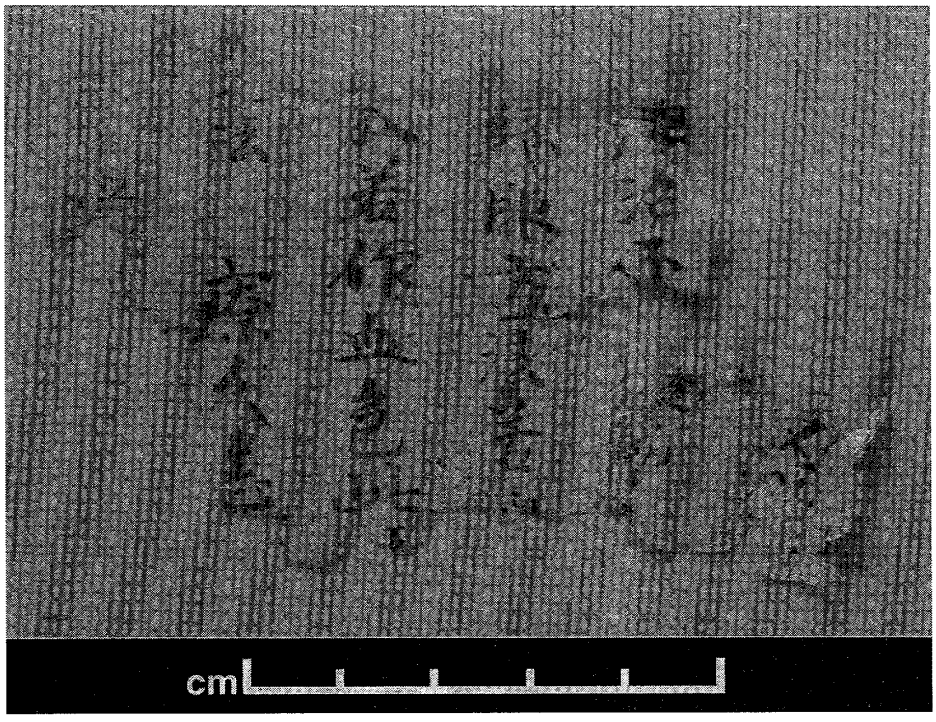
⑤『集成』II一八二頁 図版六七



⑥
└□烏盧多他┐
└所有□時久毒┐
└留？事？┐
「猪飼按」「烏盧多他」は不明。

4012　薬方書断片

①漢語
②六行
③6×7.5
④罫あり。朱点あり。
⑤『集成』II一八七頁　図版六七
⑥
└又┐
└□治不□篩？┐
└緣服方法・若密？┐
└□若作血色此□┐
└又？法　・療久患┐
└搗┐
「猪飼按」「・」は朱点である。やや墨色に近い。



4022

性質不明文書（薬方書）

①漢語第一片、第二片

②二行、一行

③13×7、4×3

④陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一八四頁

⑤『集成』II一八九頁　図版なし

⑥第一片

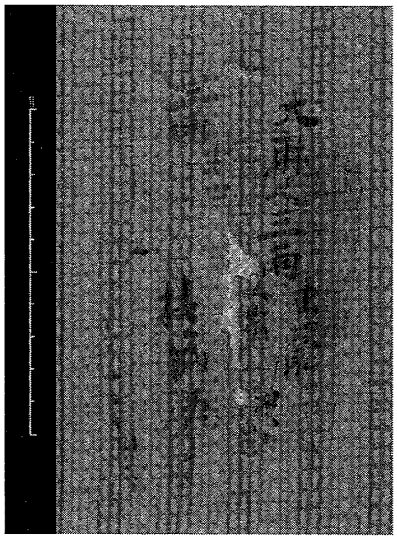
□大麻人三兩去皮取人熬□

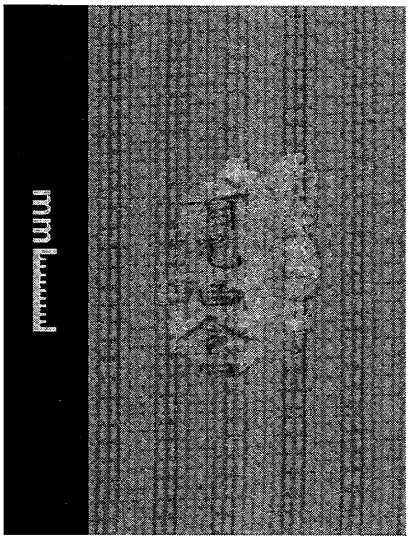
□二兩去心擣篩爲□

第二片

□耳光油令□

「猪飼按」「去皮取人熬」、「去心」は注の文である。「去皮取人熬」は細字行である。「人」は仁である。「大麻人」は「大麻仁」のこと。「皮」を小田は「彼」と読む。





4338

性質不明文書小片

①漢語

②二行

③5×5

④

⑤『集成』II二三六頁　図版なし

⑥

□□醫□
□□合犀□

「猪飼按」内容不明。薬方書か。

4363

薬方書断片

①漢語
②六行
③11×6.5
④罫あり。朱点あり。

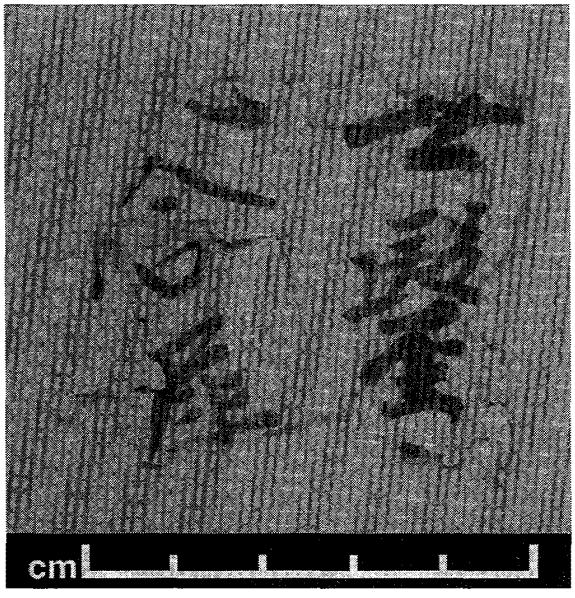
陳明『殊方異藥—出土文書與西域醫學—』二〇七頁

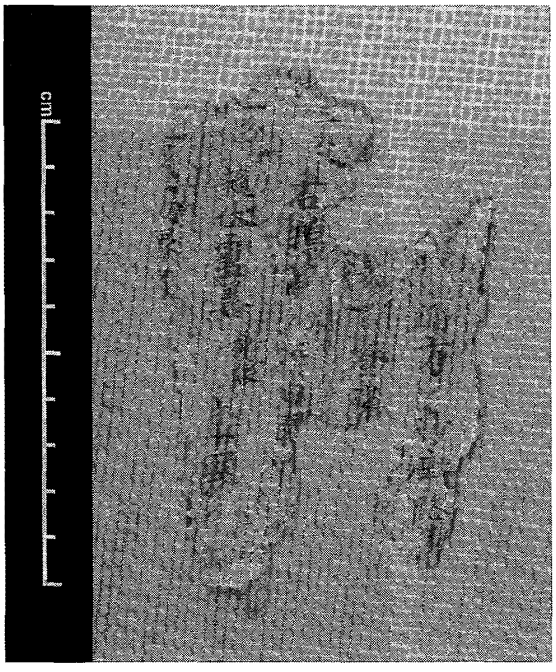
⑤『集成』II二四〇頁 図版六七

⑥

□□□□
□眼痛方　・沙摩路多□
□湯下密酋□
□□三分・右搗篩細研内眼中□
□二分蘇伏靈善釗銀辛頭塩黄□
□一□一切眼方□

「猪飼按」「・」は朱点である。やや墨色に近い。





「三分」「二分」「釗銀」は注の文、細字行である。

4384

仏書小断片

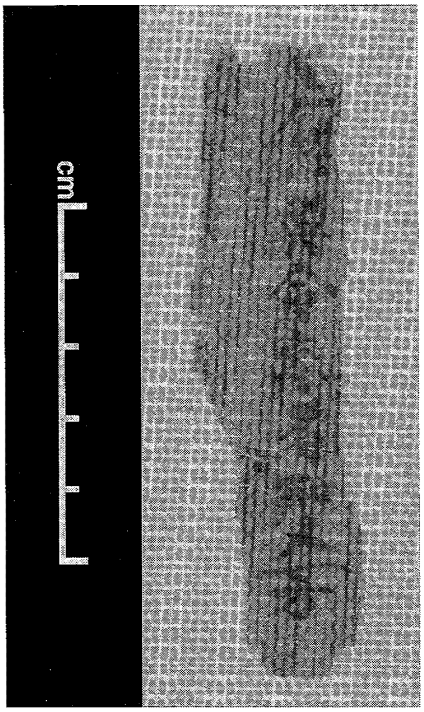
①漢語
②二行
③8.5×5
④
⑤『集成』II二四四頁 図版なし
⑥

└疾發動無恒自┌
└□□□□□┘
「猪飼按」医学書か。



4485

①漢語
②一行
③8.6×2
④罫あり。
⑤『集成』II二六一頁 図版
⑥



□愈莫？令疹？者知又一方□

「猪飼按」医学書か。「令」を小田は「命」と読む。裏面に「俗語」文字あり。

4933

物価文書

第一紙

①漢語

②一〇行

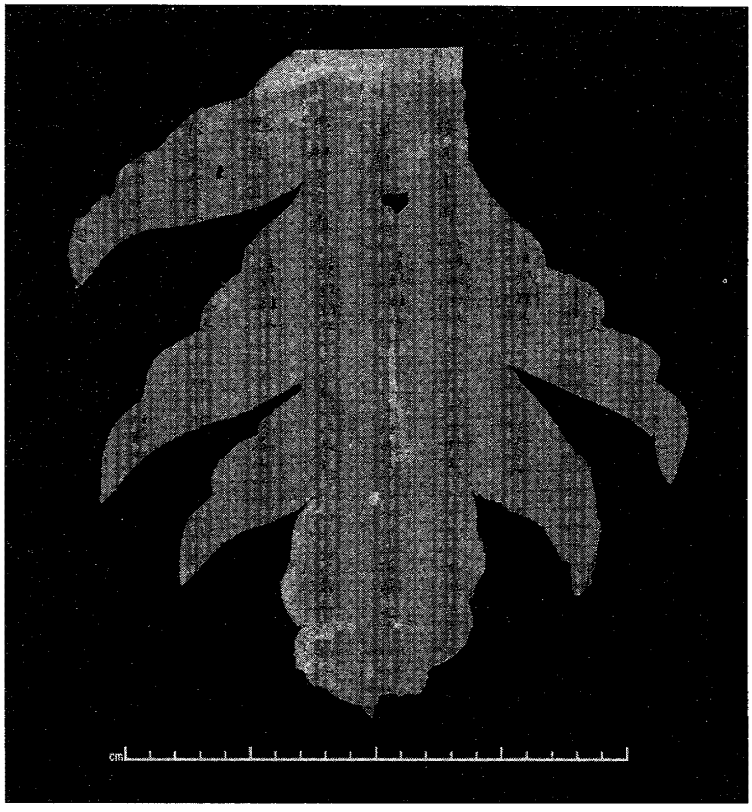
③27.0×23.5

④〔録〕池田『籍帳』四五六―四五七頁

⑤『集成』Ⅲ　図版六九頁・図版二二

⑥

□次□
□銭参文　文□
□上直銭肆文　次参文□
樓灰壹小兩　上直銭玖文　次捌文　下柒文
蕈解壹小兩　上直銭肆文　次参文　下貳文
鬼臼壹小兩　上直銭肆文　次参文　下貳文
鬼煎壹□□　上直銭肆文　次参□
松子壹小□　上直銭参文　次□　□文
□□布壹小□□　□次貳文□



└兩　上┐

第二紙（略）

「猪飼按」薬物の計量単位が小兩である。三〇九二号三〇九八号文書と綴合する。

5023　性質不明文書断片

A面

①漢語

②三行

③3.5×2.8

④

⑤『集成』Ⅲ一〇〇頁　図版なし

⑥

└□非虧生？□┐

└思溝濵取┐

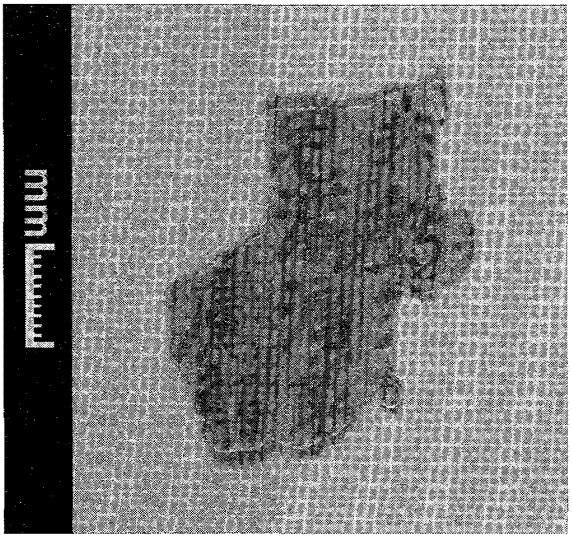
└慮甌┐

B面

①漢語

②四行

③3.5×2.8



④

⑤『集成』Ⅲ一〇〇頁　図版なし

⑥

└者殃□┐
└□□取三人□┐
└□日病死殃┐
└□東出□┐

「猪飼按」医学書か、占い文書か。「東」を小田は「車」と読む。

5405

A面　仏書断片（略）

B面　薬方書断片

①漢語

②七行

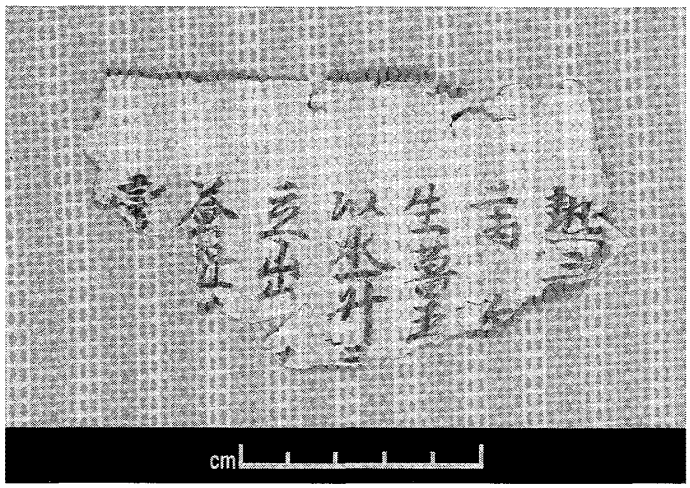
③6.2×11.2

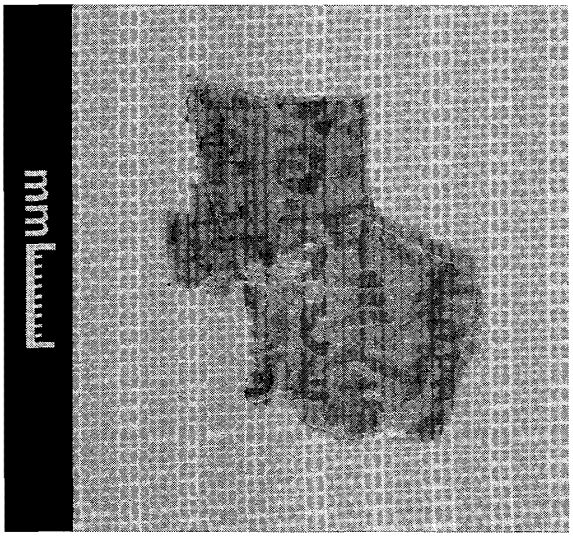
④罫あり

⑤『集成』Ⅲ一六三頁　図版四一

⑥

熱三┐
二兩　不？┐
生薑五┐



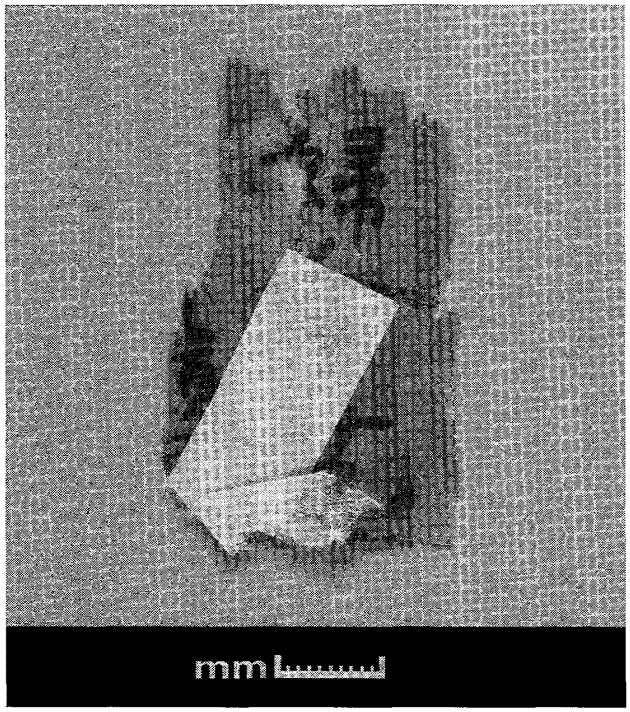


以水一升□⌈
立出　□⌈
益忸？⌈
變⌈
「猪飼按」B面楷書でこちらが表文書か。

5429　性質不明文書断片

A面
①漢語
②二行
③5.0×3.0
④
⑤『集成』Ⅲ一七一頁　図版なし
⑥
⌋婦人年廿九□⌈
⌋□□回⌈
「猪飼按」「□□回」は注の文、細字行である。

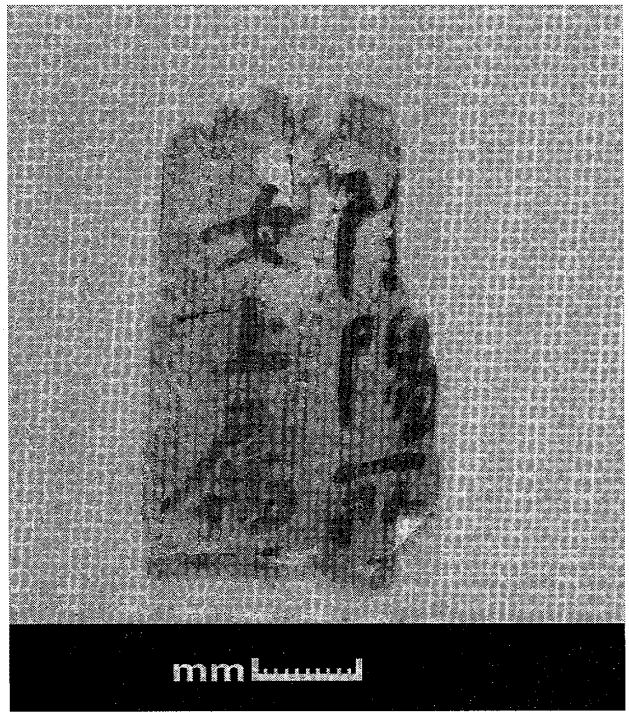
B面
①漢語
②二行

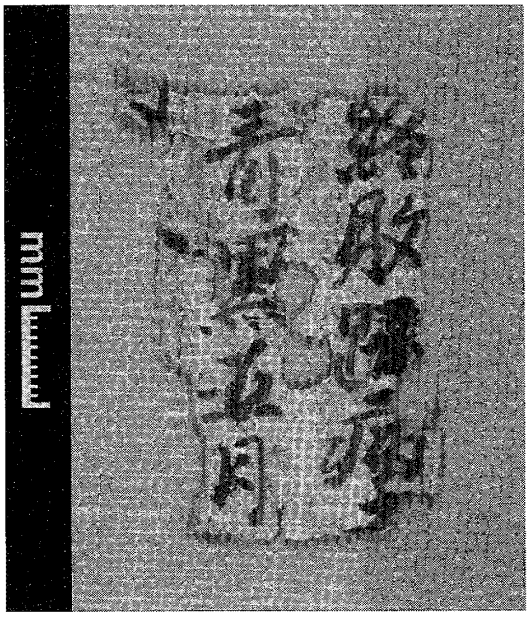


③5.0×3.0
④
⑤『集成』Ⅲ一七一頁 図版なし
⑥
陰陽所┌
女上屬┌
「猪飼按」医学書か。違うか。

5435

性質不明文書断片
A面（略）
B面
①漢語
②三行
③4.5×2.6
④
⑤『集成』Ⅲ一七三頁 図版なし
⑥
└終敗躊？病者？┌
└青黒五月┌
└又□┌





「猪飼按」医学書か。

5452　西州高昌縣順義郷籍

紙表（略）

紙背

①漢語

②五行

③6.5×10.0

④〔録〕池田『籍帳』二四八頁。紙背、経録断片

⑤『集成』Ⅲ一七八頁 図版三、紙背写真なし。

⑥

優姿□

陰持？□

奈女耆域？□

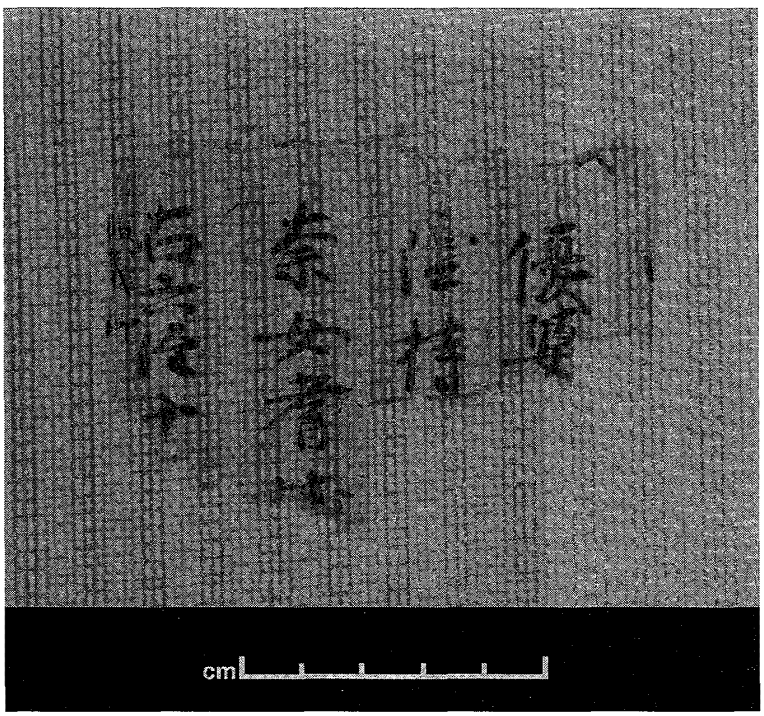
右六經十□

……

順義郷

「猪飼按」「順義郷」は異筆の字、紙表と同筆か。経典目録の断片である。

『奈女耆婆経』か。《佛說奈女耆婆經》後漢安世高譯（CBETA, T14, no. 554, p. 902, b3-5）は、インドの名医耆婆の出生に係わる伝記説話である。《陰持入經》（CBETA, T15, no. 603, p. 173, b2）



5458

性質不明文書断片

A面（略）

B面

①漢語

②三行

③7.0×7.2

④

⑤『集成』Ⅲ一八〇頁 図版なし

⑥

└□□梨┐
└欖三窠┐
└貴體┐

「猪飼按」医学書か。欖は橄欖か。A面は道教文書か。

5467

（1）医薬関係文書断片（両面）

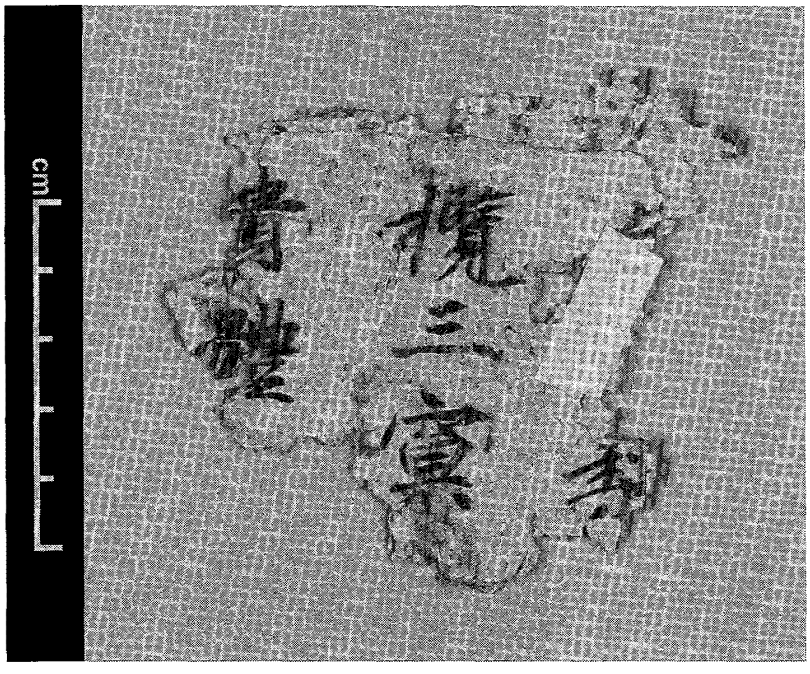
A面

①漢語

②四行

③5.0×8.5

④



⑤『集成』Ⅲ一八三頁 図版四一

⑥

└無毒主┌

└摩之又治淋┌

└澤 衣中乃有□、小兒淋閉取 ┌

└寒 大寒 ┌

「猪飼按」「無毒主」「摩之」「寒」は朱字である。「衣中乃有□、小兒淋閉取」は注の文、細字双行である。「大寒」も注の文、細字双行である。

これは重要である。この文献は『本草集注』の一部分である。『本草集注』の衣魚と白頸蚯蚓の項目に対応するところである。概要を参照。

B面

①漢語

②五行

③5.0×8.5

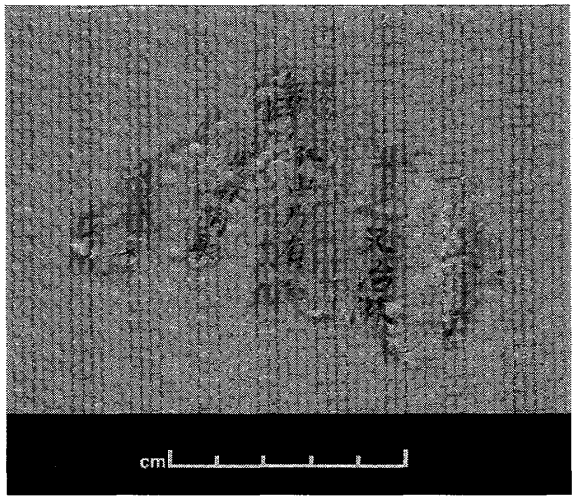
④

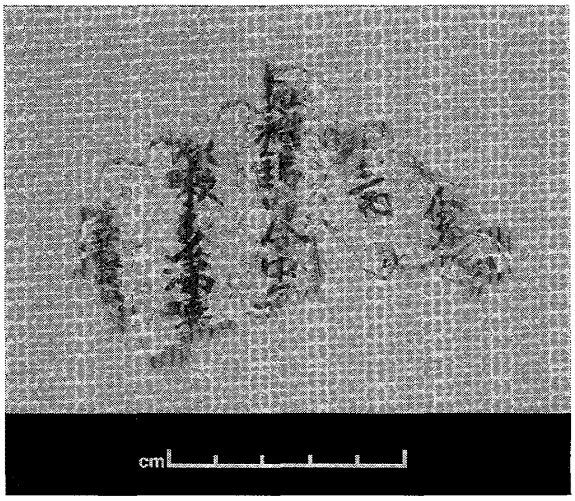
⑤『集成』Ⅲ一八四頁 図版四一

⑥

└人參一兩┌

└□三兩 生？┌





□如稠錫内令中毎？□
□欬嗽多涕唾□
□生薑四□

「猪飼按」「錫」は「餳」の間違いか。調餳であるか。『外台秘要』巻十に「廣濟療上氣肺熱欬嗽多涕唾方」に「白前（四分）、生麥門冬（十分去心）、貝母、石膏、甘草（炙）、五味子、生薑（各四分）、黄芩（五分）、杏仁（四十顆）、淡竹葉（切一升）、白蜜（一匙）」に似る。『廣濟方』の引用か。

5467

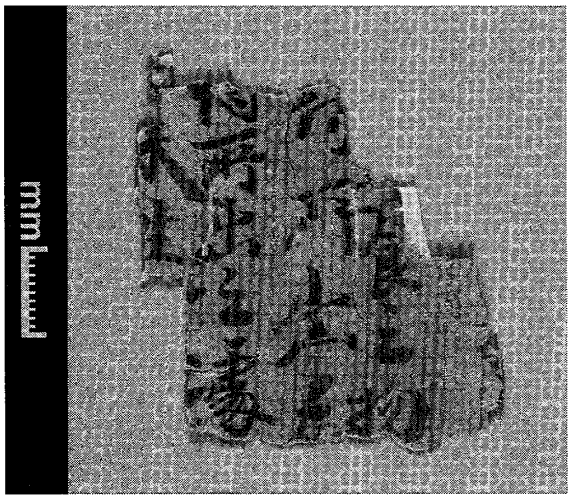
（2）性質不明文書断片（両面）

A面

①漢語
②四行
③4.0×3.8
④
⑤『集成』Ⅲ一八四頁　図版なし
⑥

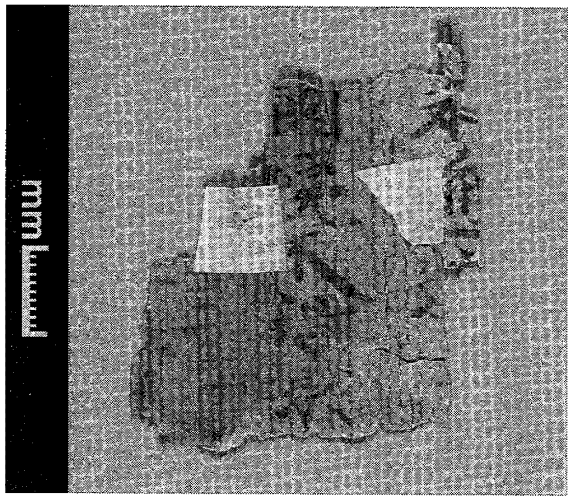
□食之物□
□何所出□□
□何所出之處□
□□生□

B面



①漢語
②三行
③4.0×3.8
④
⑤『集成』Ⅲ一八四頁 図版なし
⑥
┘永通□┌
┘明椀？杯？得求┌
┘□廿人┌

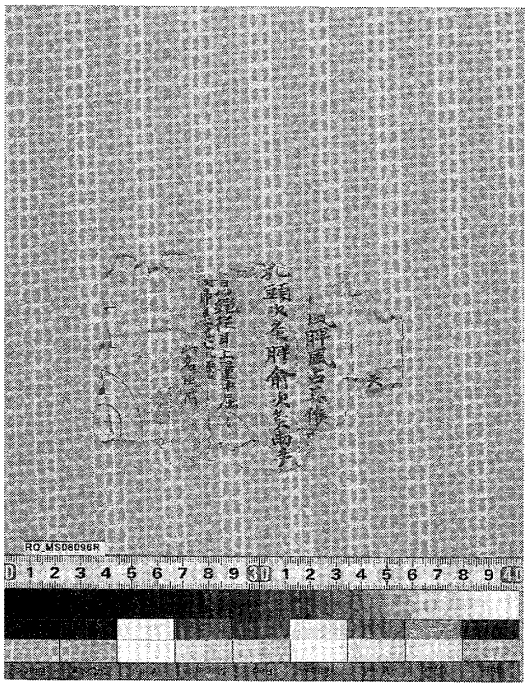
「猪飼按」医学書か。



8096

唐抄『鍼経』関係文書断片（両面）

①漢語
②六行
③8.2×11.5
④
⑤『集成』Ⅲ二三六頁 図版四七、『図譜』下、経藉(4)-(2)（吐峪溝）。
裏に「経四ノ二」のラベル貼付
⑥
大┌



□風脾風占其侯□□
□乳頭次灸脾俞次灸兩手□
□日？以縄從耳上量中屈
□頭即是其穴處
此名風府

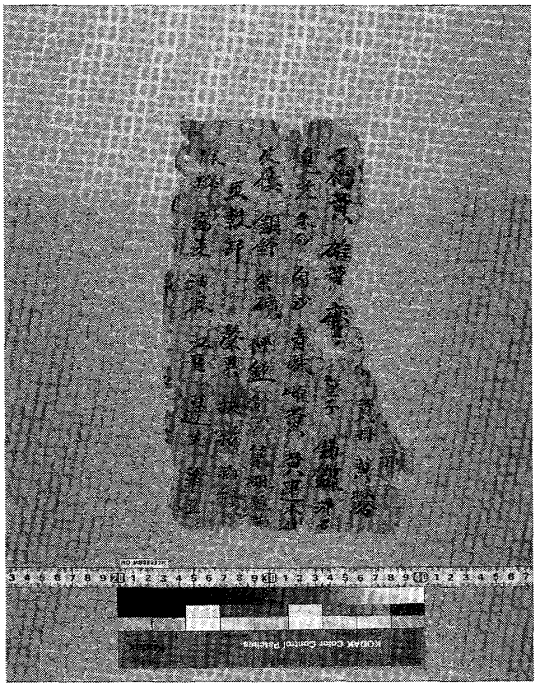
「猪飼按」図あり。経穴を描くと思われる。図は人体背部の図であろう。「風府」の経穴を朱線で示す。文献右の「大」も経穴である。朱線で示す。

8097

本草関係文書断片

①漢語
②八行
③27.2×15.6
④
⑤『集成』Ⅲ二三六頁 図版四一、『図譜』下、経藉(4)-(3)（吐峪溝）。
裏に「経四ノ三」のラベル貼付
⑥

□部□
□□　黄丹　黄礬
石榴黄　雄黄　密□　笠子　錫鑞　滑石
皂莢　朱砂　内沙　青緑　黄連　木通□



皮屨　銅鉢　紫礦　枰錘　針沙　筆硯　麵糊

五穀部　　槃粟　粳糯　稲穄

糠粃　蕎麦　油麻　江豆　邊豆　蓽豆

□部　　□□□

「猪飼按」本草目録。「内」を小田は「肉」と読む。「内」は「硇」である。「枰」は「秤」である。「槃」は「穀」である。邊はくさかんむりか。

8116　唐鈔古書断片

①漢語

②二行

③12.5×4.0

④

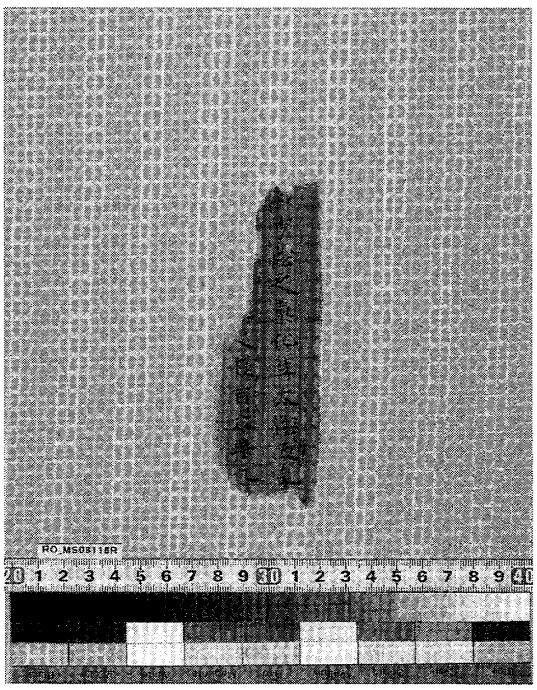
⑤『集成』Ⅲ二四二頁 図版四六、『図譜』下、経藉(9)（吐峪溝）。裏に「経九」のラベル貼付

⑥

□右少陰之氣化生太陰五氣□

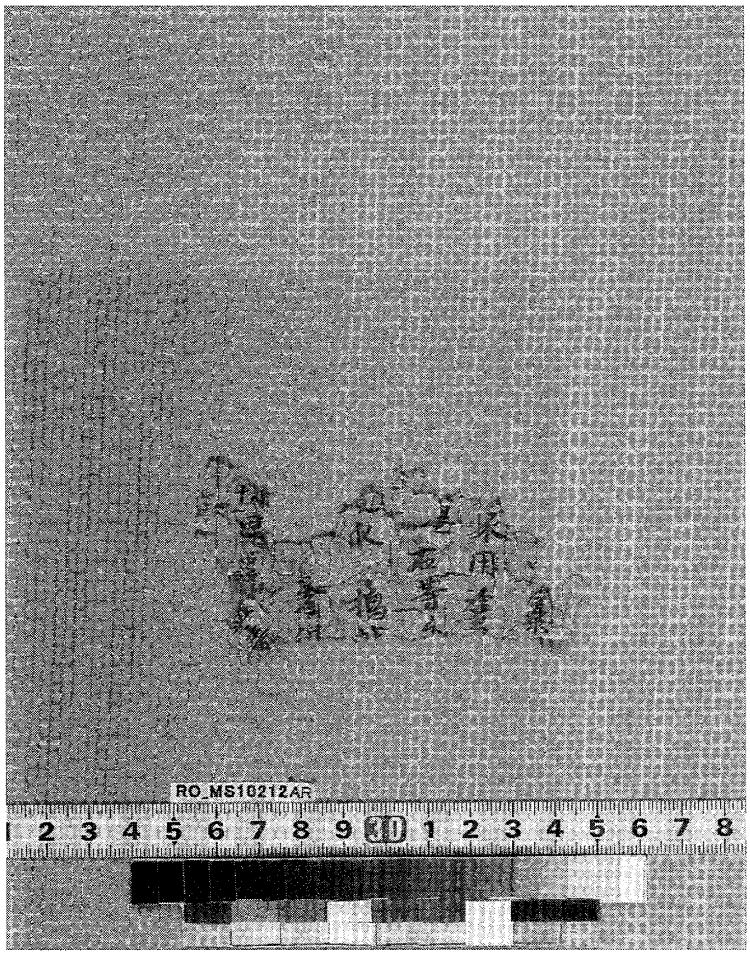
□□之極百六乗九□□

「猪飼按」素問に関係するか。



10212　薬方書

①漢語
②六行（A）、一行（B）、一行（C）
③
④朱点あり。罫あり。
⑤別置「極小断片」
⑥（A）
└□□藥┐
└尿用塗┐
└是・右等分┐
└又爪？　・搗篩┐
└奢得┐
└□切？鬼蠱毒┐
（B）└得┐
（C）└單羅？┐



「猪飼按」現在、（A）（B）（C）に別れている。薬方書である。「・」は朱点である。「是」は双行の注の文。10212、10407、10460、10513、10548、10580は同筆か。（B）（C）写真略。

10222　薬方書

①漢語
②四行

③

④

⑤別置「極小断片」

⑥

└肚鄤難┌

└□坐在┌

└□蘇┌

└後始┌

「猪飼按」薬方書であるか。「蘇」「肚？」「坐」

10241　薬方書

①漢語

②一行

③

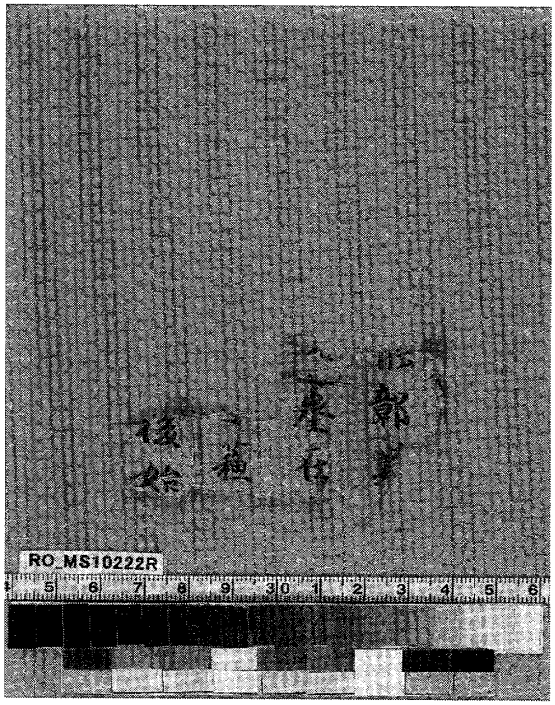
④紙多層。

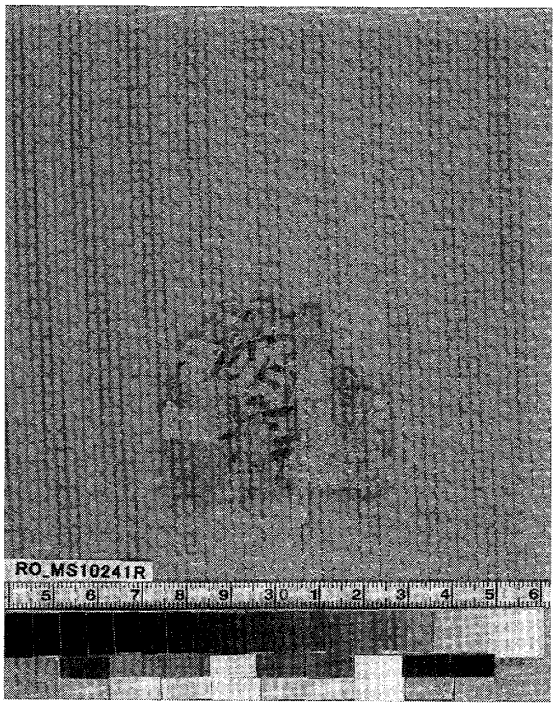
⑤別置「極小断片」

⑥

└處？痔┌

「猪飼按」薬方書であるか。「處？」「痔」。





10243　薬方書

①漢語
②二行
③
④背景に朱印在り
⑤別置「極小断片」
⑥

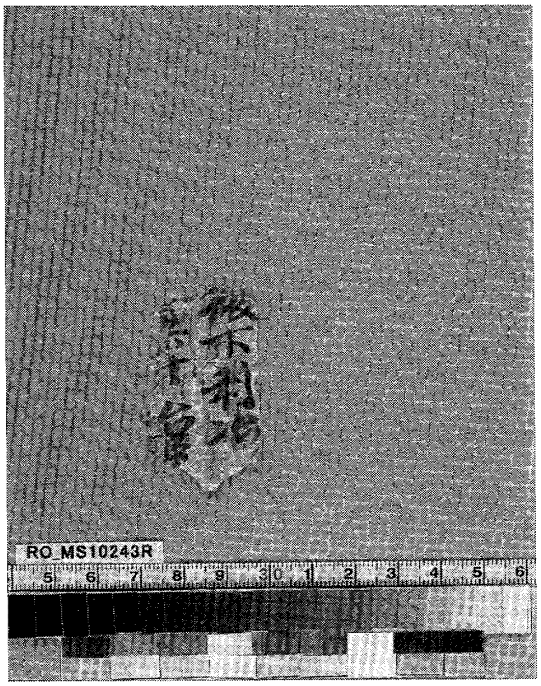
┐後下利冶（治？）□┌
└□□冶（治？）□┘

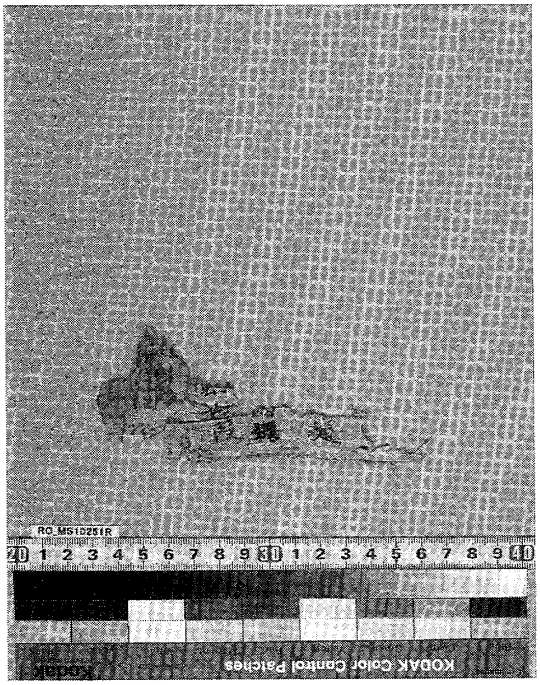
「猪飼按」薬方書であるか。「下利冶」は「下痢治」の意味であると思われる。朱印は不明。

10251　薬方書

①漢語
②四行
③
④
⑤別置「極小断片」
⑥

┐麴





□□嬲

□□拾叚

□□清□

「猪飼按」薬方書であるか。「麴」「嬲？」内容不明。

10269　薬方書

①漢語

②三行

③

④罫あり

⑤別置「極小断片」

⑥

□□□子□□□

□辛？頭？塩　遮味□

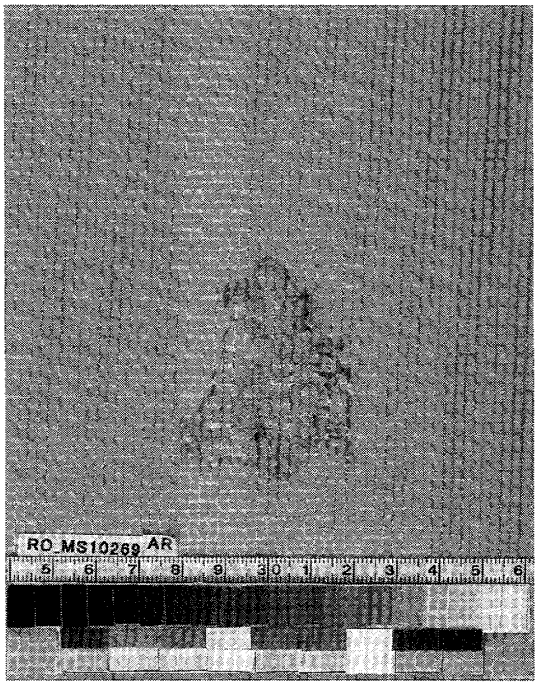
□□□

「猪飼按」薬方書であるか。10277号「塩」の字体が同じ。処方か。

10271　薬方書

①漢語

②三行



③

④罫あり

⑤別置「極小断片」

⑥

┘都息下明？□┌

└壊時巳下就壊┌

└□□□┌

「猪飼按」薬方書であるか。仏典か。

10277　薬方書

①漢語

②二行

③

④朱点あり。

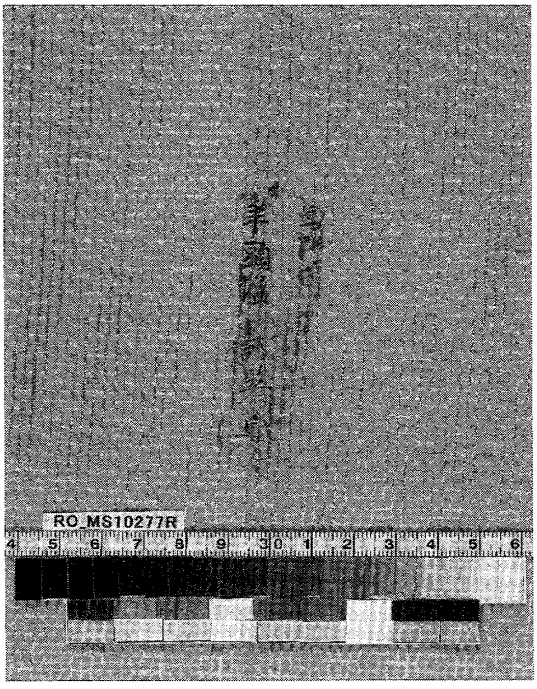
⑤別置「極小断片」

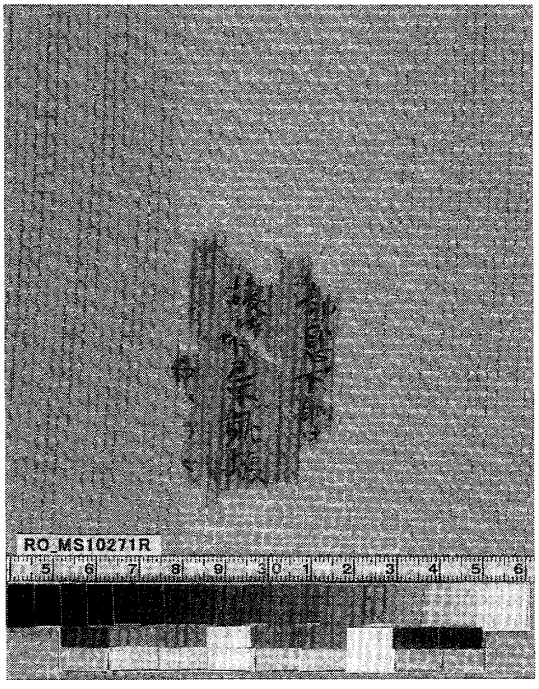
⑥

└烏陀□┌

└□辛頭塩　・訶煞　烏┌

「猪飼按」薬方書である。「・」は朱点。10269号「塩」の字体が同じ。





10312　薬方書

①漢語

②三行

③

④朱点あり。

⑤別置「極小断片」

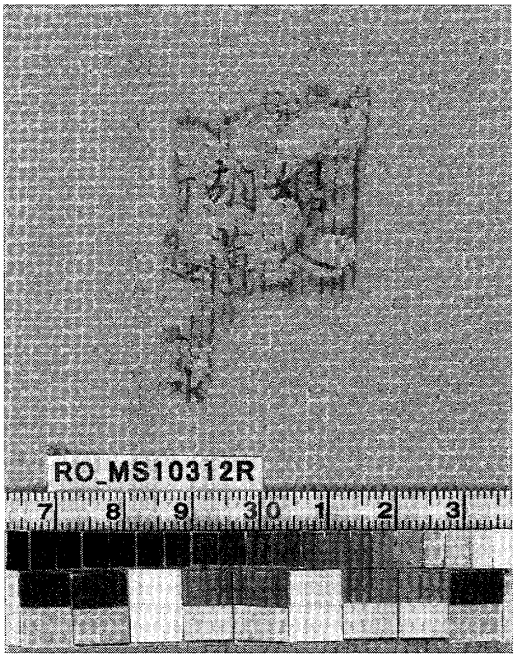
⑥

婦人□□

胡薄□

□□・水□

「猪飼按」薬方書である。「・」は朱点である。10508号文書の右に繋がるか。



10313　薬方書？

①漢語

②一行

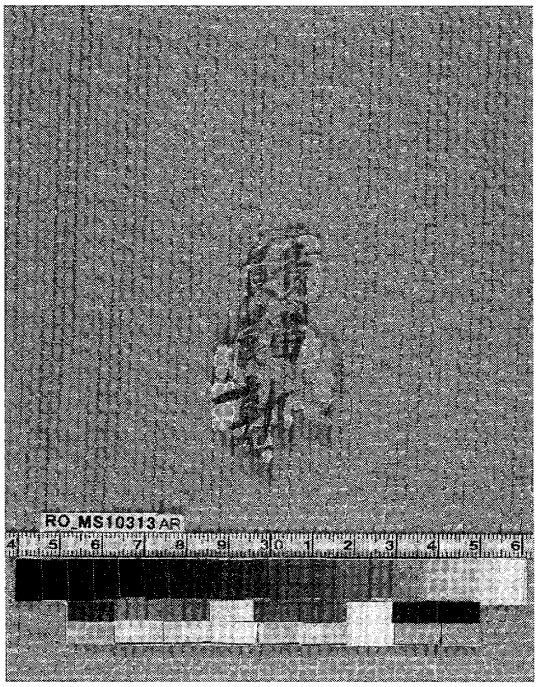
③

④

⑤別置「極小断片」

⑥

□饋餾熟□



「猪飼按」薬方書であるか。不明。

10407　薬方書

①漢語

②四行

③

④罫あり。朱点あり。

⑤別置「極小断片」

⑥

□青蓮萼　蘇摩？郁？□

□・各等分搗篩和羊□□

□・右搗□

□□尿□

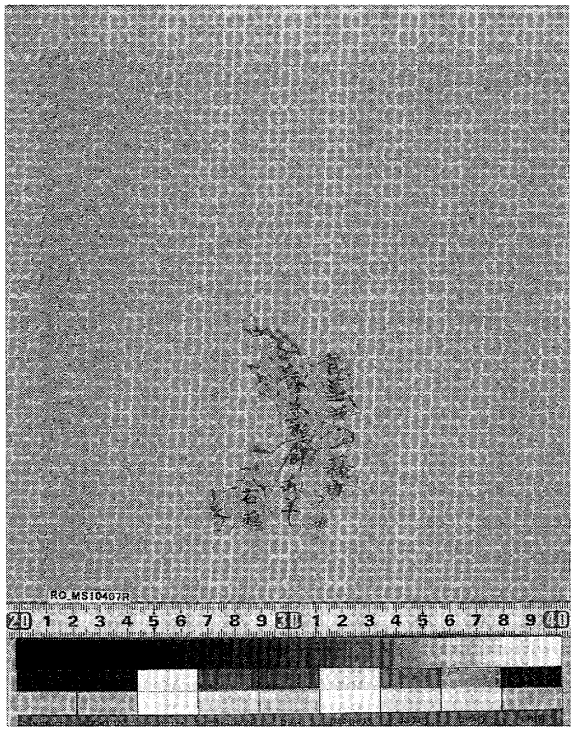
「猪飼按」薬方書である。「・」は朱点である。10212と同筆か。「右」「搗」「尿」が似る。1390号文書に「蘇摩郁花」とある。

陳明『殊方異藥―出土文書與西域醫學―』一八八頁の旅博七五号医方文書に似る。

郭富純王振芬『旅順博物館蔵西域文書研究』一九五頁（一五二三―七―七五号文書）

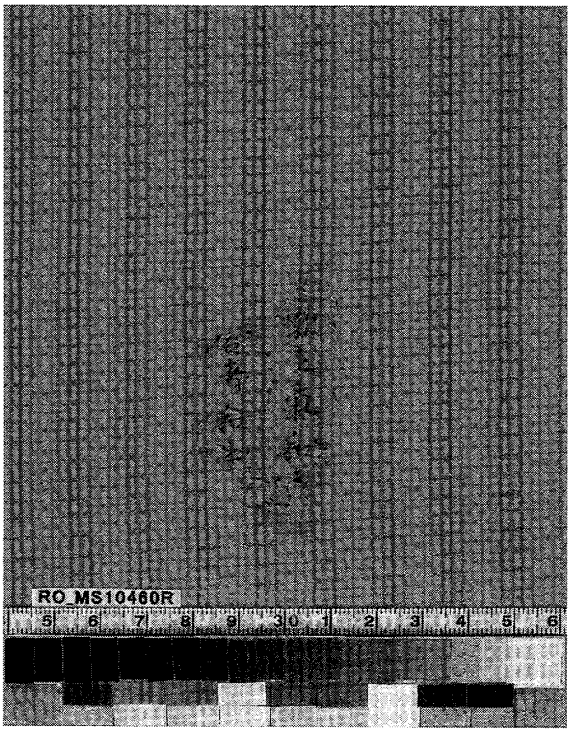
10460　薬方書

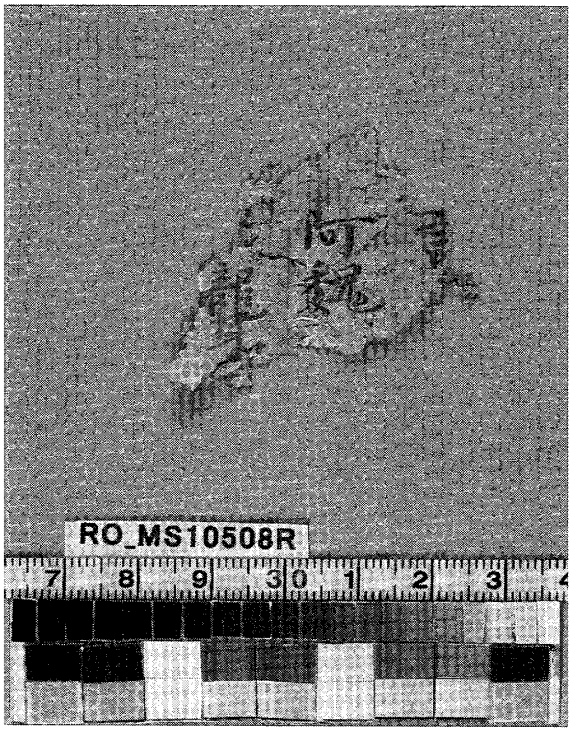
①漢語



②二行
③
④罫あり。
⑤別置「極小断片」
⑥
┘□嗽上氣和□┌
┘□者和牛┌
「猪飼按」薬方書である。１０４０７の「和」の字体が似る。

１０５０８　薬方書
①漢語
②三行
③
④罫あり。
⑤別置「極小断片」
⑥
□□┌
□阿魏┌
□聾□┌
「猪飼按」薬方書である。１０３１２号文書の左に繋がるか。





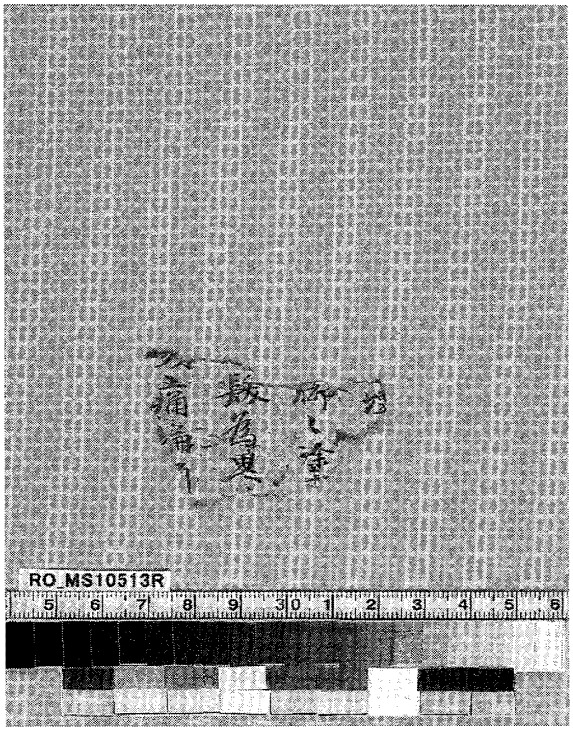
10513　薬方書

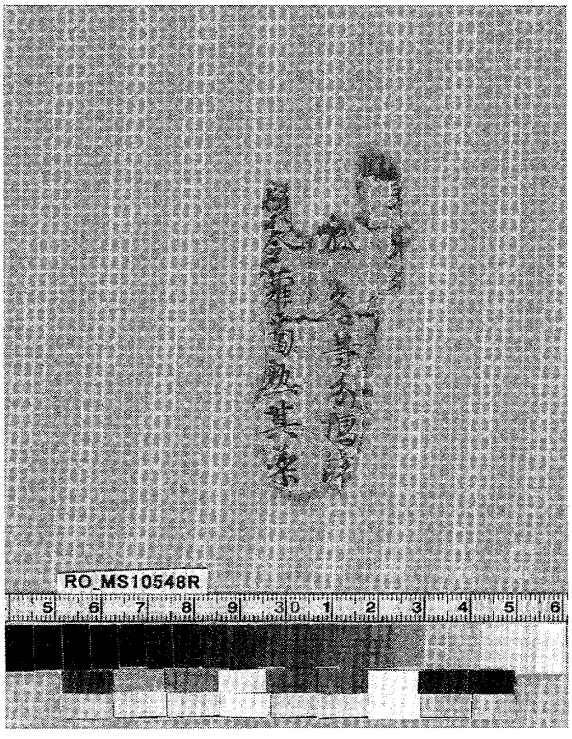
①漢語
②四行
③
④罫あり。
⑤別置「極小断片」
⑥
└塩？┐
└脚ゝ塗┐
└髪爲黒┐
└痰痛偏？頭？┐

「猪飼按」薬方書である。

10548　薬方書

①漢語
②三行
③
④罫あり。朱点あり。
⑤別置「極小断片」
⑥





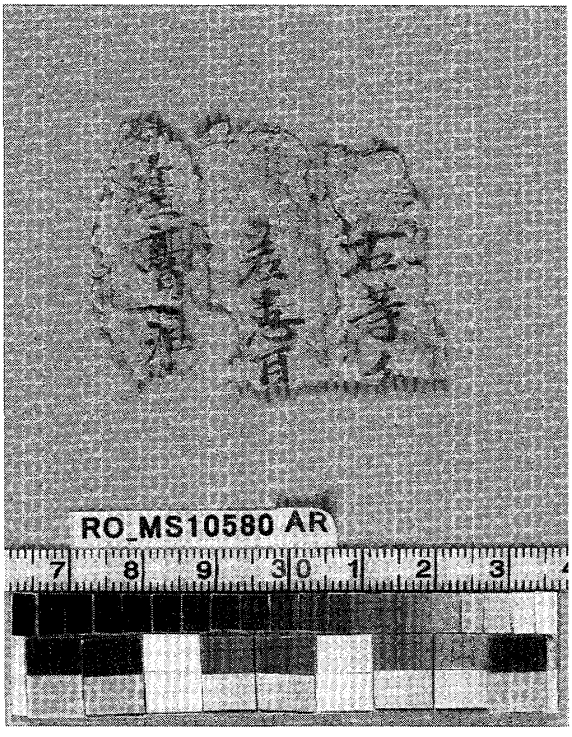
└□□□□┌
└底・各等分掲篩
└焼令蘿蔔熟其藥┌

「猪飼按」薬方書である。「・」は朱点である。１０２１２の「藥」「掲」「等」の字が似る。

１０５８０　薬方書

①漢語
②三行
③
④罫あり、朱点あり。
⑤別置「極小断片」
⑥
└□　・右等分┌
└□　・若患耳┌
└□塗膏油┌

「猪飼按」薬方書である。「・」は朱点である。１０５４８の「等」の字が似る。１０２１２の「右」「等」の字が似る。



１０６６８　物価文書

①漢語
②一行

③

④

⑤別置「極小断片」

⑥

入買薬價中止傳□

「猪飼按」物価文書の一つ。１５０２文書と同文書類。資料現物不明につき調査できず。

（猪飼祥夫）